
エーヴェルハルトの血筋

Shin=Shin

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エーヴェルハルトの血筋

【Nコード】

N0614V

【作者名】

Shin=Shin

【あらすじ】

魔法学校に通うクライヴ・レミントンは、ある時学校の封印された魔導砲台の塔の存在に興味を抱く。まるで何かに呼ばれているように。こっそりと侵入した砲台の謎に触れたとき、クライヴは――

プロローグ

二百六十年前。

一人の青年が、敵地の中心に立っていた。

青年は、自分の身分を偽って自国に銃を向けていた。

「今こそ、そのときだよ、兄上」

青年は呟いた。同時に青年の全身に紅く描かれた魔導陣が光りだす。禍々しい程の紅い光は、周囲の兵士を驚かせた。ある兵士は恐れて逃げ出し、ある兵士は青年を危惧する。

「大丈夫かね、君」

駆け寄ってきた青年の上官は、青年に尋ねた。

「ええ、全て順調です」

青年は答えた。

上官の将校が、青年の光り輝く肌に触れようとした、そのとき――
世界が禍々しい紅に包まれた。

光が、あるもの全てを焼き尽くした。

次にやってきたのは衝撃波だった。

衝撃波が、あるもの全てを吹き飛ばした。

レベル七十級戦略魔道？ペルフェウルテ？――

魔道を発動した青年は、焦土と化した地に立っていた。

「終わったよ、兄上」

青年は満ち溢れた笑顔で周囲を見回した。

共に戦っていた敵兵は消えてなくなり、都市は全て土に還った。

「俺は、この戦争を終わらせた。兄上、俺はあなたの言うとおりにした。ほめてくれるか？ ほめてくれるよな、兄上だもんね」

青年は笑いをこらえることが出来なかった。

誰もいない荒野で、青年はひたすら高笑いした。

何故か、その眼からは大粒の涙が零れ落ちていた。

正しいことをしたまでだというのに、何故かとても悲しかった。

この作戦が終われば、戦争を終わらせた英雄として故国に凱旋できる。

遠い国境線の反対側で弟の帰還を待つ兄がいる。

「ああ、兄上、もうすぐ会える、会えるんだ」

青年はそう呟きながら、真っ黒い荒野を一人、故国に向かって歩いていった。

俺は、英雄だ。

？・封印された男

たぶん、僕は呼ばれているんだ。
そんな気がしてならなかった。

何かが僕の背中を押す。

ゆっくりと、でも確実に。

でも、押されているだけじゃない。

吸い込まれていくような感覚。

そこで呼んでいるのは、誰？

どうしてなのだろう。

こんなにも、僕が行かなければならないような気がするのは。
まるで、誰かに呼ばれているような気分。

まさか。

でもさ、それ以外に考えられないよね。

どうして？

だってさ、こんなにも僕はあそこに行きたがっているじゃない。
確かに。

珍しいよな。こんなにもひとつのことに燃えるの。

何かある気がするんだ。

そこで誰が僕を呼んでいるのか知りたいんだ。

僕は。

階段を昇る。

吸い込まれるように。

足が勝手に……。

ライヒシュタイン魔道学校の中心に位置する古城の最も高い塔は、
学校の城壁に近寄ってくる魔獣を追い払う為に魔道砲台が設置され
ていた。魔道砲台は円状の城壁の外を全て網羅することのできる射
程を誇っており、魔獣が接近するたびに強力な魔道エネルギーの砲

弾が瞬時に魔獣を追い払う。今のところ取り逃がしたことはない。きっと発射の引き金を引いている人間は、昔の軍人か何かのだろうというのが、専らの噂だった。

しかしそれは噂の範疇でしかない。結局のところ誰も魔道砲台について詳しく知る人間はいなかった。

かつて、魔道学校が出来た前から街として栄えていたライヒシュタインは、常に魔道砲台の恩恵にあずかって発展してきた。魔道学校として名と姿を変えた今でもその役割は変わっていない。過去に城壁が三度も作り変えられたにも関わらず、魔道砲台は決してその姿を変えることはなかった。

古城の魔道砲台について今まで一切触れてこなかった魔道学校が、今年になって突然魔道砲台に関する公式の見解を発表した。内容は？魔道砲台は無人で機能している？というものだった。

魔道学校最高責任者であるライヒシュタイン校長の発表であるそれについて言及は一切なく、噂が尾ひれをつけて手に負えなくなる前に片付けるとの学校の思惑は見事に成功した。また、魔道砲台にむやみに近づこうものならば、魔道砲台は今度はこちらを攻撃してくる可能性があるとの理由から、近づくことは一切禁止にされていた。古城には、魔道学校の教員たちが生活をしている。授業を行う教室や実験室は一切なく、あるのは職員室、教員用宿舎といった部屋ばかりだった。生徒は一回の職員室以外は原則進入禁止なので、天辺の魔道砲台など侵入することは不可能に近かった。

当初、魔道学校中等部武術科二年生のクライヴ・レミントンもそう考えていた。しかし、ある日偶然にも図書室で一冊の古い本を見つけたとき、魔道砲台に昇ることができると確信を得た。手に入れたのは、古城と魔道砲台の見取り図だった。

——もうすぐだ！

今、クライヴはその立ち入り禁止の魔道砲台へとつながる螺旋階段を昇っていた。生徒の進入禁止区域ならもつと下から始まっているが、教師を含めた全ての人間の立ち入りを禁じる場所はこの螺旋

階段と魔道砲台しかなかった。

クライヴが魔道砲台に昇ろうと思ったのには理由があった。

それは、魔道学校側が発表した？魔道砲台は無人である？という言葉だった。

何故か、その言葉はクライヴにとって腑に落ちないものだった。

クライヴとて魔道学校の生徒であり、魔道砲台の都市防衛能力の恩恵にあずかる一人である。それであるのに、どうしても納得がいかなかった。

例えば、何故？人が動かしているのでは？という根も葉もない噂に対して過敏に反応するのか。そして何故今年でなければならぬのか。それ以上に気になるのは？十割の狙撃手？の存在だった。

魔道砲台は今まで一度も砲撃を外した事がない。それこそ？魔道学校一の射撃の名手？とまで言われるほどだ。いくら魔道技術が発達しているとはいえ、無人で動かせる装置などこの世にはまだない。更に言えば、城壁の外から交易品を運んでくる商人の存在だ。魔道砲台は排他的に城壁の外からやってくる者を攻撃するわけではない。城壁を越えて人間に害なすと判断される魔獣に対してだけ砲撃を加えるのだ。そこまで高度に敵味方識別のできる魔道装置など聴いたことがない。それなのに、頑なに？魔道砲台には誰もいない？と言っているのは、魔道学校側にとって見られたくない何かが、または誰かがいるんじゃないだろうかというのがクライヴの結論だった。

事実を知ったからといって、どうするわけでもないが、何故か今のクライヴにとって確かめることが最重要目標であり、義務のような感じがしてならなかった。

——自分でもおかしいぐらいに、今の僕は夢中になっている。

古城の上層階は教員も立ち入り禁止ということで、全ての状況に対応できるだけの武装は持ってきたつもりだった。クライヴの左腰には武術科の道場から盗んできた練習用の斬断剣？レオデンスマーク？？、右腰には魔道科の備品室から盗んできた六連装リボルバー式魔導拳銃？ライヒシュタイナー〇式？^{ハンドガン ヒトマル}を装備し、右手には魔道技

術を一切使用しない炎のランプが握られていた。尻のポケットには魔導銃の予備弾が七発入っている。

恐怖心と好奇心の同時を心に抱えながら、クライヴはまた一段、何百年と使われていない石の段を昇る。乾いているお陰で踏み外すことは無かったが、一度水に触れるとその石の表面はぬるぬるして先には進めなかっただろうな、とクライヴは思った。

時折、上から突発的な風が吹く。頑丈な手すりがあるお陰で転げ落ちることはなかったが、その度にランプの炎が消えかけると、恐怖心が増して現れた。

クライヴは、今一度ここまで昇ってきた高さを考え直した。既に何分昇っているだろうか。流石に息がつかなくなってきた。しかし、そうだ、何分も経っているのに誰にも気づかれないのは何故だろうと思ひ直す。そもそも古城に侵入したときからそうだった。気のせいか古城自体の警備が手薄だったような気がする。しかも普段の魔道学校なら禁止区域に入れば直ぐにトラップ魔道が発動して警報機が鳴り響く。昔、今の自分と同じことをして捕まった生徒のことを思い出した。なのに僕るときはそれが無い。ラッキーだったと喜ぶべきなのだろうか。

——今は、昇るしかないよな。

唐突に螺旋階段が終わった。塔の上とは思えない広い空間。真っ暗で手に持つランプだけが唯一の明かりだった。

ぐるるるるるる……

「そつえば、お腹が減ったな」

クライヴはお腹を押さえた。ポケットの懐中時計を見れば、もうすぐ夜明けだった。昨日から張り切りすぎて何も食べていなかったことを思い出す。

——せめて、ビスケットとか持ってくればよかったな。

ぐるるるるるる……

「え？」

——まで、今のは僕のお腹じゃないぞ。

その唸り声は、クライヴの腹の虫とは比較にならないほどの重低音だった。本当に何かが呻くような――

大地が響いた。何かがいる。とてつもなく大きくて、黒くて、でつかくて、真つ黒で、重たい奴！

ランプを左手に持ち替え、右手で銀色に光る魔導銃を抜いた。魔導弾は六発フルで装填されている。扱い方は何度か勉強した。使えない代物ではない。だが、あくまで練習用の魔導銃なので、発射される弾は向けた敵を自動分析して威力が調整される。その上限は使用者の知識量に比例するが、魔道の知識がかじった程度しかないクライヴに発射できる弾の威力は七十段階のレベル三といった程度だった。それでも人間に対してなら痛みを与えることはでき、当たり所が悪ければ気絶ぐらいまでは持つていくことのできる衝撃波を出すことは不可能じゃない。

クライヴは暗闇に向けてじつと眼を凝らした。ランプの明かりを目の前に出すとようやく？そいつ？の姿が見て取れた。黒い毛に包まれ、黄ばんだ大きな牙が二本顔をのぞかせている。全貌はよくわからないが、恐らくはでっかい犬みたいな奴。魔道学校で飼われている比較のおとなしい魔獣？牙犬^{キバイヌ}？だ。しかし、いくら犬よりも大きいとは言っても、この牙犬の大きさは桁違いだった。

今、その桁違いの大きさをした牙犬の眼は明らかにクライヴを狙っていた。そういえば、昔飼育係をしていたときに見た牙犬も、餌は城壁の外で仕留められた魔獣の肉だったな。あれを食べるときだけは普段おとなしいと言われている牙犬も、本能まるだしで凶暴になる。そう、肉に向かってががつと――

ダッシュ。

脱兎のごとく全力疾走するクライヴを、やっぱりと言ってもいい程に牙犬が追ってきた。相当腹を空かせているに違いない。クライヴは防衛の為に魔導銃を二発発射。しかし牙犬にとってレベル三程度の衝撃波は、ただの風でしかないようだった。

「使えるかこんなもん！」

魔導銃を四発残したまま捨てようと思ったが借り物であることを思い出し、仕方なく右腰のホルスタに戻した。そして、代わりに左腰の斬断剣を抜刀。とりあえず手に保持しておくだけで応戦はしない。そもそもできない。勝てっこない。人間となら手合わせをしたことがあっても、あんな牙犬の化け物はいくらなんでも規格外だ！左手に握るランプがぐわんぐわんと揺れ、クライヴの影が揺れる。同時に牙犬の影も揺れる。いや、牙犬は影が揺れているわけではない。本当に牙犬自体が揺れていた。

「……もしかしてさ」

クライヴは自分の中で打ち立てた推測をもとに、スナップを効かせてランプを揺らしながらゆっくりと牙犬に近寄った。ランプを左に向けると牙犬は左を向き、逆に右に向けると牙犬も右に向いた。

——そういうことが。

最初から牙犬はランプに興味を持っているようだった。とはいえ、今ここで渡すことも出来ない。人間は夜行性ではないし夜目は利かない。ランプしか明かりのないこの場所でランプを失うのは失明したのと同然になる。

かといって、これ以上追っかけまわされるのも嫌だ。

とりあえずこの場合は、今立っている場所にランプを置き、クライヴと牙犬がそのランプの光を共有することによって解決した。剣を収め、ランプを半ば牙犬に奪われてしまった状態である以上どうすることもできず、仕方なくクライヴはその場で座り込むことにした。

牙犬もおとなしくなつて、じつとランプの明かりを見つめていた。見つめるだけで、とくに何をするでもなかった。きっと、ランプの光が珍しいのだろうとクライヴは思った。牙犬は非常に利口な魔獣だ。普通の犬よりも理知的で、誰に言われるでもなく強い理性が働く。命令を受けないと主人に従わない犬よりもずっと頭が良かった。

このままランプを弄り倒すこともないだろうと思い、クライヴは牙犬を信じて立ち上がった。そして周囲を見回す。忘れていたことだが、外観からすると魔道砲台は牙犬と追いかけっこができるほど

広くはない。真っ暗すぎてここが頂上なのか単なる踊り場なのかもわからず、かつ牙犬と追いかけてしまったせいで、昇ってきた螺旋階段が何処にあるのかも見当が付かなくなっていた。

ランプの明かりがまだ長く持つことを信じ、クライヴはその部屋を走れるだけ走ってみた。しかし、今自分がどれくらい走ったのかもわからず、見える景色がずっと同じだったため平衡感覚もおかしくなりだした。

クライヴは右腰にまだ四発残した魔導銃があることに気づき、前方に一発発射してみる。もしそこに壁があるなら、衝撃波を構成する魔導弾の軌跡は途中で散るはずだ。

一発発射した。パンツという発射音はその場にだけ広がって、壁や天井に反抗することはなかった。衝撃波も、どこかにぶつかることなくそのままの軌跡を描いて何処か遠くへ行ってしまった。

……迷った。

——かくなるうえは。

「わあああああああああああああああああああああああ！」
叫ぶ声は何処にも反射しない。こだますることも無かった。

——どうしよう。

何故、生徒だけでなく教員を含めた学校の大人ですらここへ来ることを禁止としたのか、わかる気がした。一度足を踏み入れたら二度と還ってこられないからだ。

たぶん、僕は砲台の内部にたどりついたのだろう。無人どころかそこに別の世界が広がっていた、なんて言っても誰も信じてくれないだろう。そもそも誰かに伝える前に、僕自身がここから脱出できるのかも怪しいところだ。

なんだかとても悲しい気持ちになった。

——誰かが呼んでいるとか、僕の妄想でしかなかったのかもしれない。

ここから一生抜け出せなくなって、僕は死んでいくんだな。クライヴは思った。

——もし、もしも本当に誰か僕を呼んでいたのだとしたら、もう一度だけ答えてください。

泣きたくなつた。

——誰でもいい、誰か答えてくれ。

涙が出た。

——誰でもいいから。

喘いだ。

——助けて。

「ま、たまにいるんだよなお前みたいなバカ」

放心状態だったクライヴの眼の前に、小さな人形が落ちてきた。暗闇で蛍光色に光っている。ピエロをモチーフにした操り人形だが糸がない。誰かが魔道で遠隔操作をしている。

「だ、誰だ？」

クライヴは後ずさりして、ピエロへ魔導銃を向けた。

「レベル三級攻撃魔道？ ウェトスレニス？ …… そんなクソみたいな魔道知識でここまで上がってきたのは、やっぱりバカだな。あるいは阿呆か？」

ピエロがゆっくりと近づきながらクライヴを罵った。

「うるさい！」

ピエロに向けて一発放つ。攻撃魔道？ ウェトスレニス？ の衝撃波がピエロに襲いかかった。しかし、人間よりもはるかに軽いはずの操り人形のピエロは吹き飛ばされることなく、ゆっくりと更に近づいてきた。瞬時に打ち消しの防御障壁魔道を展開したのだ。魔道発動に必須な魔導弾を使用した形跡はない。

「ふん。これくらい当然だろ」

ピエロはクライヴの制服を見た。

「…… 武術科の制服か。俺が相手になってやろうか？」

ピエロはその場で軽くステップを踏み、小さな体で腹部の急所を狙って飛び蹴りを食らわせた。クライヴはそれを寸前で回避、同時に抜刀して斬断刀の面でピエロをハエのように叩き落とす。

「ぐえっ」

びたんつと音を立てて地面に叩きつけられた。ピエロは、震えながらむくりと起き上がった。赤く伸びた長い木の鼻が折れている。

「言う割には弱いんだな。あんた、誰だ？」

「うるせえ泣き虫。俺が来るまでここから出られないーってピーピー泣いていた癖に。相手が自分の倒せそうな相手だとわかると強がるんだな」

「黙れ！」

クライヴはふらつく。ピエロ人形を思い切り蹴り上げた。ピエロはボールのように空中を舞い、ぱたりと空気をまとって落ちた。それからびくともせず動かなかった。

「……………」

斬断剣の先端でピエロの顔をつつく。顔いっぱい口を広げて笑っている。ピエロは薄気味悪かった。

「……………なんか、言えよ」

クライヴはピエロを拾い上げた。頭がガクつと後ろに向いたのに驚いた。本当に死んでいるみたいだ。最初から命のない人形を相手にしていたのに、殺してしまったような気持ちになった。

「なんか言えって！」

「うつさいなあ」

「えっ？」

ピエロは抱きかかえたクライヴの手を振り払って地面に降り立った。あらぬ方向に曲がっていた首を自力で戻し、描かれただけの動かない眼でクライヴを見た。

「？黙れ？って言ったから黙ってやったんだ。俺に命令するなよ」ランプの明かりが近づいてくる。先程の牙犬がランプを啜えてやってきた。どうやらこのピエロが牙犬の主人のようだった。

「ハチコウか。お前どこに行っていたんだ？ここにくる奴は全員食っちまえて言っただろ？」

くうんと鼻を鳴らして、ハチコウと呼ばれた牙犬はその場でお座

りをした。その状態からでもクライヴの身長を軽く越える高さだった。

「……おいおい、まさかお前、俺よりもこのガキを優先するっていうのか」

ハチコウはゆっくりとクライヴに近寄り、頬を舐めた。二本の尻尾が激しく振られている。

「よくわかんないけど、この牙犬は僕になついているみたいだ」

クライヴはハチコウの頭をがしがしと撫でた。ハチコウは気持ちよさそうに頭をクライヴに向ける。

「牙犬じゃない？ オオキハインヌ 大牙犬？ だ！——今までずっと俺と兄様以外には絶対になつかなかったんだぞ……お前、何者だ？」

ピエロはクライヴの眼の前にずいと近寄った。相変わらず笑った表情は不気味だった。クライヴはピエロを両手でぐいと押して引き離す。

「僕はクライヴ。クライヴ・カラヴレーゼ・エーヴェルハルト・ヴィンツェル・レミントン。ライヒシュタイン魔道学校中等部武術科の二年。学籍番号は——」

嫌に長つたらしい名前なのは、フルネームに両親の出身地と両親の姓を含むからだ。クライヴの場合、母方のカラヴレーゼのエーヴェルハルト家と、父方のヴィンツェルのレミントン家の間に生まれたクライヴという意味になる。フルネームで五つの名前がない場合は出身地不明であったり、両親の片方に姓が無かったりする。

その名前を聞いて、ピエロは考えるポーズをした。

「エーヴェルハルト……なるほど、そういうことか」

「なんだよ、急に納得して」

「いやいや別に。それで、中等部武術科二年のクライヴ・エーヴェルハルト君は何しにここまで昇ってきたのかな？」

ピエロは急に態度を変えて、猫なで声で言った。

「……砲台の噂を確かめに来た」

「噂あ？ そんなものの為にここまで昇ってきたのか。先生に言わ

れなかったか？　というか、校則にあるだろう？　魔道砲台には昇るなって、そんな冒険を犯してまでここまで来たのは、噂を確かめるためだって言うのか？」

ピエロはクライヴの周りをぐるぐると回りながら言った。

「気になったんだ。何故だかわからないけど、気になって仕方が無かった。学校は何かを絶対に隠している。隠しているから今になつて？　魔道砲台は無人である？　なんて発表をしたんだ。なあ、あんた知っているんだろ？　どこから操作しているかはわからないけど、ここに居るということは、何か知っているんだろ？」

「さあね。俺はただの警備用マリオネットかもしれないぜ？」

「じゃあ、どうしてエーヴェルハルトの名前に引っかけたんだ？」

その問いに、ピエロは動きを止めた。

「……お前がもし、本当にエーヴェルハルトなら、お前は十年遅刻したことになる」

「何のこと？」

「お前はここまで螺旋階段を昇ってきた。そしてそれを突破し、そしてレベル六十の空間魔道？　アエテルアートル？　によって作られたこの空間に来ることができた。ここは何もないように見えて、俺の魔道を抑えるためのトラップになっている」

「だから、何なんだ？」

「——それと同時に、この空間魔道は階段を昇ってくる奴に対して永久に螺旋階段を昇る錯覚を作り出す。当の本人は階段の入り口から数段目で足踏みをしているだけだ。でもお前にはそれがなかった。ここは言わば、砲台の入り口の一步前といった場所だ」

「じゃあ、僕はやっぱり砲台にいるんだな？」

「そう。ようこそ、ライヒシュタイン城の呪われし魔道砲台へ。そして同時に？　ありがとう？　と言わせてくれ」

——俺は、お前のお陰でようやく自由の身になれる。俺は魔道砲台の弾として二百六十年間この砲台に閉じ込められていた。二百六十もの間、魔獣を撃ち殺すだけのくそつまらん日々をすごしたんだ。

頭に直接響くような声。何処から発せられているのかわからない。空間全てが鳴り響いているようだ。クライヴは眼を瞑り、耳を塞いだ。それでも声は手をすり抜けて頭の中に入ってくる。

眼前に立っていたピエロが発火した。黒い煙をまとって炎を上げると、パラパラと燃えかすが黒い地面に落ちた。

ハチコウが脅えている。クライヴは斬断剣を抜き、両手で握った。――何を怖がる必要がある？

ピエロの操り人形が落とした灰が地面に吸収されると、地面が割れ始めた。同時に空が明るくなる。黒から灰へ、灰から白へ、白から――

――俺は、このときをずっと待っていたんだ。

頭痛がする。

――二百六十年間耐えてきた。

耳が痛い。

――もう十分代価は支払ったよな？

声が聞こえる。

――俺は耐えた、耐えたぞ、兄上！

耳元で叫ぶな！

高レベル魔道の強い光が、それまで黒かった世界を照らす。

暗闇が消えてゆく。

眼の前が真っ白になる。

僕は、気を失った。

次に眼を覚ましたとき、クライヴは今まで昇ってきた螺旋階段の大きな踊り場で、ハチコウの背中に乗っていた。ハチコウは牙にランプを引っ掛けたまま寝息を立てている。

踊り場は青色の魔道灯に暗く照らされていた。短い廊下の先に、赤い鋼鉄の扉が見える。それ以外は階段の中のように一面大きなレンガで造られている。恐らく、あそこが魔道砲台への入り口なのだろう。

クライヴは歩み寄り、迷わず扉のノブに手を掛けた。

開けると十段とない鉄の階段があり、昇るとステンドグラス張りの天井が朝日を取り入れる、明るいドーム状の部屋だった。部屋の中心には大の大人くらいのサイズの砲弾を撃ち出せそうな巨大な魔道大砲が一門設置されていた。

ドームに足を踏み入れると、急に床が回転した。大砲の前の扉が開き、砲身が上下する。自動で照準を定めているようだ。大砲には太い魔道エネルギーを注入するパイプが何本も通っており、小刻みに震えていた。甲高い音と共に砲内にエネルギーが充填される。

まばゆい光。遅れて爆音。

銀色の光が城壁の外に向かって射出される。

恐ろしく正確な、魔道射撃。

閃光の先で爆発。大砲横の窓から一部始終をのぞく事ができたが見えたのは爆発の炎だけだった。

砲身が、冷却の為に水蒸気を発生させる。

ドームの中が真っ白になり、霧が立ち込めた。

クライヴは、砲身につながるパイプが床の下に続いているのを確認する。近くに、先程昇ってきた階段とは別の方向に伸びた梯子を見つけ、降りる。

決して長くはない梯子は真下の制御室らしき部屋に繋がっており、上から来たパイプを一本にまとめて魔道計器で制御しているようだった。上のターレット部分も制御しているようで、壁には大きな歯車がいくつも並んでいた。制御室に降り立ち、辺りを見回す。床の一部に亀裂が走っており、そこから青色の光が漏れていた。亀裂の横にピエロの人形が落ちていた。さっきの奴とは表情が微妙に違う。クライヴはそれを拾い上げた。

「俺はこの下だ。お前には義務がある、そうだろう？」

「突然しゃべるなよ……びっくりするじゃないか」

「悪いな。誰かとししゃべるのは久しぶりなんだ」

ピエロはそう言うと、奇怪に顔と体をカクカクと動かした。どう

やら笑っているらしい。そんな気がした。でも、気味が悪い。

亀裂に斬断剣を突き立て、てこの原理で床を広げた。思った以上に床はもろくなっており、斬断剣で簡単に広げることが出来た。

可能な限り広げると、丁度一人ならすり抜けられそうな穴ができた。しかし、無理な負荷をかけてしまったせいで、斬断剣は途中から曲がってしまった。もう鞘に収めることは出来なくなった。

「盗んだことバレバレだな……仕方ない」

先に斬断剣を下の部屋に落とし、顔だけ突っ込んでみる。下の部屋に梯子にできそうな箱や机があるのを確認すると、クライヴはその穴から下の部屋に飛び降りた。強烈な魔道があることを示す青い光が部屋を覆っていた。周囲の壁は何かを押されたように曲がっているが、貫かれた様子は無かった。触れてみると冷たく、この部屋だけ周囲がレンガでなく金属の壁で出来ているのがわかった。それも極めて生成の難しい魔道吸収作用のある物質を多く取り入れている金属だ。

丁度上の制御室のパイプがあった場所と同じく、部屋の中心には制御室に何本もの太い強化繊維チューブで魔道エネルギーを送っている箱があった。箱というよりは人を閉じ込める拷問器具アイアンメイデンのような形をしており、さながら棺桶のようだった。周囲には見たこともない太さの鎖が何本も巻かれ、がんにがらめにされている。

クライヴは床に刻み込まれた古い文字を読んだ。古い本でしかお眼にかかれないような文字だったが、読むのは難しいことではなかった。大抵の魔道知識書はこの古い文体で書かれている。

「……我等、ここに大いなる力を持つ者を封印する。その力は民のために。デイトリヒ・シュヴィヒテンブルク・カルニセル・グラ・ライヒシュタイン、ヒイツミ暦一九三一年……二百六十年前だ」

「早いところこの棺桶を壊してくれよ、エーヴェルハルト」

上から降りてきたピエロの操り人形がクライヴをせかした。

箱に絡まった鎖に向けて、曲がった斬断剣を突き立てる。そもそ

も壊せるかどうかわからない。

「壊していいものなのか？」

クライヴは振り返り、ピエロに尋ねた。

「面倒だったらこう言え？ エーヴェルハルトの名において、クライヴ・エーヴェルハルトが今封印を解く？ ってな」

「……僕はクライヴ・レミントンなんだけどな」

クライヴが苦笑する。

「ほざくな、てめえの姓にはちゃんと？ エーヴェルハルト？ って入ってるじゃねえか。ここに入れるのはライヒシュタイン家の血筋か、エーヴェルハルト家の血筋って決まってるんだ。そして、この封印を解除できるのはエーヴェルハルト家の血筋だけだ」

「エーヴェルハルトは母親の血筋だ。僕には関係ない」

「あるんだよ。ここに居るのが何よりの証拠だ。とりあえず言えっ
て」

クライヴはため息をついた。そしてつばを飲み込む。

「……エーヴェルハルトの名において、クライヴ・エーヴェルハルトが今封印を解く！ これでいいんだな！」

「上出来だ、クライヴ」

ピエロが言った。

箱が直視できないほどに青白く光った。強烈な魔道の光だ。箱の周囲を固めていた鎖がじゃらじゃらと音を立てて外れていくのが薄く見えた。

インパクト。

箱を中心に強い衝撃波が魔道によって撃ち出される。魔道吸収を可能とする壁が許容範囲量を越えてびきびきと唸るのが聞こえた。クライヴの体がふわりと浮かんで吹き飛ばされ、壁に叩きつけられる。意識が飛びそうだ。

衝撃波と光が収まると、部屋は元の青い魔道灯の明かりだけになった。

箱が開いている。衝撃波の影響か、眼が掠れて周囲がぼやける。

クライヴは眼をこすったり瞬きを繰り返したりしている間に、視力は完全に回復した。四肢もちゃんと動く、すこし背中が痛い。壁にぶつかったからだ。

「……十年おせえんだよ、二百五十年って言ったじゃねえかよ、あのクソ野郎……」

悪態をつきながら箱の中から出てきたのは——女の子だった。

長く封印されていたようには見えないブロンドの髪は腰まで伸びていて、眼はきれいなサファイアのような碧色をしている。でもそれは誰かに似ているような気がした。

「……僕だ、僕に、似ている？」

クライヴの呟いた言葉に、少女は反応する。

「隔世遺伝——先祖がえりってやつだ。エーヴェルハルトの血には、別の血に関わらず容姿が似る傾向がある。ナナト皇国で最も魔道に近い存在だからかな。よう俺の……なんだ、超子孫。二百六十年ってことは、兄上の孫の孫の孫の孫くらいか？」

「……君は？」

「俺は、レギナ・アウグスト・ヴィクトログナ・カラヴレーゼ・エーヴェルハルト」

「エーヴェルハルト……」

「そう。真正正銘お前のご先祖様ってわけだ」

「僕の、先祖？」

女の子——レギナはふと横の液体の詰まったタンクに視線を合わせた。透明のタンクにレギナの姿が映っている。その姿を見てレギナは啞然とした。

「嘘だろ……元に戻ってない。しかもなんか微妙にガキになっているような」

レギナは自分の髪、顔、胸に触れて絶望する。

「レギ、ナさん？」

怒ったレギナはクライヴに駆け寄り、クライヴの首を絞めた。

「お前が十年来るのが遅いからマイナス十歳ガキになってるじゃね

えかよ！ 俺が元々二十四歳だったから？ えーつと十四歳の体か？ しかも女の！」

「苦しい……」

レギナはクライヴに向かってそう叫んだ。クライヴには一体何のことなのかわからない。

「……どういうこと？」

「どうもこうもこういうことだ！ 俺は元々男だった。国の戦略のために自分の体に魔導陣を描き入れ、レベル七十級戦略魔道？ ペルフェウルテ？ を発動させた。俺はたった一人で敵国レイサンシを滅ぼした、戦争を終わらせた！ ——だというのに同じナナト軍の兵士に俺は取り押さえられ、ナナトの魔道部隊を指揮していたお前の……超祖父で俺の兄であるアーウィン兄様は自らの魔道をつかって女の死体に俺の魂を封印し、代々この街いを治めてきた大戦時の盟友ライヒシュタイン家と共にここに閉じ込めた。二百五十年間反省し、その日が来るまで街のために力を使えと言ってな。俺は兄上の言うとおおり、二百五十年間ライヒシュタインのために魔道を使い、魔道砲台として城壁の中を守ってきた。なのにお前は十年も遅れてここへやってきた。代々エーヴェルハルト家は二百五十年後に俺を解放するようにアーウィン・エーヴェルハルトによつて？ 血の暗示？ の魔道を掛けられているはずだ……なのにお前は！」

「……それじゃあ僕がここに来るのはその？ 血の暗示？ だったというのか？」

「そうだ——ああ、レミントン家の血だな。それがお前を、俺の解放を遅らせた原因か。どうして代々魔道力に優れるエーヴェルハルトの末裔が魔道科でなく武術科にいるのか疑問に思った。お前、魔道力を持っていないな？ だからチンケな低レベル攻撃魔道しか使えなかったんだな？」

その言葉にクライヴはむっとした。一族の中で唯一魔道力を持っていないクライヴにとって、それは大きなコンプレックスだった。

「母は偉大な魔道士だけど、父は魔道士でなく職業軍人だ。魔道力

が発現しなかったから、僕は武術科に行ったんだ——それで、僕がここに来るのが暗示だったというのは……」

「ああ、もう。お前どうしてエーヴェルハルトの癖にそう頭の回転が悪いんだ」

レギナは頭をかきむしる。

「ご、ごめんなさい」

クライヴは仕方なく謝った。

「お前が自分の意思だと思っていた行動の全てはエーヴェルハルト家に予定されていたことなんだよ。噂を確かめるとかなんとかは、意識の根幹にあった？ 血の暗示？ が無意識にお前をここに来させるための理由でしかなかった」

「だって僕は——」

じりりりりりりりっ！

クライヴのポケットの中で、懐中時計がけたたましく鳴った。急いで取り出し、スイッチを押して叫ばせるのをやめる。

「な、なんだ？」

クライヴは自分でタイマーを掛けていたのを忘れていた。懐中時計に設定された時刻は、砲台探索のタイムリミットを示す、学生寮の起床時間一時間前だ。一時間あれば塔を脱出して寮にたどり着くことが出来る。

「まずい、帰らないと」

「何処へ？」

「寮だよ！」

「俺も行く」

「行くったって……男子寮に女の子は流石にまずいよ」

「二百六十年も封印されていたんだ、自由にしたっていいだろ」

「うーん、とりあえず」

クライヴは制服の上着を脱いだ。

「な、なんだよ……変な気起こすなよ」

レギナは胸を隠してクライヴから一歩下がった。クライヴは脱い

だ上着をレギナに渡す。

「裸じゃまずいでしょ」

「……そ、そうだな。恩に着る」

魔道砲台から、螺旋階段を伝って古城の屋上に降り立った。既に古城では職員達がせわしなく動き始めている時間だったので、クライヴとレギナは見取り図に従ってなるべく禁止区域を通って古城を抜けた。寮まであと一步のところとなった草むらで一度休憩する。

「ところで、レギナさんがあの魔道砲台から居なくなるということ、もう砲台は動かないの？」

クライヴは、空に高くそびえる魔道砲台を指差した。レギナもそれに合わせて見上げる。

「魔道エネルギー供給装置を兼ねていた、俺の棺桶に細工をしてきた」

「細工？」

「俺に仕える十二体のマリオネットの一体、？第参席のアルトゥール卿？を代わりに封印した。俺が最も愛していた？第弐席のマティアス卿？は俺の封印解除のときに魔道を使い果たして燃えてしまっただけ」

クライヴは空間魔道？アエテルアートル？の中で見た蛍光色の不気味な操り人形を思い出す。

「マリオネットって、あのピエロのこと？」

「そうだ。俺に仕えるマリオネット達は、俺の魔道力には遠く及ばないものの、強い魔道力を持っている。あの砲台はレベル五十級支援魔道？アルゲトウニト？の電磁加速作用を利用して、レベル三十五級破壊魔道？第弐種フォルイグス？の焼夷弾を発射している。マリオネットでも今までどおりに動かすことは容易い」

「そう、ならいいんだけど」

「お前、本当に理解しているのか？」

レギナが疑う。

「え？ うん、たぶん。つまりピエロが魔道砲台の動力源兼制御装

置になって、いままでどおりに魔道砲台は動きますよってことですよ？」

「まあそんなところ」

人気が無いことを確認し、草むらから飛び出す。それから二人は寮には向かわずに一人の教授の研究室へと向かった。

ラングフェルド研究室。数あるライヒシュタイン魔道学校の研究室の中で、唯一第二学棟に存在するナト皇国歴史学教授リクロ・ラングフェルドの仕事部屋だった。元々研究室は泊り込みでの研究生用にいくつか個室を設けており、そこに長期的に住み込めるような構造をしている。このラングフェルド研究室にも三つの個室が用意されていたが、未だに住み込みで研究に来る生徒が一人も居なかったため、ひとつはリクロ・ラングフェルド教授本人がベッドルームとして使用している。

二人は上手く個室の窓側に忍び込むと、中の様子を確かめた。クライヴの知る普段ならばラングフェルドは、授業中以外はこの部屋で眠っているか読書をしているか、あるいは魔道端末をいじって電インターネット子仮想空間にダイブし、いかがわしいものを閲覧している。今回もそのいずれかであることを信じてそつと窓をのぞきこんだ。

——いない？

「どうした、いないじゃない——」

普通の音量でしゃべるレギナの口を、クライヴは慌てて手で押さえた。

「シッ。おかしいな……この時間なら普段はいるはずなのに」

窓下の、雑草ばかり生えた花壇の裏に隠れていると、唐突に右側から水が襲ってきた。学校の草木が生えているところ全てを担当する水遣り係でさえ普段は無視する場所なのに、とクライヴは不思議に思った。しかし今はそんなことを考えている場合ではない。とりあえず水にかかるまいと、更に奥を目指して匍匐で逃げる。

——ひっ。

土の上に手を置こうとしたとき、クライヴはあやまって指で軽く

地面を掘ってしまった。そのせいで、本来ならば見るだけでじんましんが出そうなぶよぶよとした感覚に指が触れていた。

「おい、どうした。早く行けよ！俺は水にかかりたくない！」

レギナが小声で叫んだ。クライヴはそれどころじゃなかった。

「み、ミミズさわったあ……」

「女かお前は、そんなの日常茶飯事だろうが！」

レギナがクライヴを追い越そうとして横に出た瞬間、とうとう花壇にまかれた放水が二人を襲った。

「ぶわっ！」

放水はクライヴの顔を直撃した。

「ん、そこに誰が居るのかい？」

花壇に水をまいた本人が言った。若い男の声。クライヴには聞き覚えがあった。

「冷たいんだよこの野郎！」

水を掛けられたことが頭にきたレギナが、若い男に飛び掛った。クライヴは慌ててレギナを制止しようとしたが、既にレギナの右ストレートが顔を直撃した後だった。クライヴは、それが探していたラングフェルド教授あると気づくのに十秒とかならなかった。

当たり所が悪かったのか、ラングフェルドは一発KOでのびていた。仕方なくラングフェルドを背負いながら、他の生徒や教員にばれないよう細心の注意を払って校舎に侵入し、研究室入ることができた。教授をソファに寝かせ、レギナがパンチを食らわせた左の頬には冷たい水を含ませたタオルを応急処置として当てた。

「クライヴ、お前とこの男の関係はなんだ？」

レギナが尋ねた。クライヴはテーブルの上に盗んだ魔導銃と同じく盗んだ、曲がった斬断剣を置く。寮から拝借したランプはハチコウにあげてしまったので、紛失したことにする。

「お世話になっっている先生だ。中等部の生徒はまだ専属の研究室を持ってないけれど、何かと手助けをしてくれるんだ。再来年には僕も研究室に所属できるから、ラングフェルド先生のお世話になろうと

思っているところ」

「お前、武術科だろ？ このラングフェルドとかいう優男は明らかに武術ができそうな雰囲気ではないぞ？」

「ラングフェルド先生はこのナナト皇国の歴史を調べている歴史学の教授だ。——それより、何か着られるものを探さない？」

「そうだな。お前の上着もびしょぬれだ」

クライヴは研究室の真ん中に掛かるロフトへの梯子を昇り、クローゼットを漁った。何故だかわからないが、ラングフェルドのクローゼットにはナナト皇国内のありとあらゆる魔道学校の制服が男女ともに揃っている。ライヒシュタイン魔道学校も例外ではなく、しかも制服のデザインを七回も変えているにも関わらず、その全ての種類が揃っている。現在採用されているものは残念ながら見当たらなかったのも、一つ前のヴァージョンのものを男女それぞれ一着ずつ拝借することにした。ぱつと見ではわからないが、男子なら青い上着の、女子なら赤い上着とスカートの端が白いラインで縁取りされているかいないかの違いだ。それに今でも変更前の兄弟のお下がりを使っている生徒がいるので、余計に目立つことはない。

「レギナさん、これ着て」

クライヴはロフトから女子用の制服を投げた。レギナがそれを上手くキャッチする。

「俺に女の格好をしろと言うのか？」

「今は誰がどう見ても女の子なんだから仕方ないでしょ」

「……………」

レギナは一度制服を睨んだ。そしてクライヴの方を向きなおす。

「……仕方ないな。それと、俺のことはレギナでいい。明らかに同年代なのに？さん？付けするのはおかしいだろ。俺もなんか嫌だ」

「わかった。レギナ」

「それでいい、クライヴ」

「う、うーん……………いてて」

ラングフェルドがソファから起き上がった。レギナに殴られた左

頬がまだ痛むらしく、タオル越しに抑えていた。

殴った本人はあられもない姿になって、女子用の制服に着替えている最中だった。

「ん、君はレミントン君？　どうして女子用の制服なんて着ているんだい？」

眼鏡が吹っ飛んだラングフェルド教授の眼には、レギナがクライヴに見えているようだった。確かに間違えるのも無理は無い。違いと言えばレギナは髪をそのまま落としているだけで、クライヴはブロンドの長髪をまとめて縛り、ポニーテールにしている。制服の違いが無ければ双子の女の子に見える。

クライヴは上着だけ着なおすとロフトから降りて、教授のデスクから予備の眼鏡を出す。後で拾いに行かないと。

「あ、いや……その俺は」

下着姿のレギナは固まっていた。レギナにとって今は下着姿を見られたというショックではなく、男が女物の下着を着けているところを見られたというショックで停止している。

「はい先生、眼鏡。レギナ、早く着て」

「うるさい、わかってる」

クライヴはラングフェルドに眼鏡を渡す。

「ありがとう。あれ？　レミントン君？」

眼鏡を掛けて、視界にピントの合ったラングフェルドがクライヴを見る。

「僕がクライヴ・レミントンです」

「じゃあこっちの子は？」

ラングフェルドがライヒシュタイン魔道学校女子用制服に着替え終わったレギナを指差す。

「ああ、えーっと」

「レギナ。レギナ・アウグスト・ヴィクトログナ・カラヴレーゼ・エーヴェルハルト」

レギナは言った。

「……全てお話しします」

クライヴはラングフェルドに事の全てを話した。どこから話せばいいのか迷ったが、魔道砲台に昇るいきさつから話す。

「……なるほどね。不思議だな。見取り図があったとしても禁止区域の見回り職員ぐらいいはいたはずだ。ライヒシュタイン城の魔道砲台は学校最大のタブーのひとつになっている。校長が最も気になさっている場所だった。もしかしたらライヒシュタイン校長は君があの魔道砲台に昇ることを予見していたんじゃないのかな」

「ラングフェルドの言うとおりだ。恐らく十年前からライヒシュタインはエーヴェルハルトの血筋の誰かが、？血の暗示？を受けて俺を封印から解放しにやってくることを知っていたはずだ。当然ライヒシュタイン家の当主は魔道砲台に俺が封印されていることを知っているからな」

「唐突に？魔道砲台には誰も居ませんよ？と言い出したのはそれが理由？ 僕が砲台に昇ろうと決意させるため？ でもそれなら僕は十年前からここに居た。五歳だったけど」

「？血の暗示？は、エーヴェルハルトの人間でも、その人間が封印解除に必要な知識と判断力を持っているかどうかを判断する。もし五歳のお前にその能力が無かった場合、お前の母親に封印解除の義務が渡るだけだ」

「じゃあどうして僕なんだ？」

「わからない……」

レギナはうつむく。

「校長に聞いてみるってのは、どうかな？」

ラングフェルドが提案した。

「一応、ライヒシュタイン家の現当主は校長先生だけど、何か知っているんじゃない？」

「賛成だ。直ぐに会えるのか？」

「連絡してみよう」

言っとラングフェルドは直ぐに自分のデスクに置かれた内線電話

を取った。ダイヤルを回して校長室につなぐ。

クライヴはこれからのことを考えた。まずは無断で禁止区域である魔道砲台に昇ったこと。レギナがなんとかしてくれないと、魔道学校執行部によって校則違反として厳しい罰則が与えられる。中でも禁止区域侵入は罰則のレベルが極めて高く、罰則期間中は退学すら許されない。

次に就寝時間内の無断外出。就寝時間中は必ずしも寝なければならぬわけではないが、寮内で過ごすことになっている。無視した場合は寮長先生の厳しいお叱りの声と愛の鞭が待っている。一度クライヴはそれを別件で経験したことがあった。その時は未遂だったが、それでも一週間寮長室の禁固刑はきつかった。何よりきついのは寮長先生から発せられるいびきの爆撃攻撃だ。体も爆弾のように丸ければ、その声も性格も爆弾なのだからたまらない。

まだある。盗んだ魔導銃と斬断剣だ。魔導銃は問題ない。消耗品の魔導弾を数える整備委員は数え方がざらだし、魔導銃本体にも傷は無い。しかし斬断剣はどうだろう。とりあえず持ち帰りはしたが、既に鞘の中に納まらない。鍛錬の甘い証拠として刃も欠けている。斬断剣を斬断剣らしく使わなかったことも原因だが、何よりむやみに床板を広げようとしたことで湾曲してしまったことが最大の問題だ。戻そうものなら折れてしまいかもしれないし、元通りというわけにはいかない。武術科、とくに剣術の先生に怒られる。こちらはお叱りの声はともかく、物理的な愛の鞭が来るに違いない。そう思うと脚が震えた。

——重罪人のような気分だ。

「——わかりました。直ぐにお伺い致します」

ラングフェルドは丁寧に電話を切った。

「レギナ君とクライヴ君を連れて校長室に来るように言われた。行く」

クライヴとレギナは、ラングフェルドに連れられて再び古城へと向かった。今度は堂々と正門から入る。なんだか不思議な気分だっ

た。それと同時に、魔道砲台を見上げるとすこし後ろめたい気持ちになる。

古城の、職員が出入りする部分はかつての景観を残しつつ現代風に改装されている。中央には四機の魔道エレベータが設置されており、明かりも魔道エネルギーを使った最新式の、ランプの数十倍も明るい魔道灯になっている。

エレベータで七階へ上がる。一階から六階は魔道科、武術科といった二十にも及ぶ学科に所属する全ての教授が使用する職員室だが七階はフロア全体が校長室になっている。そのためか下層階よりも昔の趣を重視したつくりになっており、ここだけ時間が止まったような錯覚に陥る。

エレベータを出て廊下を歩くと、やがて一つの大きな扉が前方に現れた。それだけで世界の全てを語ろうとしたくらいに精巧でかつ大胆な彫刻が彫られており、クライヴはドアノブがどれなのか探すのにすら手間取った。威厳のあるつくりだが、悪趣味とも言える。

ラングフェルドは何の迷いもせずにドアノブらしき彫刻の一部に手を掛け、扉を二回ノックした。

「失礼します。リクロ・ラングフェルドです。それとレギナ・エーヴェルハルトとクライヴ・レミントンをお連れ致しました」

「入りましたまえ」

そう言ったのは、扉の上に作られた老人の顔をモチーフとした彫刻だった。クライヴとレギナは思わずしゃべった彫刻に頭を向けるが、ラングフェルドだけは特に気にする様子も無く扉を開けた。

「よくきた、こうして会うのは初めてか。噂はかねがね？戦争の英雄？エーヴェルハルト卿」

開口一番にヴィセラス・ライヒシュタイン魔道学校長はレギナに言った。

「クソガキが……意味も知らずに良く言う」

外見年齢十四歳のレギナが、今年七十五歳を迎えるライヒシュタイン校長に向かって吐き捨てる。

「クソガキ、そう呼ばれるのは久しいが、確かに実年齢二百八十四歳のエーヴェルハルト卿から見れば赤子も同然か、まあ掛けたまえ」
ライヒシュタインは、言いながら執務室横の応接用ソファを指差す。そんなことはお構いなしといった趣で、レギナはずかすかたらイヒシュタインの座る立派な机のほうへと歩いた。

「この野郎ッ」

レギナはライヒシュタインの胸倉を掴んだ。

「俺の封印解除を十年も遅らせたのはてめえの仕業か、そうなんだから、言ってみろ！」

「レギナ、いけない」

クライヴはレギナのもとへと駆け寄り、胸倉を掴んでいた右手を力ずくで離す。

「十年遅らせた。何のことだ？ 私はきっかり二百六十年後の今日、先祖の言い伝えを守って古城の裏口を開けたぞ？」

「とばけんじゃねえ……俺は、十年も余計に魔道エネルギー潰けにされたお陰で、十年分ガキになっちまったんだ！」

「いいから落ち着け、レギナ君」

ラングフェルドとクライヴは、今にも校長に殴りかかりそうなレギナの両腕を掴み、なんとか抑える。

「嘘ではない」

ライヒシュタインはよろよろと立ち上がり、壁に掛けられた歴代当主の肖像画のうち、六枚目のデイトリヒと名前の書かれた絵に手を掛けた。ちなみに更に左へ進んで十三枚目にヴィセラスの肖像画がある。つまりヴィセラスは十三代目当主で、デイトリヒは六代目当主ということになる。

デイトリヒ・ライヒシュタインの肖像画の裏には、頑丈そうな金庫が眠っていた。ライヒシュタインはポケットから取り出した鍵のひとつを金庫の鍵穴に差し込む。そして開いた金庫から古い封筒二つを取り出し、机の上に置いた。

片方の、既に開いている封筒の中から出てきたのは茶色く変色し

た一枚の手紙だった。

「二百六十年前、我がライヒシュタイン家六代目当主ディートリヒによって書かれた？ライヒシュタイン城の魔道砲台？についての記述だ」

そう言つてライヒシュタインは、古い手紙をレギナに渡した。

レギナは奪うようにそれを受け取る。丁度クライヴの位置からも文章が読めた。

「ここに眠りし者は、かの最終戦争にて大いなる禁断の魔道を使用したとして、一九三一年七月一日ナナト皇国軍総帥アーウィン・エーヴェルハルトに二百六十年間の封印を命ぜられた者である。彼には二百六十年間自らの愚行を恥じ心改めることを誓わせ、死よりも重い罰を与える。

封印の間、そこに封印されている事実は後世の当主のみに伝えよ。その間封印されし者はライヒシュタインの守護者として二百六十年間の都市防衛活動に従事することを約束する。

今より二百六十年後、二一九一年のライヒシュタイン家当主に告げる。ヒイツミ暦二一九一年のいつの日か、エーヴェルハルト家の血筋の者が、血の暗示に従い封印されし者の封印を解きに現れる。その時は拒むことなく受け入れよ。なお、封印されし者が解放され、現れたときにはもうひとつの手紙を——あつ！」

そこまで読んだところで、先に読み終わったレギナが手紙を思い切り引き裂いた。

「二百六十年だと……兄上とディートリヒは俺を封印する前、確かに俺に二百五十年の封印と言った。二百五十年間反省しろ、と」

「そこに書いてあるとおり、手紙はもう一枚ある。私もあけることはしなかった。お前が来たときに、お前に開けさせるとあるからな」
言つと、ライヒシュタインは封の切られていないもうひとつの封筒をレギナに渡した。

受け取るとレギナは机のペン立てに入っていた、煌びやかな装飾のされたペーパーナイフを抜き取り、封筒を切る。開けると、ふわ

りと風が吹いた。中の手紙を長期保存する為に魔道処理が施されていた。

「紙が綺麗だ」

レギナの取り出した手紙を見て、クライヴは声を漏らした。同じ時が経っているにも関わらずその紙は真つ白で、レギナが誤って触れた文字の部分は、インクがまだ乾いていなかったらしく滲んで伸びた。レギナの親指に黒いインクが付着している。

「なるほど、誰も開けていないようだな。ただの長期保存用の魔道処理をみせかけて、俺以外が開けると封入されている保存ガスが毒ガスに代わる細工がされている」

「そんなことができるのか？」

ラングフェルドが驚いた。

「驚くのも無理はない。特定の個体に対してのみ判断して作用するように入念にプログラミングされた魔道は、禁断魔法を除ければ最高のレベル六十七級魔道修得者でも兄上しかない。魔道砲台の？アエテルアートル？の識別システムも、エーヴェルハルト家の？血の暗示？も、魔道全てに精通したアーウィン兄様だから成せる業だ」

「手紙を読み上げてくれ」

ライヒシュタインが言った。

レギナは封筒を置き、手紙を広げた。そして、文章を読み始める。「最愛の我が弟レギナ・アウグスト・ヴィクトログナ・カラヴレーゼ・エーヴェルハルトへ。お前は今自らの体について疑問に思うか、私に怒りを覚えているだろう。私が、お前の元の体から魂を抜き取り、女の死体に入れ直し、再構成した理由についてはお前が一番よくわかってはいるはずだ。それについては二百六十年間じつくりと反省し、考えてくれたと思う。さて、今お前が考えているのはそんなことではないはずだ。恐らく怒り狂っていることだろう。何故二百五十年たつても誰も封印を解除しに来ない、とな。

私はあえてお前に二百五十年間の封印を言い渡し、実際には二百六十年後に解放するようにエーヴェルハルト家の血に暗示をかけた。

何故だと思っ？

体を移し替えられても、お前は強大な魔道力を保持したままだ。自らの体に高度な魔導陣を描ききれない限り発動しない？ペルフェウルテ？の永久封印には成功したが、それでもお前は強力な魔道をいくらでも使うことができたはずだ。そうなれば、二百五十年後の世界の子孫に迷惑となる。だから私はあえて封印期間を十年延長し、子孫の諸君がお前を制御できるように幼くした。普通の生活をする分には、さしたる問題は無いはずだ。子孫の諸君への私のささやかな優しさだ。

私は最後までお前を愛していた。だから私自身の手でお前の命を奪うことだけはしなかった。せめてものお前への優しさだ。もう一度人生をやり直す権利を与えた。ゆつくりと充実した人生を送ってくれ。お前に残された時間は文字通り無限だ。好きに使っとい。

それでは二百八十四歳を迎えた我が弟レギナよ、私のことは全て忘れ、自分の生きたいように生きる。

追伸、お前の魔道を抑えるために展開した？アエテルアートル？の空間に私とお前が大切に育てた愛犬ハチコウを放しておいたが、彼は元気になっているだろうか。もし元気ならそのまま飼ってほしい。大牙犬は平均して四百年は生きる長命の魔獣だ。お前より先に死んでしまっだろうが、それまでは大切に育ててくれ。

——ナナト皇国軍総帥アーウィン・アウグスト・ヴィクトログナ・カラヴレーゼ・エーヴェルハルト……」

レギナは読み終わり手紙を綺麗に畳むと、入っていた封筒に戻した。そして周囲を見回し、壁に掛けられた魔導猟銃を見つけると、クライヴの方に一瞬だけ不敵な笑みを浮かべてそちらへ走った。

クライヴには、レギナが次に何をするかわかっていた。そしてその結果まで予測できたが、反射的にレギナを止めようとした。しかし、レギナのほうが一歩上手で、捕まえようとした手をするりと抜ける。

壁に掛かった魔導猟銃をジャンプして掴み、レギナはおもむろに

自らの左胸に向けた。

「レギナく——」

飛び出そうとしたラングフェルドを、ライヒシュタインが制止する。

「まあ見てな」

言々とレギナは引き金を引く。

魔道砲台と同じレベル五十級支援魔道？アルゲトウニト？を発動、同時にレベル三十五級破壊魔道？第甲種フォルイグス？の対戦車徹甲弾を生成。

銀色の光。

耳をつんざく発射音。

電磁加速によって超高速で射出された対戦車徹甲弾がレギナの左胸に向かって突進。

レギナの体が吹っ飛び、ライヒシュタイン家第十代当主リチャード・ライヒシュタインの肖像画にぶち当たる。許容範囲量を大きく越えた魔導猟銃は反対側の壁に飛び、ばらばらに砕けた。

「レギナ！」

クライヴの呼びかけに、レギナは笑っていた。

「クソ兄上野郎……どこまでも、クソ兄上野郎だ。アーウィンはこのなることを知っていて二世紀半もの間俺を魔道エネルギーの中に封印したんだ。ただ二百六十年間生かしておくだけじゃない、魔道砲台、あの棺桶、どこまでも兄上の放った魔道の中だったというわけか。何が？優しさ？だ、何が？私のことは忘れる？だ。一生忘れられない体にした上に、自分の手で殺したくないあまりに、死ねない体にしやがったなあんのクソ野郎！」

レギナは叫んだ。それとは裏腹にライヒシュタインは冷静そのものだった。

「それで、これからどうしたい？ レギナ・エーヴェルハルト」

「ああ、どうするかな……やりたいこともない、かといって死ぬこともできない」

「校長、ひとつ提案が」

そう言ったのは、リクロ・ラングフェルドだった。

「言ってみる。ラングフェルド教授」

「実はナナト皇国における、かの最終戦争？ナナレイ戦争？以前の歴史を記述した歴史書というのは非常に少なく、私も歴史解明に手を焼いている次第であります」

「レギナ・エーヴェルハルトを本校に所属させると言いたいのか？」
ライヒシュタインは鋭い眼でラングフェルドを見る。

「彼女——いえ、彼は生き証人です。これ以上ないほどに勿体無い逸材です」

「？彼女？でいい。もう俺は女として生きる……」

レギナが呟いた。

「エーヴェルハルト卿はあらゆる破壊魔道に精通していると聞く。学校に爆弾を置くようなものだ。もしものときは君が責任を取ってくれるのだろうか、ラングフェルド教授」

「俺が快楽殺人者にでも見えるのか？　ずいぶん言い草だ」

「我がライヒシュタイン魔道学校二万二千名の生徒と、三千八百名の職員をたった一人のために危険にさらすほど私は馬鹿ではない。そういうことだ」

ライヒシュタインはレギナを睨んだ。

「もし、レギナが学校に対して危害を加えるのなら、今度は僕が魔道砲台の中に二百五十年間封印されます！」

クライヴはライヒシュタインに向かって叫んだ。もちろん魔道力を持たないクライヴを封印したところで意味は無いが、それでも、クライヴはレギナを放っておくわけにはいかなかった。何より事の発端は自分自身なのだから。

「レミントン君。君はエーヴェルハルト家の？血の暗示？によつて人生を狂わされかけていることに気づいているかね？」

「ええ。今日の今程、僕の姓にエーヴェルハルトが入っていることを恨もうと思つた日はありません。でもなんか理不尽じゃないです

か、その、いろいろと……」

「レギナ君」

ラングフェルドは壁に寄りかかるレギナを見る。

「君はこのライヒシュタイン魔道学校で学習をしたいか？」

その問いを待っていましたと言わんばかりにレギナはその場から立ち上がり、ライヒシュタインの前まで歩いた。そして思い切り詰め寄り、一度机を拳で強く叩いた。

「イエスだよ、グイセラス・ライヒシュタイン校長。これであんたはもう俺を拒否できないな」

クライヴははつとし、魔道学校の規則を思い出す。

「ライヒシュタイン魔道学校は、同校での学習をのぞむ者に対し、いかなる場合においてもそれを拒否してはならない。なるほど、ラングフェルド教授はそれを知っていて——」

クライヴはラングフェルドを見る。ラングフェルドはウィンクして返した。

「まあ、そういうわけだ。よろしく頼むよ校長。俺は第二の人生のスタートとして、この学校で勉強することに決めた。ガキの体じゃ何かと面倒くさいからな」

「……仕方ない。先代の校長がお決めになったことだ、私は従うしかない。編入を認めよう。それで、何処に入りたい？」

言いながらライヒシュタインはしぶしぶ自分の机から誓約書を取り出し、レギナに渡す。

「中等部武術科、名前はレギナ・レミントン。続柄は在校生クライヴ・レミントンの妹だ」

「え？」

クライヴはレギナを見た。

「自分の顔を見てから考える。誰がどう見ても俺たちは双子だ。双子なら姓は同じじゃないとまずいだろう」

レギナはそう言うと言約書に新たに？レギナ・カラヴレーゼ・エーヴェルハルト・グインツェル・レミントン？と書き入れた。

「でも、いいの？」

「何がだ？ 武術科に編入する理由なら、レベル七十級の魔道を使いこなした魔道能力者が魔道科に入るとまずいと判断したからだ」

「いや、僕の妹って……」

「別に姉でもいいけどな。でも、どうにも俺の中に二番手根性が住み着いているらしくて、兄上とか、姉上とかそう呼ばれるのは好かない。逆に呼ぶのは容易い、だから俺としては妹のほうが楽だ。不服か？」

「いや……別に」

クライヴは複雑な気分だった。見た目は確かに双子だし何かと妹のほうが、都合がいいのはわかる。しかし、中身は男でそもそも年齢差が二世紀半以上についている妹なんて前代未聞だ。

——慣れるしか、ないか。

「書いたぞ、校長先生」

レギナは最後に誓約書の下にサインをしてライヒシュタインに渡した。

「ようこそ、我がライヒシュタイン魔道学校へ。歓迎しよう」

「本当はしたくないくせに」

「建前だ」

こうしてレギナはレギナ・レミントンとして中等部武術科への編入を済ませた。ライヒシュタインは終始良い顔をしなかった。

「それでは校長、失礼します。早速、私の研究室に来てほしい。いろいろ聞きたいことも山ほどあるからね」

ラングフェルドは言いながらレギナをエスコートする。

「協力できるところまでならいくらでも」

「あ、ちよつと……」

出遅れたクライヴは駆けようと足を一歩踏み出す。

「待ちたまえ、クライヴ・レミントン君」

ライヒシュタインはクライヴを呼び止めた。

「は、はい……校長先生」

「私は最近、魔道学校の備品が生徒や職員によって盗まれるんじゃないかと危惧を置いてな、学校の警備状況を確かめようと思っていた。それを実行するためにランダムに一人生徒を選出して、武術科の道場から斬断剣を一本、魔道科の備品室から魔導銃と数発の魔導弾を実際に盗ませる抜き打ちの実験を試みたのだ。するとどうだ、斬断剣と魔導銃、魔導弾の全てが盗みだせた。これは由々しき事態だと、そう思わなかね？」

「……ええ、そうですね」

クライヴは顔に嫌な汗が滲み出ているのがわかった。ライヒシュタイン校長は遠隔魔道の使い手だということをクライヴは知っていた。校長室から出ることなく学校全体を把握できるのは、遠隔魔道を使っているからだ。校長は、クライヴがそれぞれの備品を盗み出したことを知っていたのだ。

「私は武術科と魔道科、それぞれの責任者にこの事態を報告しようと思う。そして警備の強化を頼める良い機会になった。感謝しているよレミントン君。ああ、君の学生寮の寮長には、私がこの件についてレミントン君に協力してもらったことを伝えておこう」

「校長先生、それは……つまり」

「私はただ、事実を言っただけだ」

ライヒシュタインは優しい笑顔でクライヴに言った。クライヴが行った窃盗行為について、魔道学校最高責任者が黙認した。今回の件についての罰則も当然消える。

——やっぱり、校長先生は悪い人ではなかった。

「ありがとうございます！」

クライヴ・レミントンは精一杯の気持ちをこめて、今までで最高の感謝を述べた。

？・そして、はじまる時

決して許されることではない。

人間のすることではない。

あれは悪魔にちがいない。

悪魔の呪いはまだ終わっていない。

今度は、こちらが仕返しをする番だ。

今がそのとき。

我々は、あの戦争の借りを返さねばならない。

今こそ。

奴が復活する今こそ。

時は満ちた。

悪魔の力を用いて。

悪魔に鉄槌を。

正義の鉄槌を。

ベルリヒルゲン地方オルドレイサンシ。ヒイツミ大陸を東西に横切る大陸間横断鉄道の列車は、かつてナナレイ戦争の時にナナト皇国の敵国として存在したレイサンシ帝国との国境を走っていた。大陸が統一され、ナナト皇国のみになった今ではただの荒野でしかないこの地も、かつては最大の激戦地として互いに睨みを利かせていた。

列車はナナト皇国首都アウグストに向かっていた――？ある物を載せて。

ナナト皇国軍親衛隊の制服を着た兵士は、重要物資護送の任務を受けて、列車内を見回っている最中だった。肩には長銃身の軍用魔導突撃銃^{サルトライフル}？ナナト一四式^{ヒトヨ}？を掛け、腰には親衛隊のみが装備できる斬断剣^ア？？式イライデ？の白い鞘が下げられていた。

親衛隊兵士は四両の客車と一両の貨物車を全て見回り異常がなか

ったことを上官に報告しようと、客車の廊下を歩いていた。

客車は全て空であり、乗客は一人も居なかった。乗っているのはナナト皇国軍の数十名の兵士であり、座席に座る者を含めた全員が突撃銃で武装していた。

二両目の一等客車から一人の男が出てきた。親衛隊の赤い制服を着ており、襟の階級章は男が？大尉？であることを示している。

「異常はないか」

「は、今のところは確認しておりません。レミントン大尉」

「よし、引き続き物資の護衛に当たれ。気を抜くなよ？」

ヴェルナ・レミントン親衛隊大尉は、今回の物資護送任務で副指揮官を担当していた。任務遂行中の列車の中では二番目に高い階級だったが、一般の兵士に融通が利くことから、実質兵士たちに命令を下す役目を担っていた。

「大尉、この任務が終わったらまた飲みに行きましょう。大尉のおごりで」

兵士の一人が言った。

「飲みに行くのは構わないが、そろそろ別の奴に代金を支払わせろ。俺の財布はそろそろ大寒波に見舞われる」

「じゃあ、ライヒシュタイン少佐とかは？」

「やめとけ、長い付き合いの俺ですらレナードが金を出すところを見たことがないんだぜ？」

ヴェルナは一等客車に向けて指を差す。中で引きこもっているレナード・ライヒシュタイン少佐が窓越しにヴェルナを睨む。

「……聞こえてますよ、たぶん」

ナナト皇国軍一般兵の伍長がヴェルナに小声で言う。それを聞いたヴェルナは恐る恐る後ろを見た。

扉の前でレナード・ライヒシュタイン少佐が腕を組み、鬼の形相でこちらを見ている。

「貴様等！ こんな重要な任務のときにごちゃごちゃと私語をするな！」

レナードは兵士を叱咤した。

「ライヒシュタイン少佐は、こつそりと私語をしろと仰っている」
ヴェルナは、わざわざレナードの横に並び言った。兵士たちが笑う。

「レミントン大尉、この騒ぎはお前が原因か？」

「騒ぎという程ではありませんが、多少世間話という奴を」

「世間話なら任務が終わった後でやれ。全く……使えない連中だ」
そう言っておきながら、内心ではレナードはこの兵士達を信用していた。ヴェルナが気さくなお陰で、兵士たちが余計な緊張をせずに済むのは助かることだった。しかし、度を越えると軍人としての適当な緊張感が無くなってしまったため、たまにこうして自分が出る必要があった。だが、それ以外に関しては悪くない。兵士たちの態度とは裏腹に、任務への忠誠心はとても強いものであることを知っているし、自分をナナト皇国軍人として誇らない者は一人も居なかった。ヴェルナとレナードが良い具合に飴と鞭になっている。

——だからこそ、私はヴェルナと長い間組んできた。

レナードもかつてヴェルナの気さくな性格に助けられた一人だった。今だって、彼のお陰で普段は犬猿の仲とも言われている親衛隊と一般兵士の間に奇妙な友情が生まれていた。それによってこちらが指揮しやすいのも確かだった。

司令室にしている一等客車に戻り、レナードが任務の計画書に眼を通してしていると、ヴェルナが帰ってきた。

「どうなんだ、レナード」

「何がだ？」

「俺の眼には、今のところ順調に見える」

ヴェルナはレナードが眼を通していた計画書を見る。

「順調だ。あと三時間といったところだろう」

「ここいらは因縁のある土地だ、空気が重たい。早いところカラヴェーゼに帰りたいよ」

「エリーザが恋しいか」

「お前こそ、リネアが恋しいんじゃないのか？」

「恋しくないと言えば、嘘だ。だがそれ以上にテレーゼの顔が見たいよ。お前だって、息子に何年も会っていないんだろ？」

ヴェルナは、窓の外に広がる、草木の一切生えていない黒い荒野を見た。そこは二百六十年前、ペルフェウルテが放たれた爆心地だった。

「クライヴか。お前の親父さんの経営している魔道学校で元気にやっていることだろう。エリーザに電話をかけると、いつもクライヴから送られてくる手紙について話すからな。そうそう、テレーゼのこと話していた。いい加減？お父さんが恋しい？といって泣くことはしなくなったらいいな」

「もう何歳だと思っている。クライヴとテレーゼは同年だぞ？」

「そうだったな。——たまには会いに行くのも悪くは無いと思う」

「たまには、か……」

レナードは流れていく、荒涼な景色を眺める。

「……俺はいつだって会いたいよ」

列車の車輪がリズムを刻む音だけが部屋に広がった。

沈黙。

ガクンッ！

突然、列車が大きく揺れた。同時に異常な金属音。

机の上に置かれた書類が散乱する。レナードは机に、ヴェルナは座席に掴まった。列車は異常を察知して急ブレーキ、車輪が火花を散らす。

「何があつた、機関室！」

ヴェルナが内線電話の受話器を取って叫んだ。

「列車が何かを巻き込みました、一度点検をする必要があります！」
受話器越しに機関士が叫ぶ。

「ヴェルナ、兵士八名を点検が終了するまで周囲に配置させる。重要物資には親衛隊員二人、列車の屋根にも狙撃手三名と観測手三名を配置し、周辺の早期索敵も同時に行え」

レナードが冷静に指示する。

「了解、少佐殿」

言つとヴェルナは直ぐに客室に飛び出し、待機中の兵士をレナードの言うとおりに配置させた。ヴェルナ本人も武器庫から半自動式スナイパーライフル
魔導狙撃銃？ナナト一式？を装備して列車の屋根に上る。

「大尉、一体何が――」

狙撃兵の一人が尋ねる。

「心配すんな、どうせ動力車が石つころを跳ね上げちまったのさ。それより、人為的に置かれた可能性もある、集中して索敵に当たれよ」

「了解、大尉が居れば心強いです」

観測手が言つた。

「嬉しい事を言う」

「事実を言つただけです。自分は、もしナナト軍最強の狙撃手を決めるときがあれば大尉に一票入れますよ」

「俺も賛成だ。大尉殿に勝てる狙撃手なんていない」

屋根上で警戒する狙撃兵の一人は言つた。

「……責任重大だな。部下の期待ほどプレッシャーなものはないよ」
ヴェルナは狙撃銃を右手に持ちながら、左手の双眼鏡で周囲を見回した。どこまで行っても黒く荒涼な大地が広がるだけで、それ以外には何も無い。見渡しが良い反面、いざとなったときに隠れる場所が無い。

「大尉、ちよつと！」

下から声がした。呼んでいるのは機関士だった。恐らく原因が判明したのだらう、とヴェルナは思った。

「待ってる、今そつちに行く」

言つと、ヴェルナは狙撃銃を肩に掛け客車の屋根から飛び降りた。すぐに体勢を立て直し、機関士のもとへ急ぐ。

動力車横では、二人の機関士とレナードが深刻そうに車輪を眺めていた。

「原因は」

「置き石だろう。見ろ」

「見てるよ、こりやしばらく足止めか」

車輪を見たヴェルナが言った。車輪だけではない、先頭の動力車そのものがレール一本分脱線していた。重量百トンを超える動力車を持ち上げ元に戻すなど、いかなる魔道を使ったとしても不可能だ。「通信兵、本国に応援要請を」

レナードは無線で通信室にいる兵士に命令した。

「それが……先程まで繋がっていたのですが、不調でして」

「不調？」

「こんなに視界良好なのに、そもそも通信を遮るものなんて何も無いぞ？」

ヴェルナが言った。

「原因は不明ですが、ノイズが酷いんです」

その通信兵の発言に、レナードとヴェルナは同時に顔を合わせた。考えていることは同じだった。

——魔道妨害だ！

そしてそんな高度な魔道を使える魔獣は存在しない。そうすれば答えは自ずと出た。

「総員、戦闘配置！ この脱線事故は人為的なテロ行為だ！」

ヴェルナがそう叫んだ瞬間、後方車両側で銃声がした。

——誰かが、物資を狙っている！

列車は見えない敵の長距離魔道狙撃に襲われた。兵士たちは何処に銃を向けるでもなく、一方的に撃たれて死んでいった。

「光学迷彩、空間魔道か」

言うつとヴェルナは双眼鏡をスキャンモードに変更する。スキャンモードにすることにより、魔道の発生を視覚化することができる。実際に感じることでできない魔道に対して開発された、魔道と機械技術が上手く融合した結果だ。

ヴェルナは双眼鏡を眺める。魔道を発生させている魔道士がいる

はずだ。より顕著に発生している影を探す。

——見つけた。

すかさず肩に掛けた狙撃銃を影に向けて一発撃つ。レベル二十五級支援魔道？アルヴトウニト？の電磁加速射出作用によってレベル二十級攻撃魔道？イグス？のライフル弾を発射、見事に敵の影を貫いた。何も無かった荒野から血が吹き出る。

更にレベル三十級空間魔道？インソネブラ？が解除され、敵の姿が露わになった。

「列車を守りつつ、敵を蹴散らせ」

突撃銃を持って応戦するレナードが叫んだ。

光学迷彩の解除された敵は魔獣？^{ハツキヤクバ}八脚馬？に乗ってこちらに突撃してくる。ヴェルナはその突撃してくるテロリストが持つ装備に背筋が凍った。手持ち式の魔導砲？パンツァー？だ。

「全員伏せろ！」

魔道砲がレベル四十五級破壊魔道？第丁種フォルイグス？のロケット弾を発射。ロケットは列車三両目の客車を爆破した。衝撃で何人も兵士が空中を舞うのをヴェルナは見た。

ロケット弾の命中を機に、次々と魔導突撃銃？アツカ^{ヨシナチ}四七式？を持ったテロリストが銃を乱射しながら乗り込んでくる。

ヴェルナはすかさず次弾を装填し応戦する。ナナト軍側は、当初優勢だったもののテロリストに地の利で押され、戦況は悪くなる一方だった。

——チクシヨウ、チクシヨウ、チクシヨウ！

「俺にはな、家族が居るんだ。今年十五になったばかりの息子と、妻が、俺の帰りを待ってるんだよ。おいレナード、聞こえてるか、俺たち死んじやいけないよな？」

隣で聞こえていた発砲音がいつの間にか聞こえなくなっていたことにヴェルナは気づく。そちらを向くと、既に戦友は頭部にレベル二十級攻撃魔道？イグス？のライフル弾を食らって息絶えていた。

「レナード、レナードお……お前なにやってんだよ、そんなんじや

テレゼとリネアが泣いちゃうぞ。いつだって勝って、しれつとした態度で作戦を完遂させるのがお前の取り柄じゃなかったのかよ。返事しろよレナード・ランナーベック・リンドベリ・グラ・ライヒシュタイン少佐！ そんな昇進、俺が認めないからな、絶対に、絶対に！」

狙撃銃の引き金を引く手が寒くなった。息をするたびに体温が奪われていく気がする。おかしい、今は七月下旬だ、寒いはずがない、おかしい、おかしい。

ヴェルナは、次第に眼がかすれていくことが悔しくてたまらなかった。引き金を握る手にも、何故か力が入らない。

—— チクシヨウ、チクシヨウ、チクシヨウ！

「こんなところで死ぬるかよ……エリーザ、クライヴ、俺は……」
そう呟きながら、ヴェルナ・エセルバート・ナッシュ・ヴィンツェル・レミントン大尉の命の炎が薄れ、そして消えていった。

* * *

クライヴがレギナを封印から解除してから、三週間が経った。

今、ライヒシュタイン魔道学校は夏休みを迎えていた。生徒の半分程が帰郷し、生徒の半分程が魔道学校に残っていた。身寄りがないわけではなく研究に忙しかったり、長期の実戦訓練に向かったりと、それぞれの学科によっては夏休みを利用して、長期休暇中ではなければならないような授業を展開している。

クライヴ・レミントンは、そのいずれでもなかったが魔道学校に居た。魔道学校の規則に従い、補講を受けていたのだ。補講は普段の授業形態に則って行われるため、クライヴにとっては夏休みとは関係の無い生活を送っていた。

朝六時三十分に起床し、七時三十分までに朝食を済ませる。それから始業時間の九時までは自由時間で、その間に支度を済ませる。クライヴは毎朝早めに寮を出て、ラングフェルド研究室に寄る。

クライヴを目覚まし代わりに使っているラングフェルドを起こしに行くのはともかく、隣に厄介な奴が増えてしまったので手間が二倍になった。レギナである。だが優等生であるレギナは補講に出るまでも無く、夏休み中は無視をしてラングフェルドだけを起こす。その後、古城の侵入禁止の裏庭で飼われることになったハチコウに、乾燥させた魔獣の肉のエサをやりに向かい、少しだけ遊んでやる。そうして毎朝遅刻ギリギリになって教室に向かうのだった。かれこれ三週間はこのメニューで朝を過ごしている。

今日は午前中で補講が終了した。しかし、そのかわりに宿題が大量に出された。どうせ暇にしているだろうと思い、クライヴはラングフェルドの研究室へと向かった。

「へえ、これはすごい！」

「天性の勘でもあるのか？」

「やだなあ、運ですよ」

道を歩いていると、射撃場から聞き覚えのある声が聞こえた。同時に射撃音。続けて三発。

——そうか、レギナ、射撃部に入ったんだっけ。

クライヴはポケットから懐中時計を取り出す。時間に余裕がある、すこし寄り道してもいいだろう。そう思い、第二学棟から射撃訓練場に進路を変更。

射撃場には的に向けて競技用魔導ライフル？リトルブラザー？を構えるレギナの他、二人の上級生がレギナの射撃を見ていた。二人はクライヴも知っている。一人は高等部魔道科三年のヴィルフリート・コルトー。射撃部主将で前回の魔道学校対抗魔導ライフル射撃競技で優勝をおさめた人物。もう一人は高等部魔道科二年のイクセル・アリギエリ。こちらも魔道学校対抗魔導ライフル射撃競技で準優勝をおさめた人物。つまりは射撃部のトップエース二名。

「補講は終了したのですか？御兄様？」

クライヴに気づいたレギナは意地の悪そうな顔で言った。

「まずまずといったところだよ？我が妹？」

クライヴもそれに返して言った。

「君がクライヴ・レミントン？」

コルトーが言った。

「ええ。妹がお世話になっっているようで」

言つとクライヴは一礼する。

「いやいや。君の妹は恐ろしく優秀だよ。聞けばこの前こつちに編入したばかりらしいじゃないか。彼女の射撃の腕はどこで？」

「ナナト皇国軍陸戦ぶた——」

「軍人の父からだと思います！」

クライヴはレギナの声に被せるように叫んだ。レギナはクライヴを睨む。

「別にいいじゃん……」

「父が、ナナト皇国軍陸戦部隊出身で、魔道学校に通う僕の変わりにレギナに射撃を教え込んだんだと思います！」

「なるほど、通りで構え方が軍人らしいと思つたんだ。普通こついた競技用ライフルは、立射するときは右肩に銃床を当てて、左手はハンドルを持つようにして銃身を支え、左肘を腰骨に乗せるような射撃体勢をとる。でもレギナさんは銃身、機関部に近い位置に左手を巻きつけるように持っている」

コルトーは、競技用ライフルを構えるレギナを指差して言った。

次に、自分でもライフルを持っているような仕草を見せる。

「矯正されても困りますよ、私、ずつとこつやってお父様に教わつたんですもの」

レギナが言った。クライヴやラングフェルドといった？中身？を知っている者以外の前ではすっかり女の子になっている。

「勿体無いなあ。この腕ならラングフェルド先生の記録を超えることもできると思うんだけどなあ」

アリギエリがレギナを褒めちぎった。

「え？ラングフェルド先生って射撃部だったんですか？」

クライヴがアリギエリに尋ねた。十年近い付き合いになるラング

フェルドは、そんなことを今まで一言も言わなかった。クライヴにとって初耳だった。

「射撃部も何も、魔道学校射撃部始まって以来の記録を打ち立て、未だに誰も越えられない壁を作った史上最強の射撃選手だよ。」

「元、ね」

「元……？」

レギナが言った。

「射撃部の練習中、誰かが誤って競技用でなく実戦用の魔導弾をライフルに入れてしまったんだ。制限の掛かった競技用魔導弾は、誤って高位魔道を発動したとしても不発に終わる。でも実戦用の魔導弾はそんな制限はないから、発動してしまったんだ。それを止めるために先生は誤って発動させてしまった後輩からライフルを奪い、暴走する魔道を停止させた。そのとき魔道の強い光をもるに受けてしまつて、視力が大幅にそがれた。普通の生活をする上では支障の無い程度だったけど、射撃選手としてライフルを握ることはもうできなくなった。俺は先生に憧れていた。だから色々調べた。でも先生本人はそのことを頑なにして話そうとはしなかった。過ぎたことだつて言つてね」

コルトーは、競技用ライフルを眺めながら語った。

「ふうん……あの先生、ただの変態だと思つたけど凄ところあるんだ」

レギナは呟く。クライヴも、ラングフェルドが眼鏡を掛けているのは魔道端末での仮想空間遊びのやりすぎが原因だと思つていた。

「ここに居たか！」

一人の少年が、そう叫んで射撃場に飛び込んできた。クライヴと同じ中等部武術科の制服を着ている。

「パーシイ？ どうしたんだそんなに急いで」

「ラングフェルド先生に言われたんだよ、クライヴとレギナを連れて来いって、大至急！」

クライヴがパーシイと呼ぶ友人、パーシヴァル・アリンガムは言

った。

「先生が？」

レギナは競技用ライフルをアリギエリに渡すと、クライヴと共にパーシヴァルに連れられてラングフェルド研究室へと駆けた。

「何があつたんだ？」

レギナは尋ねる。

「東のほうで列車事故があつたらしいんだ。それで、その列車にお前らの親父さんが乗っていたらしい。とにかくラングフェルド先生がお前らを探してる」

「父さんが？」

その知らせに、クライヴは胸騒ぎがした。父が列車事故に巻き込まれたというのは多分嘘だ。自分の父親を知っているクライヴだからこそ、その裏に秘められた真実を直ぐに察することができた。皇国軍親衛隊の父がただの列車事故なんかには会うわけがない。

研究室に行くと、ラングフェルドが落ち着きの無い様子でそわそわと研究室内をひたすら歩き回っていた。

「先生！二人を連れてきた！」

パーシヴァルが研究室のドアを開ける。

「ああ、クライヴ、レギナ。何かあつた場合は僕のところに連絡が来るように、校長先生に言われていてね。さつき君のお母さんから連絡をもらったんだ」

「それで、母はなんて？」

その質問にラングフェルドはうつむく。きつと悪い知らせだ、とクライヴは思った。

「君のお父さん、ヴェルナ・レミントン大尉が殉職した、と……」
「やっぱり、とクライヴは思った。その知らせに泣きそうになったが、クライヴは涙をこらえた。」

「クライヴ……」

レギナが涙をこらえるクライヴの肩を抱く。

「……同じ任務についていた、校長の息子さんも殉職したらしい」

「テレーゼのお父さんだ」

そう言って、クライヴは幼馴染の悲しむ顔を一瞬頭に思い浮かべた。

「先生、私たち直ぐにカラヴレーゼに向かいます」

レギナが言った。

「わかった、直ぐに列車の切符を取ろう」

「悲しむなよな、クライヴ、レギナ。お父さんを笑顔で送ってやれよ」

パーシヴァルが言った。

「ありがとうパーシー」

クライヴは寮に戻り、荷支度をする。

——とんだ帰郷だ。今年は帰るつもりなかったんだけどな。

ふと、ベッドの上に置かれた幼いクライヴと父ヴェルナだけで撮った写真を見つけ、手に取った。

魔道科に行かなかったのは、魔道力が発現しなかったからではない。最初は魔道科に行こうと考えていた。魔道力が発現しなくとも、魔道科に入ることにはできた。それでも武術科を選ぼうと思ったのは、自分の中に、どこか父への憧れがあったからに違いないとクライヴは考える。

——無理だよ、涙をこらえるなんてさ。

クライヴは制服の袖で赤くなった眼を拭くと、寮を飛び出した。廊下でふくよかな体をした寮長ミセス・ニッコーに鉢合わせる。

「寮長先生……」

「話はラングフェルド先生から聞いたわ。早くお行きなさい」

「はい、ありがとうございます」

閉ざされた正門の横にある駐車場で、ラングフェルドとレギナが待っていた。クライヴは二人に駆け寄る。

「準備はできたか」

レギナが言った。

「ええ、すみません。お待たせして」

「行こう。駅までは僕が送る」

言っと、ラングフェルドは駐車場から車を出す。両ドアにライヒシュタイン魔道学校の紋章が入ったオリブグリーンの四輪駆動車だ。都市内で使う車では魔獣への対策が不十分なので、各都市や魔道学校には対外用の自動車が用意されている。その大半は退役したナナト皇国陸軍の戦闘車両をレストアしたもので、中には魔道機関砲が装備されているものもある。ラングフェルドが選択してきた車も、元はナナト軍の偵察用車両だったものだ。

警備員によって、魔道学校正門の扉が開かれる。クライヴにとって二年ぶりの、レギナにとっては二百六十年ぶりの外の世界だった。石段の敷かれた人間の生活道路には、真横にフェンスが流れていた。一見弱々しい有刺鉄線だけのフェンスだったが、魔獣対策のための魔道障壁が張られている。だがちゃんと整備されている区域は都市から数キロのところのみで、都市と都市を結ぶ距離が長ければ長いほどその間は魔道障壁が薄れていることが多い。しかし、駅のある隣の都市までは十キロとない距離だったので、しっかりと整備がなされていた。

「相変わらず何も無い景色だ。ただ緑色の雑草が生えていて、どこまでも続く平原で……そう思うだろ、クライヴ」

レギナが言う。

「うん」

クライヴが頷いた。

「二百六十年間も変わらない景色というのは、案外とすごい事かもしれないな……そう思わないか、クライヴ」

「うん」

「悪いな、こういうとき、どうしたら良いかわからないんだ。一緒に悲しんでやることもできない。でも、うん……」

言葉が浮かばないレギナは、途中で黙った。

「大丈夫、僕は大丈夫だから」

クライヴは掠れ、震える声で言った。今にもダムが決壊しそうな

のは、レギナから見ても手に取るようにわかった。

「……後々辛くなるからな、泣けるうちに泣いておいたほうがいい。ナナレイ戦争で戦友や恋人のアンリエッタを失ったときは泣く暇が無かった。それを後悔したときには、もう遅かった。だから、泣けるときに泣いておけ」

レギナはクライヴの肩を抱いて優しく言った。

「うん」

クライヴは小さく頷いたまま、無言になった。

車は平原を走る。

やがて遠くに駅が見えた。ライヒシュタイン駅だ。赤いレンガの尖塔が何本も立っており、兵士が魔獣の接近を見張っている。

ライヒシュタイン駅は、それ自体が一つの都市となっており、極西のライヒシュタイン地方で最大の駅でありターミナルとなっている。ここからバスを使ってライヒシュタイン地方のあらゆる都市へと向かうことができる。言わばライヒシュタイン地方の玄関口であり、交易の中心地なのだ。

門の前にやってくると、警備員が身分を確認しに車に向かってきた。車が魔道学校所有物であることを確認すると、半ば顔パスのようになりと門の中に入れてくれた。検問待ちの一般車両を横目に駅ターミナルへと向かって走る。

「ところで、ラングフェルド。カラヴレーゼ行きの切符の代金は誰が支払ったんだ？　いくらカラヴレーゼが隣の市とは言っても、その旅費は結構高いだろう？」

レギナはラングフェルドから二枚の切符を受け取り、尋ねる。

「そのからくりは、こういうこと」

ラングフェルドは着ているコートの内ポケットから白い封筒を取り出し、レギナに渡した。封筒には校長の名前が書かれている。

「なるほど、そういうことか」

「ライヒシュタイン校長は執務が忙しくてね、自分の息子の葬式にも出られない状況だ。だからせめて直筆で手紙を書いて、それを君

たちに渡してもらおうっていう手筈さ。だからこの旅費はライヒシユタイン校長持ちだよ」

「了解、しかと受け取った。ちゃんと向こうの人に渡すよ」

「校長によれば、クライヴが知っているらしいから、クライヴに頼ってほしいとのことだ」

レギナはうつむいたクライヴを見る。

「……いや、俺がなんとかする。今のこいつには重い役目になる」

「大丈夫？」

「俺を誰だと思っている？」

レギナの普段の態度にラングフェルドは安心した。外見からすれば双子でほとんど同じだが、中身は大きく違う。レギナ・エーヴェルハルトは誰よりも長く人生を経験しているのだ。下手をすれば、自分よりも頼りになる奴だな、とラングフェルドは確信する。

「クライヴ君のこと任せたよ」

「おう、任された」

言うとなレギナはクライヴの手を引き、クライヴの荷物を持ってやる。そして一度ラングフェルドの方を向いて小さく手を振った。ラングフェルドはそれに返す。

「こう見ると、やっぱり双子だな」

ラングフェルドは呟いた。

最後に改札口を抜ける二人の姿を確認すると、ラングフェルドはサイドブレーキをおろしてアクセルを踏み、元来た道に戻った。

* * *

カラヴレーゼ地方カラヴレーゼ市。ナナト皇国西に位置する、ナナト七大貴族のひとつであるエーヴェルハルト家の統治領。クライヴの故郷であり、レギナの故郷でもあるこの地に大陸間横断鉄道の駅があった。

息子が向かっているとの連絡をラングフェルドから受けたエリー

ザ・グラ・ヴァーリア・カラヴレーゼ・エーヴェルハルトは、いてもたってもいられずに二人の付き人と共にカラヴレーゼ駅のホームにきていた。付き人の一人はエリーザの魔道修行の弟子でクライヴの幼馴染テレーゼ・カラヴレーゼ・マーティンソン・グラ・ライヒシュタイン。もう一人はテレーゼの母でありエリーザ付きの侍女長^{メイド}リネア・マーティンソンだった。

カラヴレーゼ駅長メルヴィンは、領主の娘であるエリーザにもしものことがないようにそわそわして見守っていた。

「駅長！」

エリーザはメルヴィン駅長を呼び止める。

「はひつ！　なんでございましょう、お嬢様」

メルヴィン駅長は動揺のあまり舌をかんだ。

「到着予定時刻から二分経っているけど、列車が姿を現さないのは何故？」

「は、申し訳ありません。異常の連絡は入っておりませんのでもう直ぐ到着するかと……」

駅長が言ったそばから、遠くで警笛の音が聞こえた。一分も経たないうちに列車が駅構内へと入ってくる。

「師匠^{せんせい}、来たよ！」

テレーゼが列車を指差し、エリーザに報告する。

「あの列車には、私の大切な一人息子が乗っていますの」

「はあ、お子様でいらっしやいましたか」

駅長はエリーザの横で列車に合図を送った。ゆっくりと列車が減速。

やがて停止した列車から、成長した息子の姿が見えた。いや——一人ではない、二人だ。一人は確かに私の息子クライヴ。見間違えることは無い。ライヒシュタイン魔道学校の青い制服着ているのが何よりの証拠だ。では隣にいる赤い女子生徒用の制服を着ているのは誰？　というより、どちらが私の息子？

「師匠、クライヴが増えてる……しかも、片方は女の子」

「エリーザ様のお子様は双子でしたか」

駅長が言った。

「ええ、私の知らないうちに増えていたみたい……」

クライヴとレギナは、人ごみの中からやがてエリーザを見つけ、歩み寄った。

「お久しぶりです。お母様、リネアおばさん、テレーゼ」

エリーザ、テレーゼ、リネアの三人は同時に瞬きをして、眼を擦った。見間違いではない。

「クライヴ……よね？」

テレーゼが言った。

「クライヴ君、ね？」

リネアが言った。

「クライヴ……？」

エリーザが言った。

「クライヴです」

クライヴが言った。

「じゃあ、こっちの子は誰？」

テレーゼがクライヴに尋ねる。

「えーっと、お母様のお祖父様のお祖父様のお祖父様のお祖父様の弟の——」

「レギナ・アウグスト・ヴィクトログナ・カラヴレーゼ・エーヴェルハルト」

レギナが言った。

「レギナ……二世紀半前に封印されたレギナ・エーヴェルハルト？ てつきり男性だと思っていたわ。それになんというか、そっくりで……」

エリーザはクライヴとレギナを見比べる。

「クライヴ、俺は何処から説明すればいいんだ？」

一行は屋敷の車でカラヴレーゼ市の中心に位置するエーヴェルハ

ルト家の大屋敷に向かった。領主の屋敷ということもあって、カラヴレーゼ地方では最も大きな敷地があった。それだけで一つの都市のように見える屋敷の周囲には城壁があり、七つの頂点に位置する見張り台ではそれぞれエーヴェルハルト家の近衛兵部隊が監視していた。

銀色の城門をくぐり抜ける。格子状の門にはエーヴェルハルト家の紋章が描かれている。屋敷に行くまでの数百メートルで出会うエーヴェルハルト家の兵士は皆、普段の制服ではなく、儀式用の服を着ていた。明日行われる葬儀の為だ。

「ここも何も変わっちゃいない。相変わらずだっ広い御庭に、ナト皇宮と同じ石を使った魔道城壁と中心の屋敷。幼い頃、ハチコウやアーウィン兄様と遊んだときのままだ。木の一本一本すら配置が変わっていないように見える」

窓の外に広がる屋敷の景色を眺めながらレギナは言った。

「やはり貴方は、レギナ様なのね？」

エリーザはレギナを見て言った。

「そう。さっきクライヴが話したことは全て事実だ。……まだ疑っているのか？」

「いえ、あまりにもクライヴに似ているもので。いくらエーヴェルハルト家が、容姿が似かよりやすい血筋だとしても、双子という程ではないわ」

「本当に似ていらつしやいますものね、お二人は」

リネアが言う。

「あたしがわからなかったくらいだもん。もう双子としか言いようがないわ、ね？ クライヴ」

テレエゼが、横に並ぶクライヴの腕を抱く。

「う、うん……そうだね」

車はやがて、屋敷の眼の前で停止した。兵士によって車のドアが開き、降りる。待ち構えていたのは数百名の召使だった。全員が黒い正装をしており、どこことなく悲しげな表情を浮かべている。

「七大貴族の中で最も高貴と言われるエーヴェルハルト家らしい出迎え方だ。自らの視線を平民の位置に下ろしたがるライヒシュタインとは全く違う、自らの権力に正直で、自己陶醉気味のエーヴェルハルト家がよくわかるぜ。どうしてそんな相反する考え方なのにエーヴェルハルトとライヒシュタインがナナト皇国で最も仲良しなのか未だに理解がでらん」

レギナは二百六十年ぶりに帰ってきた我が家を見て呟く。上を見上げれば太陽に不満を持った職人が作ったようなシャンデリアと、空の色が気に食わない人間が作ったようなステンドグラスが互いに主張しあい、壁や床、柱は全て極度の先端恐怖症の人間がデザインしたとは思えないほどに磨き上げられている。

「クライヴ、直ぐにお祖父様にご挨拶なさい」

「わかりました。行こうレギナ、渡すものもあるしね」

「ふん、列車の中で散々泣いたから元気になったか」

レギナが意地悪く言う。

「まあ、そんなところ。すこし泣き足りないかも」

クライヴが苦笑する。

「俺の胸でよければいつでもどうぞ」

「ちよつとクライヴ、今度は私の胸で泣きなさいよね！」

テレーゼが憤慨した。

巨大なエントランスを通り、大理石の大階段を昇る。途中には金色の枠縁に入った景色画やエーヴェルハルト家の集合写真などが飾られていた。レギナはそれらをじっくりと一枚一枚見ながら廊下を歩いていく。

ふと、レギナは一枚の絵の前で停止した。

「レギナ？」

「……これ、アーウィン兄様か」

レギナが立ち止まった、一際大きい肖像画の横には？ナナト皇国軍総帥アーウィン・エーヴェルハルト一九〇二―一九八七？と書かれている。クライヴが見上げると、そこには白いひげをたつぷりと

たくわえ、白い軍服には沢山の勲章が輝く厳格な老人の姿が描き出されていた。

「大きい絵ってことは、それだけ偉大な功績を残した人だって昔お祖父様から聞いたことがある。このレギナのお兄さんの絵は、誰よりも大きい気がするよ」

「ずいぶんと老けやがって。見る影も無いぐらいにクソじじいになったな」

クライヴは、アーウィンの肖像画の横に、同年代頃に撮られたものらしき集合写真を見つけた。小さなものだったが、その老人の若かりし頃らしき人物と、その横に良く似た青年の姿があった。

「……レギナ？」

クライヴが凝視するその銀塩写真を見ようと、レギナも近づく。「戦前の写真だ。懐かしいな。このときの記憶はあるぞ、よく見るハチコウがいる」

レギナが、写真の下の方で丸くなっている仔犬を指差す。

「え。こんなちっちゃかったの、ハチコウって」

「そうさ、大牙犬だって子供の頃は小さいものだ」

「ふうん」

クライヴは、中心に写るアーウィン・エーヴェルハルトの横に立つレギナ・エーヴェルハルトの姿を見た。それはどこか自分が成長したときの姿のようで、他人の気がしなかった。十年後の自分を鏡に映すと、似ているに違いないと思った。

「どうした、にやにやして」

「ううん、なんでもないよ。ただ昔のレギナってこんなだったんだって思ってたさ」

「そうだな。この俺はもう死んだんだ。そう思うことにするよ、軍の記録でもレギナ・エーヴェルハルト陸軍大佐は殉職して少将に二階級特進しているはずだからな」

レギナの顔は、どこか懐かしむ表情というよりも悲しい表情だった。この三週間、レギナ・レミントンとしてようやく生きることが

決めたというのに、過去の呪縛がこうして写真になって現れたのは皮肉としか言いようが無い。

「レギナ……」

「行こうぜ。当主様を待たせてはいけない。？報告は速やかに確実に？だ」

「それは誰の受け売り？」

「誰だったかは忘れたけど、その昔の軍隊で、さ」

長い廊下を歩くと頑丈な扉が現れた。両サイドに衛兵が厳格な表情で立っている。

「ご苦労様です」

クライヴとレギナは衛兵に敬礼した。衛兵はそれに返し、扉を開ける。

「どうぞ中へ」

「ありがとう」

クライヴはもう一度礼をする。

扉の向こうには、白く明るい部屋が広がっていた。部屋の中心に円卓があり、十三個の椅子が円形に置かれている。その先には庭とカラヴレーゼの街が一望できる大きなベランダがあり、老人が一人、そこで紅茶を楽しんでいた。

「お久しぶりです。お祖父様」

言っとクライヴは深々と頭を下げた。

「よく来たなクライヴ。大きくなった。——ヴェルナは残念だった。僕もお前の父は息子のように思っていた。お前の母エリーザは幼い頃に兄を亡くし、今度は夫を亡くした。エリーザにとって、あとはお前一人しかおらん、しっかり守ってやるのだぞ」

エーヴェルハルト家当主レオハルト・ヴァーリア・クリューガー・カラヴレーゼ・エーヴェルハルトはクライヴの肩に手を置き、言った。

「はい、お祖父様」

「当主様、ヴィセラス・ライヒシュタインより手紙を預かっており

ます」

レギナは言う、レオハルトに手紙を渡す。

「うむ。……はてクライヴに良く似た娘だが、エリーザには子供はクライヴしかいなかったはずだ。お前は何者だ？ 貴卿、名を申せ」

「レギナ・アウグスト・ヴィクトログナ・カラヴレーゼ・エーヴェルハルト。レギナ、という名に聞き覚えがあるはずです。エーヴェルハルト様」

その名を聞いたレオハルトは、一度驚いた顔をする、と一歩引き下がりレギナに深々と礼をした。

「これは失礼を致しました、レギナ様。なんたるご無礼を」

「いや、いい。そう堅苦しくなるな」

「封印を解かれたのですな」

「お前の孫がやってくれた。感謝している。？ 血の暗示？ には二百年後まで子孫を残せという命令はこめられていない。その間にエーヴェルハルトの血筋が途絶える事だ、十分に考えられた。そうならば私を解放する人間がいなくなってしまう。よく現世までエーヴェルハルト家の血筋を守ってきた」

「ありがたきお言葉です」

「礼といつてはなんだが、私は永遠に生き続ける体だ。未来永劫、エーヴェルハルト家を末代まで見守るとしよう」

「……婿ヴェルナには、エーヴェルハルトの次代当主であるエリーザ、そしてクライヴを見守ってほしかったものです」

レオハルトは、クライヴに亡きヴェルナ・レミントンの面影を探す。

「それでお祖父さま、父上はどうして……任務だったのですか？」
クライヴは切実に言った。

「皇国軍から長く離れていた僕には、詳細は教えてはくれなかったが、ヴェルナは東方のベルリヒルゲン地方から重要物資を首都アウグストに輸送中、何物かに襲撃されたらしいのだ」

「ベルリヒルゲン？」

レギナは首をかしげた。

「レギナ様が知らないのも無理はない。ここ二世紀で唯一名前の変わった土地だ。レギナ様の時代では？レイサンシ帝国？と呼んでいた」

「ナナレイ戦争の相手……」

「あそこはもう何も無いはずだ。誰よりも俺が知っている。？ペルフェウルテ？を放ったレイサンシの国土は全て焦土になった。多くのレイサンシ人を巻き込んでな」

「父上は、そんなところで何を——？」

クライヴが尋ねる。

「それ以上は教えてはくれなかった。何せ総帥閣下が口をつぐむのだ」

レオハルトは言った。クライヴは、自分の父親が極秘任務に関わる皇国軍親衛隊に所属していることぐらいは知っていた。戦争中ならば、死亡したことすら公にされないような存在だ。

だが戦争はなく、かつナナト皇国しか存在しないこのヒイツミ大陸で何を隠す必要があるのだろう、とクライヴは思った。

「……父上の御遺体はいつ？」

「明日の葬儀に間に合わせて今こちらに向かっているところだ。我が盟友ヴィセラスの息子レナード・ライヒシュタイン大佐も、こちらで行う。——リネアとテレーゼには会ったか？」

「ええ、既に。テレーゼは強い子だと思います。僕の前で泣き顔ひとつ見せない」

「お前たちが来る前にはずっと泣いておった。だが、お前に会って安心したのだろう。クライヴが帰ってくると言って喜んでいたぞ」

「それはよかった」

レオハルトは円卓のひとつに腰掛け、ヴィセラス・ライヒシュタインからの手紙を開けた。そして服の胸ポケットから老眼鏡を取り出し、読み始めた。

「ああ残念だ。ヴィセラスは来られんか。そうだな、互いにもう良

い老いぼれた。葬儀を終わらせた後に、必ずやお前の元に息子を返してやるとしよう」

手紙を丁寧にあたみながらレオハルトは呟いた。

レギナは、愛する息子を失った父の悲しみをそつと見つめていた。

翌日、ヴェルナ・レミントン及びレナード・ライヒシュタインの葬儀が、エーヴェルハルト邸内の教会にてしめやかに行われた。

ナナレイ戦争後初の殉職とあつて政府、軍の著名人が多く参列していた。

エリーザ、リネア、テレゼといった親類や、皇国軍親衛隊の部下達の多くが涙を流す中、クライヴだけは怒りに燃えていた。

——この中に、父を殺した奴がいる。

代々のエーヴェルハルト家が眠る、屋敷の墓地にただひとつだけエーヴェルハルトの名が刻まれていない、新しい墓があつた。

最後の顔を見ることがすら許されないうまま父ヴェルナの、ナナト皇国章の入った棺はやがて土の中へと降ろされ、親族によって埋められた。クライヴは最後のスコップを受け取り、棺が見えなくなるまで土を被せた。土の一粒一粒に父への想いをのせて。

だが、その全てが優しい言葉では飾られなかった。クライヴは今、復讐に燃えている。

——父さん、必ず仇は……

社交辞令としてやってきていた軍人達が帰っていく中でただひとり、ヴェルナの墓前に立っている者が居た。父と同年代かすこし上に見える男。政治将校の黒い軍服に身をまとい、その胸には少しの勲章が光っていた。小脇には制帽を抱えている。

クライヴは、その見知らぬ将校に歩み寄った。後ろからレギナがついてくる。将校もその姿に気づき、クライヴの方向を見た。

「君達は、もしか……」

「ヴェルナの子です。貴方は？」

クライヴは将校に尋ねた。

「ああ、失礼。私はナナト皇国軍情報部のナサニエル・カナヴェラルです。レミントン中佐とライヒシュタイン大佐とは士官学校時代に知り合いましたね。残念です。お父様の武勇譚は多く聞いております。皇国軍最高の狙撃手だったと」

ナサニエル・カナヴェラルはクライヴとレギナに跪き、言った。

「どうかお顔を上げになってください。カナヴェラル家も七大貴族のひとつ、貴方様のほうが地位は上なのですよ」

レギナが言った。

「ありがとうございますお嬢様。しかし新興貴族であるカナヴェラル家にとって、エーヴェルハルト家とライヒシュタイン家は、言わば先輩にあたります。決して同じではありません」

ナナト七大貴族の中で、唯一建国時に存在しなかったのがカナヴェラル家である。建国の王であるナナトと共にナナト皇国を作り上げた六人の騎士を祖先とする他の六つの貴族と違い、カナヴェラル家の貴族の歴史はナナレイ戦争に始まる。カナヴェラル家は元々六大貴族のひとつアルヴァレス家に仕えてきた軍人の家系だった。ナナレイ戦争時にいち早くレイサンシ帝国の侵攻を見抜き、反撃のチャンスをつくった功績からナナト皇家とアルヴァレス家のお墨付きをもらい、正式に七つ目の貴族となった。そんな過去を持つカナヴェラル家だからこそ、他の貴族に対してはよりいっそう謙虚になっている。同じ貴族であってもエーヴェルハルト家の血を引くクライヴやレギナのほうが上になるのは仕方のないことだった。

「血筋の前に、貴方は父の友人です」

「そう言っていただけとありがたい。ああ、そろそろ戻らないと」カナヴェラルは腕時計を見た。

「軍人さんはご多忙なのですね」

レギナが言った。

「できることなら、もう少し戦友達と会話をしていたかった。また来るとしよう」

「ええ、父はいつでもここで待っていますよ」

クライヴの言葉にカナヴェラルは敬礼で返す。そして制帽を被り、足早に去っていった。遠くで部下らしき二人の男がカナヴェラルを待っていた。クライヴに気づくと、二人の男は敬礼をした。

「ヴェルナ・エセルバート・ナツシュ・ヴィンツェル・レミントン。二二五〇年生まれ、二一九一年没。享年四十一歳。ナナト皇国軍親衛隊中佐……もとの階級は大尉か。親衛隊は皇国軍でも最も誇り高い存在だ。お前の父はかなり優秀な男だったようだな。誇れよクライヴ」

レギナは墓石に刻まれた文字を読んだ後、父の墓の前で立つクライヴを見た。眼から大粒の涙をこぼし、肩を揺らしていた。今になってようやく父の死を悟ったようだった。

「父さん……」

「泣けるときに泣けって、言ったじゃないか……まあ、今なら遅くないか」

レギナは肩をゆすって泣くクライヴの肩を抱いた。

墓石の周りに供えられた花の、黄色い花びらが何処からともなく吹いた風にのり、空中に舞った。

ヴェルナと運命を共にしたレナード・ライヒシュタインの棺は、葬儀の終了後ライヒシュタイン魔道学校のライヒシュタイン家墓地に送られることになった。レナードの妻リネアとその娘テレゼ、そして一部のエーヴェルハルト家近衛兵は棺と共に列車に乗り、ライヒシュタインへと向かった。

クライヴとレギナは魔道学校生徒ということで後日学校に戻ってから挨拶に向かうことにした。クライヴの母エリーザはエーヴェルハルト邸で開いている魔道教室を何日も休講にしていた為、出席を辞退した。エリーザの分の花は弟子であるテレゼが代理で置くことになっている。

ほとんどの者がレナードの見送りに出て行った為、ヴェルナの墓の前にはクライヴとレギナだけが残っていた。

「そろそろ戻ろう。俺がじきじきに紅茶を淹れてやる。きっと落ち

着くぞ」

言いながらレギナはクライヴの手を引く。

「レギナ、結局僕は、許せそうにない。今日のさっきに、一緒に涙を流していた人の中にもし、父さんが死ぬ作戦を命令した人がいたなら、僕はその人を許せそうにない」

「許す必要はない。少なからず今はな」

* * *

エーヴェルハルト家の屋敷から、レナード・ライヒシュタインの棺を載せた車を先頭にカラヴレーゼ駅へと向かう一団が出て行く。その一番後ろにつけていたライトバンのも、後部座席に乗るカナヴェラルはいかにも退屈そうな顔をしていた。

「こういう辛気臭い雰囲気はどうにも気に入らん、そう思うだろう少尉」

助手席に座る部下にカナヴェラルは言った。

「葬儀とは、そういうものですよ少佐殿」

「葬儀ねえ……レミントンの息子と娘だけは、周りが泣いている中涙一つ見せなかった——とくに息子なんて参列者のほうをじっと睨んでいたよ。察しの良い子だ。思わず話しかけられたときはどきりとした」

「そのレミントンの子供がどうやら？ 鍵？ のようですよ、少佐」

運転する部下が言った。

車は葬儀の一団をはずれ、逆方向であるカラヴレーゼ市の都市部へと向かう。

「首尾よく行こうじゃないか。屋敷の見取り図は手に入れたか」

「ええ。問題ありません、今夜にでも決行できるかと」

「それは良い情報だ。直ちに強襲部隊を編制しろ。今日は邸宅の警備兵も喪に服していて警備どころではないはずだ」

カナヴェラルは外に映る、エーヴェルハルト家の屋敷を囲む城壁

を眺めた。不謹慎かどうかなど、体裁を考えている暇はない。第一に計画を考え、第二に行動に移す。それが全てだ。それ以外については全て後回しでいい。

「レミントン中佐、それにライヒシュタイン大佐。あなた方の行動は無駄であったとしても、死は無駄にはならない。これは計画のための名誉の戦死なのだ。これから死んでゆく者達のための、水先案内人になってくれ」

全ては、二百六十年前の借りを返すためだ。

車はカラヴェレーゼ市郊外の地下駐車場に入っていく。カナヴェラルのライトバンを待っていたように、入り口を通り過ぎると二人の警備員が駐車場を封鎖し？満車？の看板を立てかける。地下駐車場には二台の大型トレーラーが止まっており、一人の無精ひげの男がカナヴェラルを待っていた。

男はオートマティック式魔導拳銃をトレーラーのボンネットの上で何度も分解し、何度も組み立てて暇を潰していた。

「待たせたか、レイヴン」

カナヴェラルはライトバンから降りた。

「待つのに慣れている。少佐」

レイヴンと呼ばれた男は魔導拳銃を組みなおす。そして魔導弾のフルに入った弾倉をグリップに収めて一度スライドを引いた後、セーフティを掛けて胸のホルスタにしまった。

カナヴェラルは、胸のポケットから煙草を取り出し、火をつける。

「鍵を見つけた。今夜奪いに行く」

「了解、それでは直ぐにでも出撃準備を」

カナヴェラルの部下が、レイヴンに一枚の写真を渡した。ライヒシュタイン魔道学校で授業を受けているクライヴの写真だった。

「子供……？」

「見た目はな。つい最近、ライヒシュタイン魔道学校に編入届けが出されている。名前はレギナ・レミントン。恐らく、いや確実と言っている。二百六十年前にライヒシュタイン城に封印されたレギナ・

「イーヴェルハルト本人だ」

「先祖の言い伝えによれば、レギナ・イーヴェルハルトは大人だったはずですか？」

レイヴンは尋ねる。

「何故子供の姿なのかはわからんが、確かな情報だ。それに好都合ではないか、子供のほうが何かと扱いやすい」

「本当に大丈夫なのでしょうな？」

「問題はない。——トレーラーの中身は確認したか？」

言いながらカナヴェラルはトレーラーの荷台の扉を開けた。中には木箱や鉄の箱が大量に積まれていた。その全てにナナト皇国軍の紋章がついている。

「見させてもらった。なかなかすばらしい景色だ。よく手に入れたな、少佐」

「皇国軍情報部の力を使えば、ざっとこんなものだよ、大尉」

カナヴェラルは、部下からボールを受け取り木箱のひとつをこじ開けた。中身を見てうっすらと笑う。緩衝材に巻かれて入っていたのはナナト軍最新式の魔導突撃銃だった。

「聞けば諸君は未だにアツカ四七などという旧式の銃を使っていると言っじゃないか。あれは信頼性に長けるがいざというときに弾詰まりをする欠陥品だ。私はそんなさび付いた銃を諸君に使ってもらいたくないと思ってね。せめてもの配慮だ、同時に期待でもある。作戦は成功させるためにあるのだからな」

「なかなか言われる。ご期待には必ず答えましょう」

「？戦略魔道兵器？は我々の未来を担う突破口だ。使えなければ意味がない」

「わかっております。我々が必ず？鍵？を手に入れます」

「頼むぞ大尉」

「はい、少佐殿」

レイヴンは、言いながらレイサンシ流の敬礼をカナヴェラルにした。

夜。空から見ると平行四辺形をしているエーヴェルハルト邸の、最も西側にクライヴの部屋があった。後々エーヴェルハルト家を継ぐ人間として幼い頃から多くの召使い達に構われてきたクライヴにとって、この部屋は唯一落ち着ける場所だった。そういう面からすれば、ライヒシュタイン魔道学校はある意味天国だったのかもしれない。誰もクライヴを特別扱いしないし、ただの中等部武術科二年生の男子生徒として見てくれる。自分の姓にナナト皇国で最も高貴な七大貴族のひとつの名が入っていることを忘れることができる。

しかし、ここに帰ってくるとどうだ。急に名前が重たくなる。物心ついたときから魔道学校の一生徒でしかなかったクライヴにとって、唐突に突きつけられる地位だ。

「……父さん」

クライヴは夜空を見上げた。父は高貴の生まれではなかった。クライヴは昔、母エリーザから父と知り合ったときのことを聞いていた。父と運命を共にしたテレゼの父レナード・ライヒシュタインが二人の仲を取り合ったのも知っている。エーヴェルハルト家とライヒシュタイン家は建国当時の盟友だった。もともと、エーヴェルハルト家の一人娘であったエリーザと、ライヒシュタイン家の一人息子だったレナードは許婚の関係だった。だがレナードはエリーザの専属の侍女をしていたリネア・マーティンソンに惚れ、エリーザはレナードの副官であるヴェルナ・レミントンに惚れていた。互いの想い人を知っていたレナードとエリーザは、互いに大きく地位の離れた人間を愛するようになった。そうして、自分——クライヴと幼馴染であるテレゼが今いる。

クライヴにとって父親が憧れである以上に、その事実がうれしかった。クライヴにはエーヴェルハルトの名よりも、レミントンの名のほうが合っていると思ったからだ。何の重さも持たない一般市民の名が。

ドアをノックする音。ベランダに出ていたクライヴは「どうぞ」

と言ってドアのほうを見る。入ってきたのはレギナだった。レギナは今まで下ろしたままだった腰まで伸びた長い金髪を、頭の左右にリボンでまとめていた。

「レギナ、どうしたの？」

「いや、ちよつと心配になって。夕食のときも元気そうではなかったから……」

レギナはもじもじとしながら言った。クライヴはその仕草に思わず噴出す。

「な、なんだよ……」

「なんか、もう女の子だよな」

「うるさいな、心配して見に来てやったんだ。すこしは感謝したっていいだろ」

レギナは憤慨する。

「ありがとう。僕はもう大丈夫だよ。——そのパジャマ、テレーゼの？」

クライヴはレギナが着ているピンク色のパジャマを指差す。

「ああ。エリーザが貸してくれた。俺はクライヴのでいいって言うたんだが、今はもう私の娘なんだからと言って。……髪まで整えてもらった」

レギナが言うと、クライヴはまた笑った。

「何かおかしいこと言ったか」

「いいや。これで本当に僕らは双子の兄妹になったわけだ、名実共に」

「そうだな。でも、今は双子として見られるけど、次第に俺とお前の間の外見年齢は離れていく。お前はそのまま成長していくが、俺はわからない。何を持ってして不死身とするのかの定義がなかった。永遠に生き続けるだけなのか、それとも永遠に老いないのか。それを考えると眠れなくなるときがある」

レギナは、クライヴが座るベッドの横に座った。

「レギナ……」

「封印されているときは、解放されることが希望だった。禁断の魔道である？ペルフェウルテ？を放ったことへの贖罪だと思っていた。でも不安はなかった。俺は、解放されることだけを考えて二百六十年間過ごした。考えるだけで、結局その後のことなんて全く想像していなかったんだ」

レギナは心苦しい気持ちになった。自分は今、父親を失ったクライヴを慰めに来たはずなのに、どうして自分のことを話してしまうんだろう。クライヴはまだただの子供だ。少し背伸びをしたがる年齢だけれど、それでもまだ子供なのだ。そんな子供のクライヴに話したところで理解をもらえるわけがない。それを頭の中では知っているのに、クライヴを見るとどうしても話したくなる。相談に乗ってもらいたくなる。どこか似ているのだ、自らの本当の兄、アーウィンに。

「レギナには、僕がいるじゃないか。母さんもいるし、お祖父様もいる。ああ、ラングフェルド先生だっているじゃないか。確かにみんないつかはレギナよりも先に死んでしまうけど、それは僕だって同じだ。僕より母さんは長生きしないだろうし、ラングフェルド先生も年上なのだから、いつかは先に死んでいくよね。前にレギナ、お祖父様に言ってたじゃない。？未来永劫、エーヴェルハルト家を末代まで見守るとしよう？って。遠い未来、僕が死んだ後に残された子孫を見守ってよ。僕もさ、形が違ってもかもしれないけど見守るから」

クライヴは、精一杯の気持ちをこめて、思い浮かぶだけの言葉をレギナに言った。

「クライヴ」

「何？ レギナ」

「一度だけお前を？兄様？と呼んでいいか」

レギナの要求に、クライヴは笑う。

「いつも学校で僕をそう呼んでいるじゃない。どうしたの？ 急に改まって」

「いや、唐突に何か？家族？というものを思い出した気がする。家系とか血筋とか、そういうものでなくて、ただ家族」

「それなら、最初からそうじゃないか。僕は家族で、兄妹だよ。ちよつと前代未聞の話だけどレギナは僕の双子の妹だ。――あ、ごめん弟」

クライヴは訂正する。

「いや、妹でいい。俺はもう男であつた過去を忘れようと思う。二百六十年前に存在したレギナはもう別人だ」

「そう」

「……兄様」

レギナは、小さい声で恥ずかしそうに言った。

「何？レギナ」

「ただ呼んだだけ」

「そう」

一度大きく呼吸すると、レギナは立ち上がった。

「悪かったな。本当はお前の心配をしにきたんだが、逆に心配を掛けてしまうようなことを言つて」

「困ったときはお互い様。助け合つのが兄妹だろう？」

「そうだな、それが兄妹だ」

「あとはその口調が直ればなあ」

クライヴが勢いよくベッドに横たわる。

「お前の前では死んでも変えない！」

レギナが意地を張つて叫んだ。

「そもそも、死なないしね」

「つまり永遠に変えないということだ」

「わかつた。そういうことにしておくよ」

立ち去ろうとしたレギナは一度止まり、振り向いた。

「……クライヴ」

「何？」

「ちよつと付き合え」

言つとレギナは、クライヴを連れて部屋を出た。警戒のために屋敷内を歩いている歩哨の目を盗み、階段を下りる。屋敷の地下室へ通じる階段は一つだけだったが、周囲に見回りが確認できないのを好機と思い、地下へ降りた。

屋敷の地下室は武器や食料の倉庫や、補修機材の資材保管庫が並んでいる。倉庫の扉が並ぶ廊下を進むと一際大きな扉があった。レギナは迷わず扉を開ける。

「武術場なんかきて、どうしたの？」

クライヴが尋ねる。扉の先は攻撃魔道や剣術を練習する大きな武術場だった。

「いいから付き合えよ」

言つとレギナは、隅に置かれた棚から練習用の木製の片刃斬断剣を二振り取り出し、片方をクライヴに投げた。クライヴはそれを受け取る。魔道学校で使用されている金属製の本格的なものよりだいぶ軽く、クライヴには玩具のように思えた。

「レギナ、剣術できるの？」

クライヴはふと魔道砲台の中で出会ったマリオネット、マティアス卿について思い出す。相手をしてやると言っておきながらあつさりとかライヴの剣にやられた奴だ。どこかでレギナの格闘の腕はあれと同じなのではないかという勝手な考えがクライヴの頭を満たしていた。

「これでも元軍人だ。？エーヴェルハルト流？つてやつを教えてやるよ」

言つとレギナは自らにクラス二十五級支援魔道？アルヴトウニト？を発動。

電磁加速でレギナの体が高速で射出され、一気にクライヴに詰め寄る。

クライヴはレギナの横薙ぎを寸前で回避しつつ、斬断剣を構えなおす。

「魔道を使つなんて卑怯だ！」

クライヴは叫んだ。

「うるせえ、次いくぞ」

速度に翻弄されつつも、クライヴは常にぎりぎりのところで回避する。剣を振ることすら許されなかったが、レギナの攻撃も一切当たらなかった。

——やっぱりか。

クライヴを翻弄するレギナも、実際には本気だった。

剣が交わる。カッンという軽い音。

クライヴの攻勢、レギナは攻撃を薙ぐ。

レギナは上にジャンプ、大きく振りかかる。

クライヴは受け流す。同時に蹴りを加える、レギナは腕で防御。

「お前、剣術を習って何年になる？」

距離を置いて牽制するレギナが言った。斬断剣を八相の構えでクライヴに向ける。

「初等部のときからずっと武術科に居た。六歳の頃からだから、九年になる」

クライヴは青眼の構えでレギナと対峙する。

「九年か……長いようで、なかなか短い！」

レギナはその場で一回転し、斬断剣を持たない左手でレベル三級攻撃魔道？ウエトスレニス？を放つ。

クライヴは衝撃波を斬断剣で気流の流れを作って受け流しつつ、レギナに向けて駆け寄る。

「バカが！」

レギナは右手で斬断剣をすくいあげるように振ってクライヴの斬断剣を跳ね除けようとする。

——しまった！

咄嗟に左へ避けたクライヴの斬断剣が逆にレギナの斬断剣を跳ね飛ばした。

「強いね、レギナ」

クライヴはレギナの首筋に斬断剣をあてがい、言った。

「お前ほどじゃないさ、でも——」

レギナは首筋に置かれた斬断剣を持つ。クライヴが振りかざした斬断剣は？ 峰打ち？ の状態だった。

「——甘いぞ。これでは脅しにならない」

「別に、脅したつもりじゃない」

言いながらクライヴは斬断剣を下げる。

「ふん。まあいい、この腕なら俺の前衛になれるかもな」

「前衛？」

「魔道士って奴は、戦闘の時に魔道を使うのがメインになるだろう？ 通常、魔道は同じレベルの魔道で防御障壁を展開すれば防ぐことができる。まあ、防御障壁の展開は結構難しい話で、タイミングや、敵の放つ魔道のレベルの分析を魔道が到達するまでに完了させなければ展開までこぎつけることができないが、仮に完全に障壁を展開できる魔道士を相手にすると、魔道士は攻撃手段を失うことになる。そこで斬断剣を持つ剣士様の登場ってわけだ。魔道は魔道で防御をすることができ、斬断剣は斬断剣を用いて交わることができるが、魔道と斬断剣の場合は魔道が負けるんだ。つまり、防御障壁を展開する敵に対しては斬断剣の突破力が必要になる」

「そんなの知ってるよ。武術科の基本だ」

「俺は魔道士、お前は剣士、そういうこと」

「レギナはそれを一人で兼ねているように見えるけど？ 僕は魔道が使えない、さっきみたいに魔道で高速移動されると僕は対処できなくなる」

「まあ、俺が支援するから安心しろ」

レギナはクライヴの肩を叩いた。

「そもそも、戦うことなんてないだろうに」

「そりゃそうだ。戦争があるわけじゃないしな。ちよつと言ってみただけ」

「ふうん」

クライヴはつまらなさそうな顔をする。

「少しは気分転換になったか？」

「え？」

「体を動かせば、少しは元気になると思ってな」

レギナはあさつての方向を見て言う。

「ああ、うん。ここ数週間、ずっと補習授業ばかりだったし、武術の授業が全く無かったからね。退屈しのぎにはなったよ」

「いや、そういうつもりだったんじゃないんだけど……」

レギナは呟く。

「何か言った？」

「いいや、何も」

「そろそろ夜も遅いね。僕は部屋に戻るけど、レギナは？」

「片付けたら寝る。ああ、その前にシャワーを浴びないと。汗をかいた」

「そっか、わかった。おやすみ、レギナ」

「おやすみ、クライヴ」

レギナは二本の斬断剣を棚に収める。むやみに振ったからか、少し傷ついてしまった。

——だが、手合わせをする価値はあった。

クライヴには、天性の勘がある。

同時に、恐ろしいほどの動体視力もある。それがよくわかった。

——楽しくなってきた。

シャワーを浴びた後、部屋に戻ったレギナは寝付けずにいた。

胸騒ぎがする。元々自室としていた部屋はエリーザの部屋へと変わっていたので、レギナはクライヴの部屋から遠く離れた客人用の寝室で寝ている。

もし何かの危険があったときの為に自分にはマリオネットがいたが、クライヴに対して危機が迫ったときは近衛兵に任せるしかないのが、どうにも納得がいかなかった。とはいえ今更になってマリオネットをクライヴの部屋に配置するわけにもいかず、また魔道士一族であ

るエーヴェルハルト家の人間がマリオネットの存在に気づくかもしれない。あらぬ誤解を生んではならないので、強い魔道を使うマリオネットの遠隔操作はできない。しかし、その日は何故かクライヴのことが気になって仕方なかった。

——魔道士の勘というやつは、よく当たる。

レギナは、自分の胸騒ぎを抑えるために一度起き上がる。近衛兵にクライヴ周辺の警備の強化を頼めば少しは和らぐと思ったからだ。夏とはいえ夜は冷えるため、パジャマの上から魔道学校の制服を防寒着代わりにはおり、屋敷前の近衛兵詰め所へと歩いた。

当主や家の人間が普段使う部屋には、何かのときのために内線電話が設置されていたが、客間にはそれがない。誰かの部屋のものを借りるわけにも行かず、ひたすら階段を下りる。

——だからといって侍女や執事共「コンセルジュ」に頼めば余計なことをしかねないからな。

ようやく三階の部屋から一階に降り、エントランス前にある近衛兵詰め所に到達した。中には若い兵と老練の兵の二名がおり、休憩中らしく談笑をしていた。

「失礼、入るぞ」

唐突に詰め所に入ってきた少女の姿に二人の笑い声が同時にぴたりと止まった。

「レギナ様、こんな夜分遅くにどうなされたのです？」

若い兵士が言った。

「警備状況を確認しにきた。配置はどうなっている？ 配置図を見せろ」

レギナの発言に、老練の兵士がいぶかしんだ。

「普段と変わらない配置をしておりますが、頼まれ事ですか？」

レギナは今の自分の姿がどうなっているか思い出す。テレゼと変わらないただの？女の子？だ。昔のような威厳もなければ身長もない。

「あ、ああ……いや。いいんだ。ちょっとクライヴの部屋の周辺の

警備状況を知りたくて」

若い兵士ははっとして警備ノートを取り出し、白紙を一枚ちぎるとレギナの前に差し出し、そこにボールペンで何かを書き始めた。

「クライヴ様の部屋のある西の角には、城壁の警備塔に二名と、庭の警戒に三名の兵士が巡回しております。もし外側から忍び込むなら――」

「マコーシェ！」

老練の兵士が若い兵士の名を叫び叱る。マコーシェと呼ばれた若い兵士は、老練の兵士に耳打ちする。

「大丈夫ですってアイバック隊長。これは何かの余興ってやつですよ。それに、今日の向こうの警備はレイス・ヌエクスターとヴァロナです。融通は利きますよ」

レギナはマコーシェによって描かれた？警備配置図？を見てむっとした。ボールペンで殴り書きされたそれは、子供の書いた宝島の地図のようで、まるであてにならないものだった。どうやら、ここに来てきたのはゲームかなにかと勘違いしているらしい。

「もういい、私一人でやる！」

「ああ、レギナ様。ご協力できず申し訳ない。また何かありましたらお申し付けください」

アイバックが丁寧に礼をした。

やっぱり最初から一人で確かめに行けばよかった、とレギナは思い直す。回りくどいことはせずに、やはり自分の？私兵？を用いたほうが楽だった。

レギナが出て行くこうとしたその瞬間、銃声がした。同時に詰め所に緊急の連絡が入る。

「こちら司令室。アイバック隊長だ。どうした？」

「こちら第二警備塔のヴァロナ、何者かに狙撃を受け――」

今度は爆発音。同時に連絡が途絶えた。

「おいヴァロナ、聞こえているか！ 何があった！ 返事をしろ！」
帰ってくるのはノイズの音だけだった。

——勘が当たってしまった。

レギナは詰め所を飛び出し、クライヴの部屋へと駆けた。スリッパだと走りにくいので、脱いで裸足になった。大理石が冷たい。廊下の直線路ではレベル二五級支援魔道？アルヴトウニト？を自らの体に対して発動。電磁加速で走るよりも早く突き抜ける。次の角を曲がればクライヴの部屋だ。突入前に右手にレベル二〇級攻撃魔道？フォルウェトス？の展開準備をしておき、ドアの開放と共に撃つ。左手でドアノブに手を掛ける。レギナは息を呑んだ。

勢いよく開ける。

黒い一団がクライヴを窓から連れ出そうとしている最中だった。

？イグス？の銃撃。

自らの被弾に構わず反撃。

？フォルウェトス？の衝撃波を浴びせる。

——当たったか？

レギナから見て最も前方の奴が吹っ飛んだ。

——あと何人だ？

続けて発動。更に銃撃を浴びせられる。

——間に合わない。

一団の一人がレギナに向けて魔導散弾銃を放った。レギナの体が宙を舞い、部屋の外に叩き出された。

二発目の？フォルウェトス？は不発に終わった。

意識はある。しかし動けない。体が動かない。

目の前でクライヴが無抵抗のまま連れ去られる。

——何処に連れて行くんだよ。それは俺の兄だ。

一団の姿が見えなくなったとき、武装した近衛兵がやってきた。マコーシェがレギナの頬に触れ、一瞬だけ驚き、引き下がった。

「レギナ様、大丈夫ですか？」

その？大丈夫ですか？という問いかけは、ただの調子を聞く質問ではなかった。突撃銃と散弾銃をもろに受けていながら、実害は壁に叩きつけられたときの軽い脳震盪を起こしているのみで済んだレ

ギナにマコーシエは、一種の恐怖を覚えていた。

「テレーゼに怒られる。服を穴だらけにしてしまった」

レギナは自分の着ていたパジャマを見た。上半身は突撃銃の連射をうけて無数の穴が開き、その間から素肌が顔をのぞかせていた。しかし、その素肌に被弾の傷はない。

「……立てますか」

マコーシエは自らの持つ銃を肩に掛け、レギナに手を差し伸べる。

「少し待て」

レギナは頭を抑えた。

「レギナ様！」

マコーシエに抱えられるように立ち上がるレギナの元に、侍女の一人が駆け寄ってきた。レギナはマコーシエの手を離れて自力で立つ。体にもう異常はみられない。痛みもなければ、頭がふらつくこともない。恐ろしいほど早い回復能力に、レギナ自身も驚いた。何十発と受けたはずの？イグス？のライフル弾がぺしゃんこになって地面に大量に落ちているのに気づく。

「……我ながら、自分が怖いな」

レギナが呟いた。

「大丈夫ですか？ レギナ様」

侍女が怯えた表情で言った。

「問題ない。何も、俺自身は平気だ」

今はクライヴの方が問題だ。胸騒ぎもそうだが、何故今拉致される必要がある？ レギナは、クライヴの部屋の方を見た。

「レギナ様、当主様がお呼びです。大至急来て欲しいと」

「ちよっと待つてろ」

言うつとレギナはクライヴの部屋に入り、一丁の突撃銃を手にとった。敵がレギナの放った？フォルウェトス？の衝撃波を受けたときに落としたと思われる。布に覆われていたため、突撃銃は種類が判別できなかったが、レギナは布の間から現れたものを見て、驚いた。

——まずいな。

当主レオハルトとクライヴの母エリーザは、レオハルトの部屋に避難し、十五名の近衛兵によって守られていた。レギナがレオハルトの部屋に到着したとき、エリーザは怯える侍女たちを慰めていた。レギナはエリーザの気の強さに感心する。

「レギナ！」

エリーザは部屋に入ってくるレギナを見て叫んだ。しかし、続けて入ってくるであろうことを信じていたクライヴの姿はなく、またレギナも服をぼろぼろにした状態で入ってきた為、エリーザは声を失った。

「レオハルト様は」

レギナは部屋を見回す。円卓の椅子に意気沮喪して肘の間に顔をうずめるレオハルトの姿を見つけると、すぐさまそこへ歩み寄った。「おお、レギナ様。ご無事でしたか」

「俺は大丈夫だ。しかし、クライヴが……」

レギナが？クライヴ？と言った瞬間に、エリーザが倒れた。先日夫を失ったばかりか、今度は愛する息子までを失いかけているシヨックに、とうとう精神が持たなくなったのだ。

「なんとということだ。……直ぐに軍の者を呼び、総動員でクライヴの搜索に当たらせよう」

「いや、それはやめておいたほうがいい」

レギナが立ち上がるレオハルトを止める。

「どうしてです」

レオハルトの質問に、レギナは答えとして円卓の上に突撃銃を置いた。

「見る。クライヴの部屋に落ちていたものだ。恐らくは襲撃犯の一団が使用したもの。布が巻いてあるから一見して旧式の銃に見えたが、違うな。……ここを見ても」

言っとレギナは布の間から見える、突撃銃の黒いボディに刻まれた紋章を指差した。それは真正正銘、ナナト皇国軍の紋章だった。

「これは……？」

「もしエーヴェルハルト家に恨みを持つ襲撃犯の犯行ならば、自らの反逆性の主張としてナナト軍の紋章は消すか、または上から別の模様なり線なりを描き入れるものだ。だがこれはなんだ？ 何も描きいれられてはいない、ナナト軍の紋章そのままだ。まあ、ここまですら時代の変化としてテロリストの自己主張性も変わったのかもしれないと言える」

レギナは指でマコーシェにこちらに来るように呼ぶ。最初は自分が呼ばれたのかどうかわからなかったマコーシェも、自分が来るように催促されていることに気づき、駆け寄った。

「マコーシェって言ったっけ」

「はい。リヨウ・マコーシェです」

マコーシェはレギナに敬礼する。

「従軍経験は？」

「三年ちよつとです」

「マコーシェ君、このタイプの銃を見たことは？」

レギナは何重にも巻かれた布をほどき、銃を掲げてみせた。全体的に黒いボディのそれは、現役でナナト軍が正式採用している突撃銃？ナナト一四式？と比べコンパクトで、まるで玩具のような銃だった。

「いいえ。ありません」

「確か？一六式ヒトロク？って呼ばれていた試作銃だと思います」

レオハルト付きの近衛兵が言った。

「お前、名前は？」

「ユリウスです」

「ユリウス君、詳しく聞かせてくれ」

ユリウスは、若干十四歳の少女にそう言われて一度困惑したが、やがてしゃべり始めた。

「私は正規軍のときに、任務で新型銃のモニターを言い渡されたことがありまして、その時は？ナナト試作型一〇号ジユウ？と言う、その銃

に良く似たものを使用したのですが、当時その銃が採用されたときは？一六式？と名前がつくんじやないかって噂になっていたんです。それから何ヶ月か経ったあとの任務で、今度はレギナ様のそれと全く同じと言っているような？試作一六式？という銃のモニターをやりました。……後者の話は、本当は軍事機密なんですけど」

「ありがとうユリウス。君は俺と似ていて口の堅い男だ」

レギナは遠まわしに言った。

「……恐縮です」

「レオハルト様、もうわかっただろう？ 正規軍を動員したところで、クライヴの居所はつかめない」

「軍だといいたいのですか、レギナ様。もしそうだとしたら、一体何の為に？」

「それは俺にもわからん。わからんから、確かめる必要がある」

レギナはレオハルトほうを向き、一度うつすらと笑みを浮かべた。

「わかりました」

レギナの真意に気づいたレオハルトはただ一言、そう言った。

？・奪還作戦

唐突だった。クライヴは自分の身に何が起きているか理解するのに多くの時間を必要とした。

爆発音のような大きな物音に驚いて起きた時には、黒ずくめの男達——着ている服が体のラインをトレースしており、女のような膨らみのある体の人間はいなかった——が周囲を囲み、うち一人が自分に催眠魔道をかけた。意識が遠のいていく中で一瞬だけ扉を勢よく開けてきたレギナを見て、強制的な眠りにつく直前にレギナが魔導散弾銃で吹っ飛んだヴィジョンが見えた。催眠魔道の影響か、今もまだどちらの世界にいるのかがよくわからない。体が揺れている。この揺れ方を知っている。車だ。自分は今車の中にいる。だが周囲は真っ黒だ。体の自由も利かない。何か硬い箱の中に入れられているようだった。

そうして長い時間暗い中で揺られているクライヴは、中途半端に覚めた催眠魔道も相まって、最悪の気分だった。消化し切れていない夕食が今にも口から出てきそうだ。

——レギナはこんな気分で二百六十年居たのかな。

クライヴは、気分を変えようとそう考えた。

——だとしたら、僕は二百六十秒も耐えられない。
今直ぐにでもここを出たい。

そう思ったとき、暗い箱の天上から光が差し込んだ。しかし、差し込んだ光は眼から口まで程度の切り取られた四角形で、魔道灯の人工的な明かりだった。それでも、息苦しさが解消されていくことに安堵を覚えた。同時に理性が帰ってくる。

ふと、顔がクライヴを覗き込んだ。

「これが、レギナ・エーヴェルハルト？」

顔が男の声で言った。

「……………！」

クライヴは？僕はレギナじゃない？と言おうとしたが、口がテープかなにかで止められていたため、発音が全くできなかった。

「ガキだな」

「ああ、ガキだ」

もしかして、僕は人違いで拉致されたのだろうかという考えがクライヴの頭を満たした。同時について三週間前に解放されたはずのレギナの名前が出てきたことに驚いた。

「気をつけるよ。相手は？あの？レギナ・エーヴェルハルトだ。ここから出せば何をしでかすかわからん」

「こんな棺桶で大丈夫なのですか、大尉」

「問題はない。技術部の粹を結集してつくりあげた対魔道士用拘束具だ。この中に入っている限り奴はなににもできない」

男はクライヴの入っている箱を叩きながら言った。

——そうか、これは棺桶か。

クライヴは動かせるだけの手足を駆使して周囲の情報を探る。よく見えないが、手足どころでなく首から下の体全体が何かの袋に入れられているようだ。その上で両手と両脚が体と紐で巻きつけられ、両手首と両足首以外は全く動かせない状況だった。口もテープの下に何かを噛まされている。囚人の自殺防止用の口かせの可能性があるが、断定はできない。

いくら人質でも、ここまですることははないのと思ったクライヴは、ふと考え直す。確か連中は自分をみてレギナと言っていた。人違いを指摘するのはさておいたとしても、どうしてレギナを拉致する必要があるのだろうか。

「鍵は手に入ったか、レイヴン」

今まで会話をしていた連中とは違う、新たな声がそう言った。クライヴはその声に聞き覚えがあった。いつだろう、つい最近。本当に直ぐ前——今日だ、今日聞いたばかりの声だ。

「この通りだ、少佐」

レイヴンは棺桶を叩いた。靴の音が大きくなる。同時に何か金属

同士が擦れるじやらじやらとした音。再び光が差し込む。その顔を見てクライヴは確証を得た。

カナヴェラル。

「やぁレギナ君。先程ぶりだね。五時間ぶりといったところかな。驚かせてすまなかった、君は今どういう状況に置かれているか、わかるかな？」

「……………！」

クライヴはありったけの汚い言葉をカナヴェラルに吐き捨てる。

しかし、その全てを構成するのは？ん？の一単語のみだった。

「ああ、そう。よくわからないな。すまない、私にはちよつと理解できないよ。そのかわりに私が君に今の状況を理解させてあげよう。まず君は今、車の中にいるのはなんとなく揺れでわかっていると思う。次にこのトレーラーが何処に向かっているかだが……それは内緒。後でのお楽しみつてやつだ。——ところでどうかな、君のために用意した特等席は。なかなか過ごしやすいだろう、元々ナナト軍が強い魔道力を持つテロリストが現れた場合に、この中に長時間拘束できるように作った、対魔道士用の収容装置だ。まさに古い力——魔道と、新しい力——科学技術が見事に融合を果たしたすばらしく画期的な機械だ。まさに現代だからこそ成しえる業だな。君の時代にはなかったものだよ、レギナ・エーヴェルハルト君」

揺れがおさまった。車の魔道エンジンの音が落ち着く。どこかに停車したらしい。あるいはどこかに到着したのかもしれない。

「少佐、到着いたしました」

「報告ご苦労、少尉。——棺桶を運び出せ、慎重にな」

言うとかナヴェラルは棺桶横に設置された魔道端末を操作する。小窓を閉められた棺桶の中は再び暗闇が支配した。かすかに小さな音が聞こえる。声や魔道端末のそれではなく、何かが漏れている音。「暴れられては困る。少し眠っていてくれ」

——ガスか。

だんだんと思惑能力が低下していく。狭い箱の中に催眠ガスが充

満するのは時間の問題で、呼吸をするたびに体に催眠ガスが入っていった。少し息苦しくなった後、クライヴはまぶたを閉じた。

意識が戻りつつある。

ここは何処だろう。

真っ暗だ。

眼をつむっているから。

情報がほしい。

自分が今置かれている状況を知りたい。

クライヴは眼を開けた。

暗いが見えないわけじゃない。何か広い部屋。工場のようなもあるし、何かの研究施設のようにも見える。辺りに大型の魔道装置が並んでいて、部屋の中には何か箱が置かれている。クライヴはと言えば、両手首を鎖でつながれ、足は宙に浮いていた。背中は何か大きなものに触れていて、胴体部分に金属の黒い輪っかが二つ付けられていた。そのいずれもが背中に伸びて、後ろに突き刺さっている。

——僕は今、磔にされているのか。

いかなる状況においても、必要以上の拘束をすることを不思議に思っていたクライヴは、今は自分がレギナであることを思い出した。これはレギナを恐れている証拠だ。世界で唯一レベル七十級魔道を使うレギナ・エーヴェルハルトを脅威に感じているから、嚴重に縛り付けるのだ。

部屋の横の扉が開いた。扉の断面は五センチ以上に見える。ドアノブも普通のものではない、まるで船の扉のような丸いハンドルがついているものだった。

入ってきたのは、ナサニエル・カナヴェラルだった。

「どうも、エーヴェルハルト卿。ご気分はいかがかな？」

「最低だ。クソ野郎」

クライヴは、レギナの普段の口調を真似る。

「それは結構。何よりだ。ところで、今、何故君は我々に拉致されたかご存知かな？」

「知るかよ。クソガキが。こんな拘束具で俺を制御できた気にいるのか？」

「当然だ。その為のこの部屋だ。我々は君の復活を予定してこういつたさまざまな施設を作り上げた。君を輸送した棺桶もその一部、まああれは別の用途に使うためにも数を生産したがね」

「へえ、そんなご大層なことを。わざわざ俺のために色々迷惑をかけてすまないな、カナヴェラル」

「ところで、先程から眼の前にあるあの棺桶が気になっているようだが、中身が気になるか？」

カナヴェラルは、クライヴの眼がカナヴェラル自身とその奥にある棺桶の両方の間を行き来していることに気づき、指摘する。

「ああ、ぜひ知りたいね」

「あれは私の部下がベルリヒルデンからここに運んできた？戦略魔道兵器？だ」

ベルリヒルデン。その地名を聞いたとき、クライヴの背筋が凍った。同時に、ばらばらだったパズルが組み立ていくような気がした。

「？戦略魔道兵器？——？」

「馴染みのない名前かもしれんな。だがこう言えばどうだ——？ペルフェウルテ？」

？ペルフェウルテ？。二百六十年前のナナレイ戦争においてレギナ・エーヴェルハルトが使用した禁断の究極魔道。周囲数百キロにガラスはおろか鉄をも溶かす高熱と、あらゆる建造物を吹き飛ばす爆風と衝撃波を発生させ、その土地に草木の一本も残さないあらゆる破壊魔道をも超越した最強の破壊魔道。故に唯一？戦略魔道？の名前を与えられ、その使用方法はナナト皇家によって永久に封印された魔道。禁断でありながらその名は多く知れ渡り、後世まで？悪魔の業？として恐れられてきた。

「何に使うつもりだ。あれは——」

「——あれは永遠に使ってはならぬもの」

カナヴェラルは言葉をかぶせる。

「だが君は使った。かのナナレイ戦争の折、戦争終結の為にいつて使ったではないか。あれはよくて、私は駄目なのか？」

「……………」

「そうではないよな、誰にだって機会は平等になくはな。今度は私の番だ」

言いながらカナヴェラルは？戦略魔道兵器？の入った棺桶をさする。

「わかんねえな。どうして俺を拉致した？ あんたの手元にはもう？ペルフェウルテ？があるんだろう。使い方をレクチャーしてほしいとか？」

「使い方ならわかつている。だが発動しなかった。？鍵？が必要だということがわかったんだ」

「鍵イ？」

「そう、鍵だ。中身を見てもらえばわかると思う」

言つとカナヴェラルは棺桶横に付けられた錠を外し、棺桶を開けた。

中に収められていたのは、クライヴが屋敷の写真で見たそれだった。ただ違うのは、全身の素肌に赤や黒で複雑な魔導陣が描きいれられていたことだ。

——レギナの元の体。

魔道防腐処理が施された形跡もなく、また体の血色も二百六十年前に保存されたものとは思えないほどに良かった。死んだようには見えない。ただ寝ているようだった。

「レギ……俺の体。俺の、元の体だ」

「そう、本来の君の体だ。ペルフェウルテを封印するためには、君の素肌に描きいれられたこの発動の魔導陣を封印する必要があった。でも消せなかった。しかし消せなければ発動してしまう。この事態を解決させるために、君は封印前に別の体に移された……そうだな

？」

「なるほど。発動の？鍵？は俺の魂ということか」

「なかなか察しがよくて助かる。余計な説明をする必要はないな」

カナヴェラルは棺桶の蓋を閉め、再び錠をかけた。

「俺が協力すると思うか？」

「協力してもらう他にはない。というより、もう君に選択肢はないよ、ここに来てしまったのだからな。じきに共鳴反応が起こるだろう。そうなれば君と？戦略魔道兵器？は一体化し、ペルフェウルテが使えるようになる」

「ひとつ、質問をしていいか」

「答えられる範疇なら、ひとつと言わずいくらでも」

「俺の体は、ベルリヒルデンからアウグストに輸送される予定だった。そうだな？」

「そうだ」

カナヴェラルは小さくうなずく。

「お前は、自分の部下を使って輸送中の列車を襲った」

「そうだ。君が便宜的に？父？としていたレミントン中佐——当時大尉が任務にあたっていた」

「あんたは自分が殺しておきながらヴェルナ・レミントンとレナード・ライヒシュタインの葬儀に出た」

クライヴは震える。

——こいつが父さんを殺した奴。

「そうだ。一応、士官学校の友人だったからな」

——許せない。

「何故、ここまでする」

——今すぐ殺してしまいたい。

「祖国のためだ」

——仇をとりたい。

「お前の祖国はこのナナト皇国だろう？」

——その顔を殴ってやりたい。

「いいや、違う。我がカナヴェラル家は亡きレイサンシ帝国の血筋を持つ。レイサンシ帝国こそ我が祖国だ」

カナヴェラルはクライヴを強くにらんだ。それはクライヴにではなく、レギナにあてられた怒りの表情だった。

「……カナヴェラル、お前」

「我々はこの時を待っていた。レギナ・エーヴェルハルトが封印から解かれる日を。二百六十年の間、我が一族はナナト皇国を恨んできた。祖国がたった一人のために消滅させられたこの恨み、貴様にはわかるまい」

「待て、ナナレイ戦争の発端はレイサンシの軍事侵攻のはずだ。それにいち早く察知したのがお前の祖先ではないのか？ お前の祖先がレイサンシの侵攻を撃退したから——」

「違う！ あれはアルヴァレス家の策略だ！」

カナヴェラルは声を張り上げる。

「当時唯一、国の政治機関や軍に家柄の者が一切存在しなかったアルヴァレス家は、自らの地位向上のために手柄を欲した。そこで、アルヴァレス家に仕えていたレイサンシ人のカナヴェラル家を脅してレイサンシに軍事侵攻を差し向けるように工作を行った。結果として奮起したレイサンシ帝国はアルヴァレス家の予定通りに軍事侵攻を開始、誰よりも早く察知したカナヴェラル家はアルヴァレス家の命のもと、同胞を殺して退却させた。その功績をたたえてカナヴェラル家はナナト貴族の地位を獲得したが、カナヴェラル家にとってそんなものは必要なかった。ナナレイ戦争は、アルヴァレス家が手柄を欲する為だけに起こした戦争だったんだ。カナヴェラル家は、その戦争の最大の被害者と言っている」

この男もまた、復讐に執念を燃やす一人だった。家に生まれたときから復讐のみを教えられてきたカナヴェラルを見て、クライヴは哀れに思った。同時にやり場のない怒りを覚えた。この人もまた、大きな力によって歪められてしまった人間なのだとクライヴは思う。

——だとしたら、父は一体何のために死んだというのだ？

「……もし、ペルフエウルテをナナト皇国で発動させたとしても、恨むなよ。恨むなら自身の愚行とアルヴァレス家を恨むことだ」

「カナヴェラル。ヴェルナ・レミントンは何のために死んだ。死ななければならなかった」

「仕方のないことだ。どの道多くのナナト国民がたった一発のペルフエウルテの為に死ぬ。あの列車襲撃で死んだ兵士はただ数日早かっただけのこと。レイサンシの惨劇に比べれば……」

「人の死に重さの違いなどない、どんな命だって平等だろうが！」

「レギナ・エーヴェルハルトがよく言う。誰よりも多く、かつ簡単に殺した癖に。私はお前を最初に殺してしまいたいが、憎いことにお前の命はどのナナト皇国民よりも重たい。もう少しだけ生かしておく」

「悪いけど。僕、レギナじゃないんだ」

その一言に、カナヴェラルはこれ以上ないほどに眼を大きく開けて、震えた。

「何を言い出すかと思えば——」

「僕、あんたの作戦で殺されたヴェルナ・レミントンの、真正正銘の息子。クライヴ・レミントンだ。レギナは僕とそっくりの女の子のほうだ。証拠になる証言ならいくらでもできるけど、聞く？」

あの馬鹿野郎共が！

ナサニエル・カナヴェラルは怒りの形相をあらわにし、強く歯を食いしばった。

* * *

レギナは邸宅地下にある武器庫で、武装の選択を行っていた。取り揃えられた武器はこの軍事基地よりも豊富で、レイサンシ製の？アツカ四七式？を初めとした武器もあった。レギナは武器庫の奥で埃を被っていた一丁のボルトアクション式魔導狙撃銃を見つけ、

他の武器には見向きもせず、それを手に取った。

「探せばあるもんだな」

それは、ナナレイ戦争時代にレイサンシ軍が採用していた小銃？ ナッガンブラザー？だった。ペルフェウルテ発動の為に一時期レイサンシ軍に潜入していたレギナにとって馴染みの深い銃で、ナナト皇国帰還後も劣悪だったナナト軍の狙撃銃？ナナト七〇式？^{ナナマル}でなく？ナッガンブラザー？を愛用していた程だった。レギナにとっては最高の相棒である。

エーヴェルハルト家はクライヴの拉致事件について、軍や警察機関に対して近衛兵の装備する魔導銃の暴発事故として発表、事態の収拾を図った。それでいながら独自に信用できる近衛兵の何名かを各地に派遣、クライヴの搜索任務にあたらせていた。レギナ自身もまた、クライヴの搜索に向かう準備の最中だった。

レギナが他の近衛兵達と違うのは既に見当がついていることだった。レギナは自らの私兵であるマリオネットを使い、クライヴを拉致した連中の移動ルートを追跡、確認していた。だが相手が国軍である可能性が浮上した以上、発見した後に直ぐに行動を起こすわけにはいかなかった。

そこで極少数の人間を用いてクライヴを救出し、同時に事態の真相を探るレギナ直下の部隊を編制することをレオハルトに提案すると、レギナの腕を信じてレオハルトは了承を得た。

レギナは、五発入るはずの狙撃銃の弾倉に一発だけ魔導弾を入れ、弾倉を銃に収めた。本来高位魔道修得者であるレギナにとって、攻撃魔道を発動する為の魔導弾や魔導銃は必要のないものだったが、精密射撃となると発動のガイド目的で銃身が必要になる。レギナが弾倉に入れた魔導弾は、魔道士が専用に扱う？無限魔導弾？と呼ばれるもので、それ自体に発動能力はなく、ただ魔道士の魔道を銃に送り込む為の作用を持つものだった。

「便利ですよ、魔道士って」

レギナ直下部隊に任命された一人、マコーシェが言った。

「一見して便利に見えるが、そうでもない。外部動力に任せる通常の魔導弾と違って、自分自身の魔道力を使うから、余計に疲れる」

「レギナ様の精神力があるから使えるんだ。俺たちには無理だよ」

魔導拳銃？ナナト九二式キユウニ？に弾を込める、レギナ直下部隊に任命されたユリウスが言った。

「そういうものかなあ」

「そういうものだと思うな。そうでしょう？ レギナ様」

「ん。まあ……努力では解決できないこともあるけど、無理だと決め付けるのはどうかと思う。やろうと思えばできることだってある。最初からできない人間はいないと俺は信じたい」

「さすがはレギナ様。言うことが重たい」

「伊達に二百八十四年生きてきたわけじゃないからな」

マコーシェとユリウスは、レギナの正体を知っていた。そのほかの近衛兵にもレギナが存在について疑問に思う者は少なからずいたが、レオハルトに言いくるめられている。自分の正体を知っても何ひとつ疑問に思わず、かつ忠誠心すら見せたユリウスとマコーシェだからこそ、レギナは自らの編制する部隊に任命したのだった。

「二人とも、準備はできたか」

レギナは言った。レギナは肩に狙撃銃を抱え、その上から黒いローブを着ていた。腰にはナナト軍一般兵士用の斬断剣？？式尋常剣？を提げる。頭の左右で結んでいた髪型は、射撃の邪魔にならないようオールバックにして、後頭部でまとめて束ねられていた。レギナ自身はベリーショートになるまで切ってしまいたかったが、エリーザがそれを許さなかったのと同時に、クライヴとの見分けをあえて付けたくはなかったたので切ることをやめた。

「いつでもどうぞ」

軍用魔導突撃銃？ナナト一四式？を持つユリウスが言った。

「こつちも準備完了です」

魔導短機関銃？ナナト六一式ロクヒト？を構えるマコーシェが言った。

「よし、各自武装を確認したら屋敷の車でライヒシュタイン市に向

かえ。——マコーシェ、お前に俺のマリオネットを貸すから、市に着いたらそいつの指示に従って行動しろ」

言つとレギナはどこからともなくピエロのマリオネット？第伍席のメレデイス卿？をマコーシェに手渡した。メレデイス卿はいびつな両目でマコーシェを笑う。

「わかりました。レギナ様は？」

「俺は別ルートで先に行く」

武器庫を出たところでレギナはユリウス、マコーシェ組と別れた。レギナはエントランスに向かうことなく、屋敷の階段を駆け上がる。目指したのは屋敷で最も高い塔だった。

階段を昇りきり、一度呼吸を整える。狙撃銃と斬断剣を合わせて六キロを越える装備を持つて一階から六階まで一気に駆け上がるのは、今のレギナにとっては少しきつかった。ナナト陸軍に所属していたため三十キロの装備を抱えて同じ状況をこなせる精神力はあったものの、体はかつてのものではなく、十四歳の華奢な少女だ。同じ感覚で昇っては体のほうが負ける。

——それにしたって、六キロで息切れするのはまずいな。

レギナは自分の体のハンデを憂いた。だが回復力の速さは元の体以上だった為、直ぐに走り出すことができた。

塔からはカラヴレーゼ市と、地平線の先で輝くライヒシュタイン市が少しだけ見えた。

西に太陽が下りていく。空は昼の青と夕方の赤が混ざって紫色になつていた。やがてその紫が色を増して、黒が訪れる。そのときに狙い目だ。ポケットを探り、魔道学校の生徒になったときにもらった懐中時計を開く。クライヴが拉致されてから十七時間が経っていた。

レギナは自らの体にレベル五十級支援魔道？アルゲトウニト？を発動、ライヒシュタイン魔道学校の魔道砲台と同じ射出能力を持つ高出力電磁加速で空中に撃ちだされる。自由落下を始める前に再び？アルゲトウニト？を発動し空中で加速する、を繰り返してライヒ

シユタイン市に向けて高速で移動した。移動中に発見されては意味がないので、レベル三十級空間魔道？インソネブラ？の光学迷彩を使用する。

空中を移動している間、魔道砲台に自分の変わりに封印したアルトゥール卿と死亡したマティアス卿を除く十体のマリオネットの所在を確認する。そのうち一体はマコーシェの手元にあり、そしてもう一体はクライヴの元だ。

クライヴを追跡していたマリオネット？第肆席のヴェネリイ卿？はテロリスト達が移動用に使っていたトレーラーの上に置かれていた。念のために気づかれないよう？インソネブラ？の光学迷彩を展開し、再びレギナの制御下に置かれる。レギナはそれまで十体のマリオネット全てに、平等に自分の感覚を分け与えていたのをヴェネリイ卿のみに集中する。今のレギナにとってヴェネリイ卿の眼こそレギナの眼であり、ヴェネリイ卿の体はレギナの体となった。

——まずはクライヴだ。

クライヴの居所を探す為、ヴェネリイ卿——レギナはトレーラーから降りた。トレーラーはライヒシユタイン市郊外の、工場街のガレージの中に止められているようだった。まずは出口を探す。

手に？一六式？を持つ、一人の男が近づいてきた。トレーラーの運転席にあがると、ダツシユボードに置かれている煙草のケースを掴んだ。どうやら煙草を取りに来たらしい。

——好都合だ。

レギナは？インソネブラ？を展開しつつ男の後をついていく。地下駐車場の出口には、二人の警備。魔道士ではない。見破られないことを祈りつつ、なんとか別のブロックに移動することができた。

暗い魔道灯に照らされた、狭い通路を抜けると広い部屋に出た。清潔な白い光に照らされたその部屋では、カナヴェラルとレイサンシ人の男——レイヴンがコーヒークップを片手に会話をしていた。

——あの野郎。

「それで、どうするつもりなんだ少佐」

レイヴンが尋ねる。

「次の機会を狙おう。そうだな、レギナとあの少年——クライヴと
いったか。その二人を交換することをエーヴェルハルト家に要求す
る。問題は、レギナ・エーヴェルハルトが野放しにされていること
だ。奴の魔道力に対抗できるだけの力を持つ魔道士がこちらにはい
ない」

「俺が指揮していれば、こんなミスを犯すことはなかった」

「過ぎたことだ。次の機会に成功させればそれでいい」

「もし、レギナ・エーヴェルハルトを確保できなかったときは」

「わかつている。最後の手段として——俺がやる」

レイヴンが強く言った。

「すまないな……レイヴン」

「それが俺の役目だ」

レギナは、自分が標的であつたことを知る。同時にカナヴェラル
を除くテロリストの構成員のほとんどが外人部隊の制服を着たレイ
サンシ人であることに気づいた。

外人部隊。ナナレイ戦争以前からナナト皇国軍に存在した、ナナ
ト人以外で編制された部隊だ。極度の外国人アレルギーであつたナ
ナト軍は、ハーフやクォーターであっても正規軍に編制することは
なく、その全てを外人部隊として別編制にしていた。外人部隊は、
それぞれの名前を微妙に変えて正規軍と同じような編制隊形をとっ
ていたが、軍の内部で差別思想が消えることはなかった。

——まさか、まだ存在していたとは。

軍人でも、レイサンシ人ならば自分を狙う理由は明確だ。二百六
十年後の解放を狙って恨みを晴らしたい奴ならいくらでもいる。そ
して今の自分はクライヴと瓜二つだ。外見からすれば違うのは性別
ぐらいのものだろう。まさか男だったレギナ・エーヴェルハルトが
今女の姿になっているとは想像もつかないはずだ。そうすれば狙う
のは自ずとクライヴになる。

しかし、レギナにとって納得のいかない点がいくつかあった。何故自分が子供の姿であることがわかったのか、情報部のカナヴェラルがどうして絡んでいるのか、そして何故暗殺ではなく拉致という方法をとったのか。

「隊長、失礼致します」

部屋に入ってきた外人部隊の一人がレイヴンとカナヴェラルに敬礼した。

「どうした、軍曹」

「先の作戦で一人、一六式？を紛失した者がおりまして、その旨を報告に」

「なんだと……」

レイヴンが立ち上がる。

「あれほど注意して使えと言ったのに……誰だその間抜けは」

「アガット伍長であります」

「伍長は次回の作戦で編制から外せ。間抜けが一人いると部隊の全員が被害をこうむる」

「……はい、大尉殿」

その一丁の銃のお陰で軍が関連していることに気づけたのだから、そのアガット伍長とやらに感謝しなければならないな、とレギナは思った。

レイヴンが椅子に座ろうとして一度動きを止める。そしてすぐに立ち上がり、胸ポケットから魔導拳銃を取り出すと、空中に向けて一発放った。

——何ッ！

？インソネブラ？を展開していたヴェネリィ卿が寸前で回避、紙一重で被弾を逃れた。

「どうした、大尉」

「いえ……失礼。誰かに見られているような気がした」

「問題はないよ大尉。正規軍はこの所在を知らない。軍の地図では、ここはただの廃工場だ」

「だからといって気を抜くわけにもいかない」

「そうだな、良い心がけだ」

レギナは、早いところ去ろうと思い、ヴェネリィ卿を退却させる。だが、部屋の扉は全て閉じられ、脱出路のない状態だった。辺りを見回すが、ダクトのようなものもない。相変わらずレイヴンは警戒をやめない。展開している？インソネブラ？は制限時間付きの魔道で、一定時間が経つと効果の持続の為に？更新？をしなければならぬ。だが更新をする瞬間は、発動時の強い魔道の光が発せられる。そうなればヴェネリィ卿がいることがばれてしまう、最悪の場合クライヴに被害が及ぶかもしれない。

奥の扉が開き、外人部隊兵士が入ってきた。

——しめた！

すかさず扉が閉められる前に隣の部屋に飛び込む。隣の部屋は魔道エンジンの発電機が何十機も並ぶ発電室だった。魔道エンジンからは魔道の光が漏れており、部屋全体を明るくしていた。幸いにも兵士は居ない。レギナはヴェネリィ卿の？インソネブラ？を更新した。

発電室には緊急用の排気・廃熱用ダクトが設置されていた。レギナはヴェネリィ卿の小さな体を使ってダクトに侵入する。ダクトの内部は光がなく、ただの暗闇だった。ヴェネリィ卿は自らの体を発光させる。青い光がマリオネットの輪郭をぼんやりと暗闇の中に浮かべた。

ダクトをひたすら進んでいくと、分かれ道に出た。片方はこのまま真っ直ぐ続くルート、もう片方はもっと狭いが、逆に向こうから風が吹いているルート。このまま進んでもやがて工場の排気口しかないと感じたレギナは、狭いルートを進むことにした。

そのルートは正解だった。工場の廊下の真上を通っている。レギナは、外れそうな蓋を発見すると、まずはゆっくりと外し、廊下に誰もいないことを確認すると、下に降りた。

「……そこのお前！」

誰かが小声で叫んだ。？インソネブラ？の効果時間が経過したことに気づかず、一瞬驚いたレギナだったが、直ぐに声の主を探す。丁度降りた位置の真横にある部屋からのようだった。ドアの小窓から顔がのぞく。

「お前、レギナのマリオネットだろ？」

そう言ったのは、別室に移送させられたクライヴだった。

「クライヴか、脅かすな」

「やっぱりそうか。ここにはどうやって？」

「俺——ああ、いや。このヴェネリィ卿をつかってお前を拉致した連中をつけたんだ。今俺がそっちに向かっているから、もうすこし待っている」

「連中、僕じゃなくてレギナを狙っているみたいなんだ」

「知ってる。奴らレイサンシ人の外人部隊だ。本来国籍が同じ奴を部隊に一定以上置いてはならないはずなんだが、どうやって一部隊に集めたんだか。まあレイサンシ人つてところで俺を狙う理由は見当がつくがな」

クライヴは、まだレギナが？戦略魔道兵器？について知らないことに気づいた。だが、あえて自分の口から話すことはしなかった。もしも自分の元の体がまだ綺麗な状態で存在しているとわかったら、レギナはそれを欲して寝返えるかもしれないと判断したからだ。

「レギナ本人はいつになったら来るの？」

「夜を狙う。もうすこしだけ待ってくれ、あと一時間もしないうちに日が暮れる。応援も呼んでおいた」

「軍の人じゃだめだ、カナヴェラルがいる」

「安心しろ、それもわかってる。だから信用の置ける奴だけを集めてきた」

「信用の置ける奴？」

「ああ、なかなか使えると思う奴をだな——ちよつとまで、誰か来る」

言っと、レギナはヴェネリィ卿をダクトに戻した。

二人の兵士を従えてやってきたのは、カナヴェラルだった。

「クライヴ君、君を移送することに我々は決めたよ」

「へえ、次は何処？」

クライヴは強気に言った。

「エーヴェルハルト家が交渉を断つたのでね、君を天国に移送する」
レギナは、その言葉に違和感を覚えた。エーヴェルハルト家に交渉の電話が来れば、マリオネットを通じて自分にそれが伝わるように、レオハルトとあらかじめ確認している。だがそれらしき連絡は一向に自分の元には来ていない。交渉は一切行われていないのだ。

——どうする？　ここで助けるべきか？

兵士の一人が、部屋の鍵を開けてクライヴを連れ出した。どうやらここで直接手を下すわけではないらしい。

「僕をどこに連れて行く気だ」

はつきりとした発音で、クライヴは言った。クライヴはレギナに届くようにあえて尋ねたのだった。

「ふん、どこだっていいだろう？」

カナヴェラルは見透かしたようにそう言った。

クライヴを連れて行くカナヴェラル達の姿が見えなくなると、レギナはヴェネリイ卿に？インソネブラ？を再び発動させ、追跡を開始した。

西が遠く光っていた。太陽の光は地平線の輪郭を映し出すだけで、空にはもう星が輝き始めている。ヴェネリイ卿の追跡を確認しながら、レギナは絶好の狙撃ポジションを探していた。本来ならば狙撃するまでもなく、クライヴを部屋から助け出すだけで済んだものの、ここにきて唐突の方針変更を余儀なくされた。

レギナの感覚に、もう一体のマリオネットが介入してきた。マコーシェ達が連れているメレディス卿の感覚だ。あらかじめヴェネリイ卿とレギナを介してリンクさせ、マコーシェ達をナビゲートしていたと同時に、施設の周囲のマッピングをさせていた。配置を確認

する。

ヴェネリイ卿とメレデイス卿という二体のマリオネットを駆使して、施設の概観図がレギナの中で完成した。クライヴを救出できるポイントも見える。

レギナは夜空を舞った。なるべく早く、かつ隠密に。

「マコーシェ」

ヴェネリイ卿だけでなく、今度はメレデイス卿のほうに、自分の感覚の半分を分け与える。メレデイス卿を抱きかかえていたマコーシェは、今まで動かなかったマリオネットが唐突に動き出し、しゃべりだしたことに驚く。

「あ、ああレギナ様ですか？」

「驚かせてすまない。驚かされたついでに、ひとつ頼まれごとをしてくれ」

「はい、なんでしょう？」

「ライヒシュタイン市警備隊に通報しろ、間違えても警察になんて連絡するなよ。市の警備隊はお前らと一緒にライヒシュタイン家の近衛兵で構成されている。お前らがエーヴェルハルト家の近衛兵であることを知れば、必ず支援をしてくれるはずだ」

「……駄目だったときは？」

車を運転するユリウスが尋ねる。

「駄目なんて事はない、俺の言葉を信用できないというのか？」

「いいえ、そんなことはありません」

「だったら今すぐ警備隊のところに行つてこい。突入は二十分後だ」
「了解」

言うところユリウスはアクセルを踏み込み、都市の中心部へとハンドルを切った。

「なあマコちゃん」

「なんだ、ユリウス。それと俺を変な名前で呼ぶな」

「俺さ、この任務が終わったら——」

「待て、ストップ」

「何？」

「終わった後の話は禁止だ。任務中の結婚話と両親の話は絶対にするな」

「冗談だよ。冗談が通じない奴だ」

「俺は、そういう事を言って死んでいった奴を見たことがある。映画とかでな」

「わかってるよ。今日はなかなか面白い一日になりそうだ」

「お前、それもだ……」

マコーシェはため息をつく。

「大丈夫、死にやしないよ。俺達にはレギナ様がついているんだぜ」
ユリウスはマコーシェが抱きかかえるメレディス卿を指差し、言
った。

「なあユリウス」

「なんだ？ マコーシェ」

「……お前のこと、旗製造機^{フラグメーカー}って呼んでいいか？」

クライヴは両手足首を押さえられたまま、手術台のような硬いベ
ツドの上に寝かされていた。天井の蜂の巣のような魔道灯がまぶし
い。辺りが真っ暗に見える。だが、何人かの人間がもごもごと動い
ているのが見えた。中には白衣を着るものも居る。一見すれば病院
のようにも解釈できるが、周囲の装置はあきらかに病院のそれでは
ない。

クライヴの横たわる台の横には、？戦略魔道兵器？——レギナの
体——が入った棺桶が置かれている。棺桶からは大量のケーブルが
延びており、その全てが横たわる台に繋がられていた。

寒い気がする。どうしてだろう。クライヴは自らの体を見た。上
半身が裸だ。それにアルコールのつんとする臭いがする。臭いの発
生源は僕自身か。

「僕、寝ていたのか？」

「幸せな奴だ。今から殺されるかもしれないというのに」

「いや、その言葉が正しいかどうかはわからんぞ、軍曹」
部屋に入ってきたレイヴンが言った。

「……あんたは？」
クライヴが尋ねる。

「ナナト皇国陸軍特務部隊のエゴール？レイヴン？ドラドだ。まあ
いまだき珍しい生粋のレイサンシ人だよ」

「特務部隊……外国人だけで編制されたナナト軍部隊か」
クライヴはレギナの言葉を思い出す。

「ガキの癖に良く知っている」

「あんたが列車襲撃の実行犯か」

「そうだ、と言ったら？」

レイヴンが投げかけた。

「今すぐぶつ殺してやりたい。あんたは父の仇だ」

クライヴは即答する。

「強いな。男はそうあるべきだ」

レイヴンは感心する。

「あんたに誉められても何もうれしくない」

「そうか、残念だ」

部屋のドアが開く。カナヴェラルが入ってきた。クライヴの目の
前に、今回の事件の首謀者二名が同時に現れた。

「結局、君がレギナかどうか、或いは偽者かどうか判断するのは難
しくなった。そこで、当初の予定通り実験を開始しようと思う」

「実験……？」

「鍵を差し込んでみる」

カナヴェラルは静かに言った。

「僕の魂を使うというのか」

クライヴの問いにカナヴェラルは答えなかった。かわりにやって
きたのは物騒な医療用具を持つ白衣の男達だった。

「何処から手をつけましょう、少佐」

男の一人がマスク越しに言った。

「魂を構成するのは脳と心臓だ。そのいずれかをレギナの体に捧げれば？ 戦略魔道兵器？ は動く」

「そんな馬鹿な！」

「わかりました」

白衣の男は、クライヴの心臓にメスを近づける。

レギナの体には手術痕なんてなかった。

カナヴェラルは、魂の移動方法を知らない。

だとしたら、僕は犬死だ。

この状況どうする？

——やることはもう決まっている。

「助けて！ レギナ！」

クライヴは力の限り叫んだ。

「俺をお呼びか？ ？ 兄様？」

部屋の扉をレベル三十七級攻撃魔道？ フェルプル？ の散弾でぶち抜いて現れたのはヴェネリィ卿だった。時を同じくしてメレデイス卿が外の壁側から同じ？ フェルプル？ で突き破って入ってくる。

「操り人形だと——」

「ようカナヴェラル。右を見てみる」

ヴェネリィ卿はカナヴェラルに対して指を差して方向を示す。

「バーカ、こっちは左だボケ」

壁の外から閃光が走り、カナヴェラルの額を貫いた。

「ありがとう、観測手諸君」

隣の建物の天井を陣取ったレギナから、狙撃銃のスコープでヴェネリィ卿とメレデイス卿がこちらに対して敬礼するのが見えた。

レイヴンと、数名の白衣を着た男達が棺桶を運び出す。その他の兵士は慌ててマリオネット達に対して銃撃を加えてきた。

「棺桶の退避を最優先事項にしる！」

メレデイス卿がレイヴンに襲い掛かった。だが、レイヴンはとっ

さの行動でメレディス卿の奇襲を察知し、魔導拳銃を数発叩き込んで牽制する。その間にヴェネリイ卿は兵士に対して応戦する。

瞬間――メレディス卿の開けた穴から二人の男が降下、マリオネツト勢に加勢した。一人は短機関銃を持つ男マコーシエ、もうひとり突撃銃を持つ男ユリウスだった。二人はサングラスをかけており、手には閃光弾が握られていた。

「迎えに来ましたよ、クライヴ様」

クライヴの枷を外すマコーシエが言った。

「家の者か？」

クライヴが尋ねる。

「やだなあ、いつも会っているじゃないですか」

突撃銃で敵兵士に応戦するユリウスが言った。

敵兵士が退却していく。目的は敵の殲滅ではない、脱出路の確保だ。最後に出て行く兵士が煙幕弾を投げてユリウスの追撃を逃れる。

「逃すな！」

クライヴが叫ぶ。

「大丈夫です。下にはライヒシュタイン市警備隊が待ち構えていますから」

「いや、大丈夫とは言い切れない。まずいな、トレーラー一台が警備を突破する」

狙撃銃のスコープでレギナは見る。二台のトレーラーのうち、一台は警備隊が確保したものの、もう一台はアクセル全開で警備隊の車両をなぎ倒しながら逃走を図った。その一部始終をヴェネリイ卿越しに報告する。

「レイヴンだ。あいつ？ペルフエウルテ？を持っている」

「何だと……どうしてそれを言わない！」

「言うタイミングがなかったんだ」

「……まあいい、マコーシエとユリウスはメレディス卿をつかってトレーラーを追跡しろ。警備隊だけでは手に終えんかも知れん」

「了解」

マコーシェとユリウスはヴェネリィ卿に敬礼すると、メレディス卿を連れて外に走っていった。

「僕らはどうするの？」

クライヴは残ったヴェネリィ卿に尋ねる。

「……におわせるじゃないか」

レギナは、全く別の区画から出て行く装甲車両の姿をスコープで追っていた。装甲車両は街中を暴走するトレーラーとは正反対の方向に向けて、ゆっくりと走り出した。レギナはその装甲車両が走っていく一本道の先をスコープでたどる。街中とは正反対――

「まずい、急がないと」

「どうしたの？」

「奴ら――」

――魔道学校に向かっている。

* * *

ライヒシュタイン魔道学校、校長室。

学校長ヴィセラスとその孫テレーゼ・ライヒシュタインはレナードの埋葬を終了させて、ようやく一呼吸ついたところだった。

「どうだテレーゼ。エリーザ嬢のところで魔道修業をするのも良いが、この魔道学校に編入する気はないか。クライヴもおる。お前は少々、同年代の友人が他の子供と比べて少ない気がする。レナード亡き今、僕はお前に十四代目を継いでもらうしかないのだ。そうなれば、ライヒシュタイン魔道学校を引き継ぐのはお前なのだぞ」

テレーゼはティーカップを片手に、校長室の身長ほどもある窓からライヒシュタイン魔道学校の全景を眺めていた。

「わかっておりますわお祖父様。エリーザ師匠も、少し前にあたしにそう提案してきました。でも、その度にあたしは師匠の下で魔道修行をしたいと願ってきました……お父様が居たから」

「テレーゼ。お前も、もうじき十五歳だ、エリーザ嬢の開いている

魔道教室では、お前が最年長だと聞くぞ」

クライヴの母エリーザがエーヴェルハルト邸で開いている魔道教室は、あくまで初等部クラスの魔道を教えるに過ぎなかった。エリーザもヴィセラスにテレーゼを十二歳まで魔道修行をさせる約束をしていたのだ。既に契約期間は三年近く過ぎており、ヴィセラスもエリーザに申し訳ない気持ちでいた。

「師匠は私の為だけに魔道を教えてくださいます」

「それは違うぞ。お前だけに中等部クラスの魔道を教えざるを得ない状況に、おまえ自身がさせてしまっているのだ。おまえ自身がエリーザ嬢に迷惑をかけていることに何故気づかん」

ヴィセラスは孫を叱った。

「知りません。知りませんわ!」

テレーゼはそう言いながら校長室を飛び出した。扉の前で母リネアとぶつかるが、それを気にもせず外へと抜けていく。

「何があつたのです?」

「リネアか……とんだ我俣娘だな、テレーゼは」

「エリーザ様のところにいるときは素直な子なのですが、どうにも最近ずつとあの調子なのです」

「レナードを失った気持ちに、家柄の重圧か。儂とてわからぬ訳ではない。難しい年頃なのだな。儂はテレーゼに?もう十五歳?と言ったが、テレーゼは?まだ十五歳?なのだな。確かに、大人と同じように扱うには少々早い年齢かも知れん。だが、儂はテレーゼにもう少し理解してもらいたいのだ、ライヒシュタイン家の名を継ぐものとして」

ヴィセラスは椅子を回転させて、テレーゼが見ていたように窓の外を眺めた。

テレーゼは校長室を飛び出した後、古城の裏庭に出ていた。裏庭は他の生徒と職員が立ち入り禁止だった為、誰かに干渉されることもなかった。

テレーゼはヴィセラスに会ったびに喧嘩をして、その度に裏庭に隠れていじけていた。そんなとき、迎えに来てくれるのが父レナードだった。レナードはテレーゼの最大の理解者だった。だが、その父ももうこの世にいないことを実感すると、急に涙がこみ上げてる。

ガサツ。

庭の奥で何かが動いた。おかしい、誰もここに入ってくるはずはないのに。

「……誰？」

真っ暗な庭で、音がした方向だけばんやりと光が浮かんだ。魔道灯ではなく、ランプのような優しい光だった。

「……そんなところにいないで、出てきなさいよ！」

テレーゼは叫ぶ。

ガサガサツ。

次第に草を掻き分ける音が大きくなった。同時に光も近づいてくる。

「ひっ……」

テレーゼは、その巨大な影に声を失った。前はこんなのないなかった。とてつもなくて大きくて、黒くて、でっかくて、真っ黒で、重たい奴！

のっしのっしとゆっくりテレーゼに近づいてきたのは、大牙犬のハチコウだった。

「き、牙犬？ にしたって、ずいぶん大きい牙犬ね。牙にランプを引っ掛けちゃって」

言いながらハチコウに恐る恐る近づいて、触れた。ふさふさとした黒い毛が心地よい。もしこんなふわふわとしたベッドに寝られるならさぞかし気持ちの良いことだろうとテレーゼは考える。

ハチコウは、テレーゼが撫でる手が気持ちよかったのか、その場で丸くなった。二本の尻尾がゆっくりと揺れている。

——か、可愛いッ！

「お祖父様、いつのまにかこんな牙犬を飼っていたのね。見たところ首輪がないけれど、人懐っこい性格だから人馴れしているのね」

ハチコウの周囲をぐるぐると回りながら分析する。一方ハチコウは、クライヴとレギナ以外を人間とは認識せずに、ただ自分に害のないものとして判断をしているに過ぎなかった。テレーゼに至っては、勝手に毛づくろいしてくれる櫛程度にしか見ていない。

そのうちテレーゼは、ハチコウが何もしてこないのをいいことに、背中の上に乗ってみた。一瞬驚いたハチコウだったが、睡眠の邪魔にならないと思い、テレーゼを無視した。

——暖かい。

「はあ。いなくなってしまうと、その存在感って大きかったんだな
って思うわ」

テレーゼは誰となく呟いた。

「もう、あたしを慰めに来てくれる人はいないのね。……クライヴ？ 無理よ。そんなに気の利く奴じゃないもの。それにレギナにべつたりだし。でも、二人は兄妹ってことになっているから、当然よね。当然なのかしら？」

テレーゼはハチコウのふさふさとした毛の中に顔をうずめてみる。ちよつとくさかった。

「……あなた、少しシャワーとか浴びてみたら？」

寝返りを打って、仰向けになる。テレーゼは空を見上げた。星が輝きだしている。

「どうしてだかわからないけどレギナが現れたとき、急にクライヴが遠くなった気がした。クライヴは普通にあたしに接してくれたのに、どうしてだろう。レギナのせいとは思いたくないな、だってあたしもレギナと仲良くしたいもの。中身がどうかそいう問題じゃなくてね」

テレーゼはむくりと起き上がる。

「あなたに話しても意味ないわよね。でも、うん。独り言よりかはマシよね。なんかスッキリした。もう少し話していたかったけど、

そろそろ行かないとママに怒られるわ」

ハチコウは耳をぱたと回す。まるでテレゼに向けて手を振っているようだった。テレゼはハチコウから降りると、一度体の全てを払った。

裏庭を構成する石の壁の向こう側は魔道学校のメインストリートだった。テレゼは、久しぶりにここに来てメインストリートを見物していなかったことを思い出す。

「少しくらい、いいわよね」

そう呟くと、裏庭の通用門を開けてメインストリートの方へと歩いた。

普段は学生達でにぎわっているメインストリートは、夏休み中の為かあまり人が多くなかった。やっている店も半分程で、期待したほどのものではなかった。明かりを構成する魔道灯のポールには、今年創立二百周年を迎えるライヒシュタイン魔道学校の記念式典に合わせた文化祭の予定が貼り出されていた。テレゼもこの式典には出る予定で、本来ならばこの記念式典に合わせてヴィセラスの退任式が行われるはずだった。そして今年度いっぱいヴィセラスは校長及びライヒシュタイン家の当主から外れ、テレゼの父であるレナードが学校を引き告ぐ予定だった。しかしレナード亡き今、ヴィセラスが退任するわけにも行かず、引き続き校長職を続けることになった。テレゼにその力量があると判断されるまでの間。

「……やっぱり、この学校を知らないというのはライヒシュタイン家の人間としてまずいことなのかな」

遠くで、ごろごろという何かを転がす音が聞こえた。テレゼは直ぐにその方向を向く。正門だ。更に銃声。

「突破されるぞ！」

誰かがそう叫んだ瞬間、正門が魔道によって破壊された。奥から八つの巨大な車輪で突入してくる大型の装甲車両がやってきた。魔道砲台が起動してレベル四十五級破壊魔道？第丙種フォルイグス？の榴弾を装甲車両に叩き込む。咄嗟の急ブレーキで被弾を免れたも

の、装甲車両はメインストリートで横転した。

テレーゼは、何が起きたのか事態に理解できず、その場で立ち往生していた。

装甲車両の中から数名の兵士を従えたレイヴンが現れる。レイヴンは魔導砲？パンツァー？を城門警備兵の方向へ向けるとレベル四十五級破壊魔導？第丁種フォルイグス？のロケット弾を放った。城門が破壊される。

「あ、ああ……」

ようやく我を取り戻して逃げ出そうとした瞬間、テレーゼは兵士の一人に捕まえられた。

「隊長！ 人質を捕まえた！」

テレーゼの腕をぐいと掴みながら兵士はレイヴンに叫ぶ。

「よし、棺桶と一緒に砲台に昇れ。アレを占拠する」

レイヴンは言った。レイヴンには考えがあった。長い間拠点にしていたライヒシュタインの廃工場から、ライヒシュタイン魔道学校の魔道砲台をよく眺めていたレイヴンは、その命中精度と威力に興味と関心があった。そして冷静な分析の結果、フルパワーで発射していないことに気づいた。もしあの魔道砲台をフルパワーで使用するれば、その気になればナナト皇国首都アウグストに高威力魔道砲撃を与えることもできると判断した。レイヴンにとって魔道砲台の占拠は戦略的価値のあるものだった。

「あれなら、あれならば」

二百六十年前の借りを返すことができる。

全レイサンシ人の悲願である？打倒ナナト？が、今俺の手によって達成される。

できることなら、盟友カナヴェラルと共にその瞬間を見ていたかった。

我々の祖先にそうしたように、今貴様らにその痛みを教えてやる。レイサンシ人の俺の手によって。

追跡する為の車が必要だった。市内ならば車を捕まえることは簡単だったが、市外、ライヒシュタイン魔道学校方面に行く車は、夏休み中のためほとんどなかった。

駅前のロータリーまではたどり着いたものの、レギナとクライヴはそこで立ち往生していた。レギナ一人ならば、カラヴレーゼ市からここに来たのと同じ方法を使ってライヒシュタイン魔道学校へ飛ぶことができる。だがクライヴを放っておけばまた拉致される可能性だっと思って考えられる。今はクライヴと共に行動するしかなかった。

「まずいよレギナ、向こうにはテレゼだっているんだ」

「ああ、わかつてる。わかつてるからちよつと待つてる。くそ……マリオネットを学校内に放つわけにもいかんしな、そもそもマリオネットだけでなんとかできる問題ではない。奴らが本当に？ペルフェウルテ？を使える敵だしたら、アーウィン兄様が居ない以上、この俺以外に止められる奴はいない」

言いながらレギナは周囲の車の流れを見る。ふと、ロータリー端の路地に見たことのあるオリーブグリーンの四輪駆動車が止まっていた。

クライヴとレギナはその車に駆け寄る。ライヒシュタイン魔道学校の校章が前方のドア二つに描きいれられていた。

「ビンゴだ。誰のかはわからんが、これに乗ってきた奴を探そう」
「先生か、上級生だろう。事を説明すればきつと乗せてくれるはずだ」

クライヴは言いながら駐車している眼の前の雑居ビルを眺めた。その雑居ビルは全て？エターミナ？という名前の店になっているようだ。

「多分、ここにいるんじゃない？」

クライヴは雑居ビルを指差す。

「魔道用器具の店には見えないが……まあその可能性はありそうだ」
店のガラス扉の先で、会計を済ませている男の姿が見えた。丸い眼鏡を掛けた、緑色のベストを着る男。その姿にクライヴとレギナ

は同時に叫んだ。

「ラングフェルド！」「ラングフェルド先生！」

何も気づかずに満面の笑顔でラングフェルドは、手に購入したものを抱えて店から出た。路上駐車していた、学校の所有物である四輪駆動車の運転席に乗ると、直ぐに魔道エンジンを始動させる。いったん方向転換した後、ロータリーに合流してライヒシュタイン魔道学校へとハンドルを切る。魔道学校方面は珍しく渋滞をしていた。市の警備隊が道を封鎖している。しばらく動けないことを確認すると、助手席に放っておいた購入物を確認しようと前方を見ながら手探りで探す。

——あれ？

自分がぼけているのかもしれない、と思いつつ横を見ると、確かに無かった。自分では助手席に投げたつもりだったが、もしかしたら後部座席に投げたのかもしれない、という仮説を直ぐに立てて、今度は後部座席を探る。

——あれ？

今度はやわらかいものに触れた。小さく膨らんだ二つの山がある。その先端には――

「変態」

レギナが一言呟いた。声に驚き、振り向くと、ラングフェルドの左手はレギナの胸にあった。レギナはラングフェルドの購入した？ かがわしい本？を開いている。

「え、え、え？ なに、なにこれ？ どういうこと？ なんでレギナ君がここに？」

「本だけでは飽き足らずに手を出すとは、犯罪者め。それも十四歳のガキを相手に……お前、そういう嗜好が趣味だったのか？」

レギナがラングフェルドを睨んだ。ラングフェルドは直ぐに手を離す。

「ああ、いや……そういうわけじゃ」

「レギナ、今はそれどころじゃないって」

横で布に包まっていたクライヴがレギナに言った。

「クライヴ君？」

ラングフェルドは更に驚いた。

「先生、早く魔道学校に僕らを連れて行ってください！」

クライヴは叫んだ。

「い、いや……しかしあそこは今、市の警備隊が封鎖をしているんだ。何かあったらしい」

ラングフェルドは門を指差した。普段なら解放しっぱなしになっている市外への城門が珍しく閉じているのだ。

「いいから行けて、あそこの警備兵に話せばわかってくれる！」

「わっ、ちよつとレギナく——」

レギナはラングフェルドの左足を押した。

「ブレーキ踏んでないでアクセル踏めつての！」

「無理だ！ 前には車が何台もいる！ ここでアクセルを踏んだところで前の車に追突するだけだ！」

「……なら、こうするまでだ！」

レギナは車から降りると、車の後ろに掴まった。クライヴはレギナが次に起こそうとしている行動について咄嗟に理解した。

「先生、シートベルト！」

言いながらクライヴもシートベルトのついている前方の席に移り、しっかりと止めるとそのシートベルトをぎゅっと掴んだ。

——この重さなら楽勝！

レギナは自らと車に対してレベル五十級支援魔道？アルゲトウニト？を発動。

電磁加速によって車が空中に撃ち出された。

渋滞の渦と閉ざされた城門を飛び越える。

「うおおおおおお！」

ラングフェルドがハンドルを抑えながら叫んだ。

「……！」

クライヴは前方を睨みつつ、声を失っている。

「いつけえ！」

城壁より二十メートル先に車は着地する。一度バウンドしたが、走行に支障はなかった。

「レギナ君、流石にこれはまずいよ。市の警備隊に僕らが追われてしまっ、検問突破は重罪だぞ？」

「つべこべ言わないでとつと向かえ、邪魔する奴はもういねえ」

天井からフロントガラス越しにレギナが言った。

平原を走る。遠くに魔道学校の魔道砲台が見えた。だが、少し夜景にかすんでいる。視線が見る魔道砲台との間に黒い煙が立ち込めていた。

「クライヴ、狙撃銃を寄越せ」

レギナはがつがつと天井を叩いた。クライヴは、室内に置かれていた狙撃銃を取り、上面ハッチを開けてレギナに渡す。受け取ると、煙の方向に銃口を向けた。

「何か見える？」

「暗闇でよくわからん。わからんが、何かすっきりしている気がする」

スコープの先でみた城壁には、大穴が空いていた。

銃声。

車の側面に被弾。

レギナが振り向く。

「誰だ？」

後方から追跡する二台の装甲機動車。天井に装甲板付きの魔導機関砲が装備されている。

「警備隊だ」

「野郎ッ！」

言つとレギナは狙撃銃を警備隊のほうに向ける。

「だめだ、彼らを撃っちゃいけない」

「タイヤを狙う。魔導エンジンを撃ってもあのタイプは動けるからな」

レギナは驚異的な安定性で狙撃銃を扱い、タイヤを狙う。

「彼らをそのまま連れて行くのはどうかな」

ラングフェルドが言った。

「それ賛成」

クライヴが言った。

「なるほど、あいつらにテロリスト共を捕まえさせるってわけか。

乗った。よしラングフェルド、テロリストの気分になって魔道学校に突っ込め！」

「そんな無茶な！」

「男は度胸だ！」

「それは？女？に言うべき台詞だよ」

「男？も？度胸だ！」

レギナが訂正する。

車は、二台の追跡車両を従えながら魔道学校へとひたすら走った。学校の入り口、城門は巨大な球体でも転がったのかと思わせるくらいにぽっかりと穴が開いていた。その先には、レギナがスコップで確認した装甲車両が横転しており、その周囲に魔道学校付きの警備兵がたかっていた。

「どけどけえ！」

ラングフェルドは吹っ切れたのか、ハイテンションになってアクセルのみを踏んで魔道学校に突撃した。

「奴ら何処に——」

「あそこ！」

クライヴが魔道砲台に繋がる古城の屋上を指差した。テロリストの狙撃兵が警備隊と銃撃戦を繰り返している。

「奴ら魔道砲台を占拠しているのか？」

城門を突破してくる車に、警備兵は一度は銃を向けたものの、それがライヒシュタイン魔道学校の所有物であることに気づくと、直ぐに銃を下げた。車はバリケード化した、横転した装甲車両の前で停車する。

「ラングフェルド教授……？」

近づいてきた警備兵は、つい数時間前にラングフェルドに車の鍵を渡した警備兵だった。

「やあ、ただいま……」

レギナとクライヴは車を降りると、直ぐに古城方面へと走り出した。テロリストの銃撃が容赦なくクライヴとレギナを襲う。レギナはもう自らを隠す必要は無いと判断し、今度はテロリストの？イグス？の銃撃を、同じレベルのレベル二十級防御障壁を展開して無力化させる。同時に狙撃銃のスコープをマウントごと外して、制服の上着ポケットにしまい、普通の魔導ライフルとしてテロリストに向けて発射。

「レギナってすごいよね、走っている状態からも敵に確実に当てるんだもん」

「これは努力じゃない。俺にしかできない技だ。でも、もしもクライヴの親父さんがナナト軍一の狙撃手だったとするなら、俺は二番目だ。純粋な狙撃手としては邪道だよ」

「だから魔道砲台は百発百中だったわけだね。？魔道学校一の射撃の名手？って言われていた魔道砲台は、本当に射撃の名手によって命中率を誇ったってわけだ」

「いいこと言う。流石は兄様。兄妹をほめることを忘れない」

レギナの魔道防御障壁を利用して、銃撃を浴びつつも古城の目の前まで来る事ができた。しかし、古城周辺は大きな広場となっており、古城の高い位置から狙撃のできる敵にとっては絶好の場所だった。

二人は、ホットドックを販売する移動ワゴン車の後ろに隠れていた。

「銃持ちながら防御障壁を展開しつつ走るのって、こんなに辛かったっけか……」

息切れを起こすレギナが言った。魔導弾を使わない魔道を連発したレギナは、普通に走る疲れの何倍以上もの疲労がたまっていた。

「立てる？」

「ちよつとまってくれ。少し休憩しよう。……失敗したな、お前を置いて俺だけで突入しても良かったんだな」

「それだけはさせない」

クライヴは凜とした目つきで言った。クライヴにはレギナが嫌と言つてもついて行く理由がある。レギナが？ペルフェウルテ？を二度と発動させたくない気持ちは理解しているつもりだった。しかし、レギナが元の体を手に入れてしまえば、レギナ自身が何をしてくすかわかったものではない。不死身の上に最強の矛を手にしてしまうのは、なんとしても阻止したい。

——でも、僕にとめることなんてできるのだろうか？

「クライヴ、ここまで来たらお前にも手伝ってもらふ必要がある」

レギナは言うど、自分の腰に提げていた斬断剣？？式尋常剣？をクライヴに手渡した。

クライヴは一度鞘から斬断剣を抜き、刀身を確認めた。練習用に使っていた？レオデンスマーク？？よりも重たい。本物の斬断剣だ。「僕は、戦えないよ……」

クライヴは、斬断剣を持つ自分の手が震えていることに気づいた。実戦など経験したことは無い。いつも授業では互いに防具をつけて戦っていた。刃だつてついていなかった。

「前に手合わせしたの、覚えているか？」

レギナは狙撃銃にスコープを付け直し、肩にかけた。

「うん」

「あのとき、俺はお前に勝てなかった。別に俺が弱かったわけじゃない——勘違いするな、別に自画自賛しているわけじゃない。もし、俺が元の体であつたとしても、お前に勝つことはできなかったはずだ。お前には、相手の攻撃を見切る力がある」

「見切る、力？」

「天性の勘とでも呼ぶべきか。もつと前、俺とクライヴが最初に会つたとき、お前はマティアス卿の格闘攻撃を簡単に回避し、マティ

アス卿を一瞬でねじ伏せた。あるときマティアス卿はレベル五十級支援魔道？アルゲトウニト？を使って、魔道砲台から発射される焼夷弾よりも高速でお前に襲い掛かったんだ。だというのに、止まっているハエを叩くよりも簡単にマティアス卿を叩くことができた」

「それが、なんだって言うんだ」

「もつと自分の力を信じてみる、お前はいつもどおりにやればいいんだ。なんなら峰打ちにしたっていい。？？式尋常剣？は片刃だ。お前は戦える、十分に」

「僕にはあの魔道の銃撃を避ける術がない。いくら目が良くなったって、体がついていかないよ。そりゃ、一回ぐらいいけるかもしれないけど」

「任せろ、俺が助けてやる。自分の妹を信用しろ」

クライヴは深呼吸して、斬断剣を握りなおした。

「わかった」

？・レギナとクライヴ

古城の中は、まるで戦場だった。

数で勝る警備兵達を、古城の構造を上手く利用したテロリスト達が圧倒していた。

それだけではない。古城を占拠したレイヴンの部下達は魔道士だった。魔道力を持たない警備兵達の突撃銃はその銃弾のことごとくが魔道障壁によって防御され、一方的な攻勢を生むだけだった。

レギナとクライヴは、巧みな連携で突破口を切り開きつつあった。クライヴが前衛に走り、レギナがクライヴの突撃を魔道障壁と？アルヴトウニト？によって支援。

レギナのマリオネット？第捌席のヴァレンティン卿？と？第陸席のカレスティア卿？が警備兵達の代わりに防御障壁をつくってやり、損害を減らす。

クライヴは決して相手を殺すことはしなかった。斬断剣で強い打撃を与えるものの、気絶に留まっている。レギナもそれについて言うことはなかった。自分のスタイルで戦うことが一番良いと思ったからだ。

また一人、クライヴの剣に倒れた。

レギナはクライヴがここまでできるとは想像していなかった。若千十五歳のクライヴはまだ学生で、戦闘経験などまるでない少年で、自分から見れば未熟者も未熟者。しかし、それを補えるほどの能力があった。もし、まだ血筋にこだわるならばこれはエーヴェルハルト家ではなく、レミントン家が持っていた力なのだろうと思った。

——ヴェルナ・レミントンもまた……

クライヴは何よりもタフだった。そして度胸があった。拉致されたとき、クライヴは恐怖を感じていたのだろうか。もしそうだとすれば、今まで自分を人質にとっていた敵に向かって剣を振り下ろせるのは強い精神力でしかない。つくづく、クライヴには驚かされる。

「レギナ！」

「おう！」

レベル五十級攻撃魔道？プロケラ？の強烈な衝撃波がレギナを中心に、全体に発せられる。同時展開したレギナのレベル五十級防御障壁によってクライヴは衝撃波を受けない。

唐突な高位魔道の発動に防御障壁が耐え切れなくなった敵兵士はよろめく。

？アルヴトウニト？によって高速で接近したクライヴが兵士に止めを刺す。

吹き抜けに出た。

一階以外に敵兵士の姿はぱっと見て確認できない。

吹き抜けの中心に来たレギナとクライヴを襲う銃撃も無い。

——突破したか？

レギナは背負っていた狙撃銃を再び構える。同時にマリオネット、ヴェネリイ卿とメレディス卿を先行させ、周辺の索敵にあたらせる。

「レギナ、どうしてもっとマリオネットを動員しないの？」

巨大な構造物であるライヒシュタイン城を全て搜索するには二体では少なすぎる。クライヴは判断した。

「バカ言え。マリオネットは俺の意識下でしか機能しないんだぞ。」

数を増やしたところでその全てを制御できるわけじゃないんだ。それに魔道力を結構消費する」

「ごめん、そうだったんだ……」

「いや、だがずいぶん助かった。いくら警備兵達の支援があったとしても、俺一人で片付けるのは相当骨が折れる作業だった」

「まだ終わってないよ」

「そうだな。……誰もいないみたいだ、一気に駆け上がってまずは校長室だ。リネアやテレーゼは避難したかもしれないが、あのクソジジイがいる可能性もある」

レギナが？クソジジイ？と呼ぶヴィセラスは、まだ人質に取られている可能性があった。一階の職員室には、まとめて職員達が人質

に取られていたものの、ヴィセラスの姿は無かった。

「わかった」

レギナは自分とクライヴに？アルヴトウニト？を発動させ、一気に七階まで射出した。コントロールの利かないクライヴを、レギナが手を引いて七階に着地させる。

？イグス？の銃撃。だが突撃銃ではない。

咄嗟に発砲に気づいたレギナが防御障壁を発動。初弾の命中を逃れた。

察するに、銃撃は校長室入り口からのようだった。

廊下の前に来た二人は奥の様子を確かめる。

「扉が閉まっているよ、レギナ」

クライヴが小声で言った。

「仕方ない、ブツ壊すしかないか？」

レギナも小声で返す。

「待つて。マリオネットに先行させよう」

「お前……俺の命の次に大切なマリオネットを消耗品扱いしてないか？」

「レギナ、命無限じゃん」

クライヴは悪びれたそぶりも見せずに言った。

「……答えになってないぞ」

レギナはしぶしぶメレディス卿を呼び出し、廊下のほうへと進ませた。

爆発。轟音。

レベル三十七級攻撃魔道？フェルプル？の散弾と、レベル三十五級破壊魔道？第二種フォルイグス？の焼夷弾が同時に襲い掛かった。防御障壁の展開が間に合わなかったメレディス卿は爆発に巻き込まれてバラバラになった。

「ふざけんな！」

「……まさか本当にトラップがあるなんて」

言いながらクライヴは、恐る恐る先に進んだ。その横を、風を切

るようにレギナが突き抜ける。

レギナは木っ端になったメレディス卿を拾い上げ、震えた。

「この短期間で二人も犠牲者を出すとは……名誉の戦死だ、安らかに眠ってくれメレディス卿」

「レギナ」

「うるさい！」

「……悪かったって」

「どうせなら俺が突っ込めばよかったんだ。そうすれば犠牲者は出なかった……」

レギナはその場にしゃがみこんでいじける。

「……テレーゼと校長を見つけた」

クライヴの視線の先には、縄で壁に括りつけられたヴィセラスとテレーゼが居た。クライヴは二人に駆け寄り、斬断剣で縄を切る。同時に口枷となっていたテープもはがした。

「クライヴか、よくきた」

ヴィセラスが言った。

「遅いよ、死ぬかと思った」

テレーゼが言った。

「リネアおばさまは、城に？」

「いや、テレーゼを探しに行ったきりだ。だが城にはいないはずだ、恐らく大丈夫だろう」

「そうですか、よかった」

クライヴは安堵の息を漏らす。だが肝心のレイヴンと？戦略魔道兵器？の姿が見えなかった。

「校長、棺桶を持った男を見ませんでしたか？」

「ああ居た。首謀者だ、何人かの男を連れてさっき魔道砲台の方へと向かうとか何とか言って——」

「魔道砲台だと？」

復活したレギナがヴィセラスに駆け寄る。

「？戦略魔道兵器？を砲台に込めて発射するとか何とか……」

「レギナ、あの魔道砲台はフルパワーで撃つとどうなるの？」

クライヴが素朴な質問を投げかけた。

「あのサイズだ。一発での崩壊を気にしないでドカンと撃てば——
まあ首都アウグスト辺りまでは届くだろう」

レギナが淡々と答える。

「それだ、レイヴンは魔道砲台を使って？ペルフェウルテ？をアウグストに叩き込む気にいるんだよ、早く行かないと撃ち出されてしまう！」

「まあ落ち着けクライヴ」

魔道砲台に向けて走り出そうとするクライヴをレギナが制止する。

「なに悠長なこと言っているんだ、アウグストが危ない！」

「忘れたか？ あそこは？俺の領域？だ」

レギナは不敵な笑みを浮かべた。

何故着かない——？

レイヴンと二人の兵士は、レギナの体の入った棺桶を抱えて魔道砲台へと昇っていた。暗い塔の中には延々と螺旋階段が続いており、上へ上へと限度が無いように段が存在した。

「隊長、ここは……」

もう十分以上階段を昇っていることに疑問を覚えた少尉が言った。
レイヴンははっとして魔道拳銃を抜き？イグス？で自分の左手を撃った。

「隊長！」

痛みにもだえかけるレイヴンの奇行に一瞬驚いた曹長だったが、直ぐにレイヴンが平静を取り戻したので、気が動転することは無かった。

「……大丈夫だ。俺について来い」

服を引きちぎって止血するレイヴンが言った。

空間魔道が展開されている。同時に、ご丁寧にも何の疑問も持たせないように高度な心理操作までやっている。

魔道士として気づくべきだった。

レイヴンは自分に痛みを与えることによって心理操作を断ち切った。それは、形は違えどかつてのナナト皇国軍で教え込まれた心理操作からの脱出方法だった。

「こんなときに役立つとはな」

敵と見限ったナナト皇国軍の力を借りるのは、なんとも腹立たしいことだった。自分達の服装や使用する銃、そして切り札である？ 戦略魔道兵器？の全てがナナト製であるのもまた然りだった。だが、自国で製造した銃に殺される警備兵達、そしてこれから自国で作り上げ、禁忌とした？ 戦略魔道兵器？がナナトの地に降り注ぐのはなんと皮肉としか言いようが無い。

出口が見えた。二人の兵士はつかれきっている様子だった。

「だらしない奴らだ、それでも我が部隊の精鋭二名か？」

レイヴンは叱咤する。

「申し訳ありません！」

少尉が言った。

螺旋階段が終わる。次に現れたのはレベル六十級空間魔道？アエテルアートル？の別空間だった。

空間中にレベル二十五級支援魔道？アルヴトウニト？で加速されたレベル二十級攻撃魔道？イグス？のライフル弾が大量に精製、発射される。

——トランプか！

防御障壁の展開が間に合わなかった曹長が全身に銃撃を受けて蜂の巣になった。レイヴンと少尉は防御障壁を展開して一瞬のうちに発射された百六十四発のライフル弾を全て防ぎきる。

「ブルコフ曹長！」

「曹長は名誉の戦死を遂げた、置いていけ」

言うところレイヴンは自ら棺桶を持って奥へ奥へと進んでいく。

「随分と頑張るじゃないか」

レイヴンは聞き覚えのある声に振り向いた。

「た、隊長……」

少尉が倒れた。

倒したのはクライヴだった。

「クライヴ・レミントン」

「覚えていてくれたんだ、ちつともうれしくないけど」

レイヴンはすかさず魔導拳銃を抜き、クライヴに向けて撃った。だが、クライヴの直前で銃撃がはじかれる。

「防御障壁。ガキがなかなかやる」

「あんたや、あんたの部下こそ的確に防御障壁を展開するな」

「俺達はただの外人部隊ではない。来るべき大陸外からの敵に対応するため、人為的に強化された？魔導兵士？だ」

レイヴンは言いながら魔導拳銃をクライヴに向ける。

「……？魔導兵士？？」

「魔道力を持つ兵士と持たない兵士の戦力差は魔道士一人に対して兵士十五人に相当する。その戦力差を埋める為に生まれたのが？魔導兵士？だ。だがカナヴェラルはその技術を応用し、別の方向性を作り出した。俺は部下と違って元から魔道士だった。その魔道士に強化措置をとることにより、更なる強い魔道を使える者を生み出すとした。だが、本来の目的である？ペルフェウルテ？の発動まではこぎつけられなかった」

「それで輸送列車を襲ったのか！」

クライヴは斬断剣を握り締める。

「そうだ。カナヴェラルが輸送ルートを割り出し、俺達が襲った。

ああ、そうか。お前の親父はその輸送任務に関わっていたんだっただな。運命とは怖いものだ。俺が殺したかもな？」

レイヴンはケタケタと笑う。

「まあいい。レギナ・エーヴェルハルトが手に入らない以上、俺が？ペルフェウルテ？を発動するしかないようだ」

「だって？ペルフェウルテ？には？鍵？が、レギナの魂が必要なんだろう？」

「徹底的に強化を受けた俺は、最後の手段となる？予備の鍵？だ。レギナ程の威力を発揮はできないだろうが？ペルフェウルテ？の発動は可能だ。ここは魔道砲台だ、俺ごと？戦略魔道兵器？を撃ち出し、ナナト皇国の中心であるアウグスト上空で？ペルフェウルテ？を発動させれば……」

言うとなレイヴンは、それまで持っていた魔導拳銃を放り投げ、胸ポケットから新しい魔導拳銃を取り出した。オートマティックとモリボルバーとも取れないその拳銃を握り、天井に向けて放つ。

レベル六十級攻撃魔道？アウルクス？の強烈な魔道レーザーが？アエテルアートル？の空間を切り裂いた。

「これもまたナナトが？一六式？と共に極秘開発していた魔導拳銃だ。魔導弾を単発で込めることしかできないが、今までのような魔導銃にあった制限が無い。その気になれば？ペルフェウルテ？すら発動可能にさせる武器だ」

「使い手がそんなんじゃ、銃がかわいそうつてもんだ」

乾いた音。

血飛沫。

防御障壁は間に合わない。

レイヴンが存在に気づくよりも早く、？インソネブラ？を多重展開していたレギナが狙撃銃でレイヴンの額を貫く。

「そこに居たか」

「何」

バランスを失ったレイヴンは、その場で踏ん張り、同時にレベル四十五級破壊魔道？第丁種フォルイグス？のロケット弾をレギナに叩き込む。

「自分だけが不死身と思うな」

不意を突かれたレギナは？第丁種フォルイグス？の直撃を受けて？アエテルアートル？の外に吹き飛ばされた。

「レギナ！」

「言っただけだ、俺は？予備の鍵？だと」

レイヴンは額にできた風穴をさする。魔道の力を借りてその傷が元に戻り始めた。同時に左腕に巻かれた止血の布を引きちぎる。布をぬらした血だけが皮膚に付着しているだけで、傷と呼べるものはもうなかった。

「……無限魔導弾」

クライヴは呟く。

「まずはお前を殺してからにしよう」

？アウルクス？によって裂け目のできた？アエテルアートル？の先に、砲台への扉が顔を覗かせていた。レイヴンはそれを確認すると、拳銃を再びクライヴに向けた。

「お前、俺を？父の仇？だと言ったな。同時に？ぶっ殺してやりたい？とも。今の気分を聞こうか？」

クライヴに所持武器が斬断剣？？式尋常剣？？しかないことを知ると、余裕の表情を見せてレイヴンは言った。

「気持ちは変わっていない」

——前衛？

——魔道士って奴は、戦闘のときに魔道を使うのがメインになるだろう？ 通常、魔道は同じレベルの魔道で防御障壁を展開すれば防ぐことができる。

——仮に完全に障壁を展開できる魔道士を相手にすると、魔道士は攻撃手段を失うことになる。

——そこで斬断剣を持つ剣士様の登場ってわけだ。

——魔道は魔道で防御をすることができ、斬断剣は斬断剣を用いて交わることができるが、魔道と斬断剣の場合は魔道が負けるんだ。つまり、防御障壁を展開する敵に対しては斬断剣の突破力が必要になる。

——そんなの知ってるよ。武術科の基本だ。

——俺は魔道士、お前は剣士、そういうこと。

——お前には、相手の攻撃を見切る力がある。

——天性の勘とでも呼ぶべきか。

——まあ、俺が支援するから安心しろ。

——任せろ、俺が助けてやる。自分の妹を信用しろ。

「そうか、では死ね」

レイヴンはクライヴに向けて？アウルクス？を放つ。

冷静に眼をつむる。

クライヴは信じた。

直撃？

ちがう。光が見える。

眼を開けた。

クライヴの前にマリオネットが防御障壁を展開して浮かんでいた。

「ヴェネリィ卿！」

「マリオネットの魔道力じゃ限界がある、だが奴はあの銃を制御しきれてはいない、？アウルクス？は照射魔道だ、撃ち切るのに時間がかかる。撃ち切る今のうちに奴を叩け！」

「わかった！」

クライヴは？アウルクス？の強い光を利用して死角に回り込む。

レイヴン自身の発している？アウルクス？の光と、それを受け止めているヴェネリィ卿の防御障壁の光が完全にクライヴの姿を消した。レイヴンは接近を許す。

クライヴの斬断剣がレイヴンの拳銃を跳ね飛ばす。

一閃。

だがレイヴンの驚異的な反射能力で服と胸の皮膚を軽く斬るだけだった。

血が浮き出る。

「何故再生しない……」

「魔道で命をつないでいる状態のお前を、魔道では倒せないかもしれない。でも——」

レイヴンの動揺の隙に詰め寄る。

クライヴに迷いは無かった。

「魔道は斬断剣に負ける」

クライヴは渾身の力を込めてレイヴンの背中から心臓を貫いた。

「貴様ああああああ！」

「父殺しの罪をあの手で償え！」

斬断剣に血が滴り落ちる。

レイヴンは貫かれた斬断剣を握り締める。

クライヴは斬断剣を捻り、思い切り抜いた。

貫かれたところから鮮血が飛び出た。

レイヴンは渾身の力を込めてクライヴを睨んだ。

その場に倒れる。

クライヴも斬断剣を投げて、その場に足から崩れた。

父の仇をとった事実よりも、人を殺した事実が大きかった。

自らの両手を見る。

この手が殺した。

この手が。

人を。

殺した。

吹き飛ばされたレギナは、ようやく動けるところまで復活し？ア
エテルアートル？の空間の中に帰ってきた。服も破けており、綺麗
なブロンドだった髪もくすんでいる。

ふと、レギナの視線にレイヴンたちが大事そうに扱っていた棺桶
が眼に入った。

元凶は破壊しなければ。

レギナは右手にレベル三十五級破壊魔道？第乙種フォルイグス？
の焼夷弾を用意する。

——すべて灰になってしまえばいい。

ふと、レギナは棺桶の蓋が開いていることに気づいた。

「中身が何かは知らねえが、まあ拝んでやってもいい」

レギナは蓋を蹴飛ばし？第乙種フォルイグス？を叩きつけ——な
かった。

中に入っているものを見て、レギナは驚愕した。

「俺の……体？」

魔道をキャンセルし、その右手で横たわる自分自身に思わず触れた。

？戦略魔道兵器？は俺の体だったのか。

クライヴは何も言わなかった。

もしも棺桶が開いていなければ、俺は自分自身を焼いてしまっところだった。

だが、何故クライヴは言わなかったのだろう。

——そんなこと、今は関係ない。

レギナは自分の体の左胸に手を置き、そつと眼をつむった。

「レギナ」

「クライヴか」

レギナは振り向いてクライヴを見た。

「何を、しているの？」

クライヴは静かに低く言った。

「見ればわかる」

「それだけは、させない」

言つとクライヴは斬断剣をレギナに振りかざした。

「ひとつ、質問をしていいか？」

「どうぞ」

「何故言わなかった。？戦略魔道兵器？が俺の体であることを。何故今の今まで隠してきた」

「不死身のレギナが？ペルフェウルテ？を持つのは危険だから」

「俺が使うわけ——」

クライヴは振り向くレギナの首筋に刃をあてがった。

「わからないよ。だって、自分以外の人間は、何を考えているかわからないものでしょ。僕には今レギナが考えていることはわからない。だから？ペルフェウルテ？をレギナが使おうとしている可能性だってある」

「兄様みたいなことを言う」

「僕は君の兄だ」

「アーウィン兄様だよ。あの男も似たようなことを言っていた。アーウィンはナナレイ戦争で部下に裏切られてから人間不信になった。実の弟である俺の言葉すら信じなくなった。だから俺をこの体と今の体に分けて、俺を封印したんだ」

「お願いだレギナ」

「悪いなクライヴ。俺は根っこから善人ってわけじゃないんだ。これは俺の体なのだから、返してもらって当然だろう？」

「だとしても！」

クライヴの刃が一瞬揺らいた。レギナはその隙を見逃さなかった。レベル十級攻撃魔道？ウェトス？を発動。

レギナはクライヴが剣を振るより早く衝撃波をクライヴに当てた。

「レギッ」

クライヴは零距离で衝撃波を受け、空中を待った。

遠く離れた地面に叩きつけられる。

「……こうするしかなかったんだ、こうするしか」

レギナの体が魔道の青い光を放つ。

あの日、アーウィンもそうした。

俺の体から魂を抜き取り、女の死体に入れた。

女の死体——アンリエッタ。

俺の恋人だった。

兄様は、どうしてアンリエッタの体を選んだのか、それはわからない。

俺の魂を受け入れたアンリエッタの体は、俺の魂に馴染むように体の構造を作り変えていった。

黒かった眼は、碧色に。

栗色の髪は、金色に。

顔のつくりは、女そのものだったが、どこか幼い頃の自分に似ていた。

兄がそうしたように、今度は俺が俺自身の魂を戻す音がした。

体を突き通す冷たい金属の音。痛みはない。

突き刺さったことも感じない。

これが、俺の体なのか？

レギナは、そっと眼を開けた。

自分の体には、何も刺さっていなかった。

ふと、棺桶の中を見る。

「レギナは、僕の妹として生きると決めたはずだ。昔の自分は死んだのだと、別人だと、なのに、どうして今になってそんなに未練がましくなるんだ！」

斬断剣が、過去の自分に深々と突き刺さっていた。

まるで、自分を突き放すように。

もしかしたら、そうしたかったのは俺自身だったのかもしれない。クライヴが変わりに過去との決別を済ませてくれたのかもしれない。

——兄様が。

？戦略魔道兵器？は、斬断剣によって少しずつ灰にかわっていった。

魔道によって時が止まっていた体は、今ようやく自然の中に流れていく。

「……ありがとう、兄様」

「レギナ……」

「俺達？ペルフェウルテ？を止めに来たんだよな」

「うん」

「あっちゃいけないんだ、こんなもの」

「うん」

レギナは一度大きくため息をつく、ゆっくりと立ち上がった。「行こう、兄様」

「どこへ？」

「……………」

「考えてなかった？」

「うるさいな、とりあえずこんなところに居たって何の意味もないと言ったんだ。とにかく別のところ！」

「……………わかった、レギナ」

魔道砲台に展開されていた？アエテルアートル？が修復されていく。砲台の入り口は再び伝説のものとなり、無限の空間が現れた。

？アウルクス？の直撃を受けたヴェネリィ卿は、自らの限界以上の防御障壁を展開したことにより、焼失していた。レギナがそつと拾う。

「マティアス卿、メレディス卿に続けてヴェネリィ卿まで失うとは……………」

「思っただけどさ、そのマリオネットって誰が作ったの？」

「俺だ。ヒイツミ大陸に存在するありとあらゆる樹木を調べ抜き、世界で十本とない人間以上の魔道力を持つ？ヨゲナリスレ？の木から十二体全てを作った。貴重な木だったから、もう同じものは作れないな……………」

「そう、ごめん……………」

「まあ砲台に永久封印したアルトゥール卿を除いたって、まだ八体居る。それに、代価品なら作れないこともない」

「そっか……………」

「だからと言って、そうそう簡単に投げ出されちゃ困るけどな」

クライヴは、レイヴンの死体の横に転がっていたレイヴンの銃を拾い上げる。中折れ式のその中には、無限魔導弾が一発入っているだけだった。

「レギナ、いる？」

「レベル六十級魔道にも耐えうる魔導銃か、確かに魅力的だな……………」
言っとレギナはクライヴから銃を受け取った。

しかしレギナは、受け取ると直ぐに銃を遙か上空に投げた。

それをクレー射撃のように狙撃銃で撃ちぬく。

レイヴンの銃は空中で四散した。

「魅力的だけど、俺にはいらぬ」

螺旋階段を下りきった屋上では、生き残った敵兵士が警備隊によって確保されていた。

東の空から朝日が昇る。

最初に二人の姿に気付いたのは、屋上に上ってきたテレーゼだった。テレーゼはエリーザから直伝で教わった治癒魔道を使って、警備兵達の傷を癒していた。

「クライヴ、レギナ！」

テレーゼは二人に駆け寄る。

「テレーゼ。よかった無事だったんだね」

クライヴは言った。

「お祖父様に秘密の脱出路を教えてもらったの。お陰で戦場のほうを抜けずに済んだわ」

「あのクソジジイ。俺達がせっかく脱出路を確保したのに……」

レギナは愚痴る。

「レギナ・レミントンさんとクライヴ・レミントンさんですか？」

呼ばれたほうを振り向くと、ライヒシュタイン魔道学校の生き残った警備兵が揃っていた。当初三十人近く居た、同時に突撃した警備兵も十二名を残すあまりだった。

「警備兵か」

「是非、お礼をさせて頂きたいのです」

「お礼？」

「あなた方の活躍で、我々は生き残ることができました。他の兵士達に変わって感謝の言葉を述べたいと思います」

「よせよ。俺達はあるたらを巻き込んだんだ……そんなこと言われるようなほどのことは」

レギナは言った。

「素直じゃないな、レギナ様は」

警備兵達に混ざって、一人の男が言った。

「感謝されるのは悪いことじゃないですよ、レギナ様」

警備兵達に混ざって、更にもう一人の男が言った。

「ユリウス、マコーシェ」

レギナに名を呼ばれた二人は、同時に敬礼をした。

「クライヴ！ クライヴとレギナは何処？」

兵士達を割って入ってきたのは、エリーザだった。

「師匠！ いつこつちに——」

テレーゼが言う。

「お屋敷の車を使って飛んできたわ。私の息子と娘が大変だってお父様から聞いたものだから」

「娘だつてさ」

クライヴがレギナに言った。

「何かおかしいか？」

レギナはクライヴを見る。

「いいや、別に」

「よかった、ちゃんと生きてるじゃない。噂好きの侍女達にそそのかされてものだからびっくりしたわ。とくにレギナ、私に何も言わずに出て行くんですもの。ちゃんと出かけるときは言いなさい」

エリーザが母の口調でレギナを叱った。

「だってレオハルトに——」

「レオハルト？ お祖父様？。もうすこしエーヴェルハルト家の令嬢らしい上品な口調で喋りなさい」

「……はい、お母様」

レギナが反省する。

「クライヴ、よかった。元気そうね」

「何年も会っていないような言い方だね」

「ええ、私には何年も会っていないように思えたわ」

「ご心配おかけいたしました、お母様」

クライヴが言った。

* * *

事件から一ヶ月が経過した。

オルドレイサンシ地方の？戦略魔道兵器？強奪事件からの一連の事件は？ナナト陸軍外人部隊反乱事件？としてまとめられ、世間を騒がせた。

？戦略魔道兵器？についての発表はなく、その存在は永久に闇の中に葬られることになった。ナナト皇国軍では、外人部隊の編制について疑問視するものも多く、皮肉にもこれを機に正規軍への編制が決定した。名目上では、外国人の監視目的での正規軍編制となっていたが、差別化された軍がすべて一つになった。

ナサニエル・カナヴェラル陸軍情報部少佐の殺害と、陸軍特務部隊大尉エゴール・ドラドの殺害容疑で当初重要参考人として出頭を求められていたレギナ・レミントン及びクライヴ・レミントンは、一転してナナト軍から暴徒鎮圧の英雄として感謝状と勲章が送られた。

クライヴとレギナはエーヴェルハルト家の、庭の墓地に眠る父ヴェルナ・レミントンの墓に挨拶に来ていた。

優しい風が吹いている。

クライヴは、軍からもらった勲章を父の墓の前に差し出した。

「父さんは、多分僕に仇討ちなんてしてほしくなかったかもしれないけど、僕はやったよ。僕のために。でも、この勲章は父さんにあげることにする。偉大なるレミントン中佐こそ、勲章をもらうに相応しい存在だと、僕が思うから」

レギナも、それに合わせて墓石の上に金色の勲章をおろした。

「できることなら、生前にお会いしたかった。二百八十四年前に生まれた俺は、不思議なことに今はあなたの娘です。娘で、クライヴの妹ではありますが、クライヴやエリーザを守っていこうと思いま

す。俺も、あなたと同じ元軍人です。軍人である俺は、大昔に死にましたが、でも誇り高きナト軍人としてつちかってきた、義務を全うするということを決して忘れはしません。多分、俺より先にクライヴやクライヴの子孫達がそっちに行くことになると思います。貴方には恐らく永遠に会うことはないと思いますが、どうか別の形で俺達を見守っていてください」

言つと、レギナは墓前でナト皇国流の敬礼をした。

報告を済ませると、二人は屋敷へと歩いた。

「なあ、兄様」

「ん、何？」

「俺、魔道学校対抗魔導ライフル射撃競技の代表選手になることになつたんだ」

「本当に？」

「嘘は言わない、ヴィルフリートとイクセルが俺を抜擢してくれた。それと、再来月の創立二百周年文化祭あるだろ、あれでも射撃をやることになつたんだが……」

「すごいじゃないか、応援するよ」

「その……いいのかな、俺なんかが出ちゃって」

「どうして？」

「いや、その……なんというか、俺、他の奴より能力が高いからさ。ぶつちぎっちゃうとマズいと思って」

「レギナはレギナの実力を見せ付けられればいいと思うよ。ほら、アーウィンさんの遺書にもあったでしょ？自分の生きたいように生きろ？ってさ」

「そうだな、わかった。頑張るよ」

「その意気だ」

「さすが兄様だ、良いことを言うな」

「兄妹を励ますのは義務でしょう？」

「ところで兄様、ひとつ質問いいか？」

「ひとつと言わずいくらでも」

「わかった。じゃあまず一つ、夏休み中に補習授業何個すつぽかした？」

「……う」

クライヴは両手の指を折って数えた。あと指が二十本ほど足りない気がする。

「二つ、ラングフェルド先生の眼鏡代をどうする？」

「……あれはレギナが悪い」

「三つ、ハチコウのエサだが、飼育委員から苦情が来ていた。そろそろ無断で奪ってくるのやめたほうがいいぞ」

「……わかった。ていうかバレてたんだ」

「四つ」

「まだあるの？」

「次が最後」

「あ、そう」

「四つ、実はテレゼなんだが、クライヴには言ってなかったけどライヒシュタイン魔道学校に編入することになったんだ。しかも魔道科の癖に武術科の俺達と授業がまる被りしている。質問しても意味のない、ただの事実報告だが――」

クライヴは頭を抱えてしやがみこんだ。

「どうした？」

「い、いや……」

「テレゼ、苦手なのか？」

「……うん」

「苦手な要素が見つからないけどな」

「レギナはまだテレゼと付き合って日が浅いからだよ。何回アイツに手を焼かされたことか……」

「うーん。よく判らないけど、察するよ。俺も協力できるところは協力する」

「うん、ありがと」

学校へ戻るための荷支度をする。屋敷には新たにテレゼ用とレギナ用のライヒシュタイン魔道学校女子制服が届けられていた。

テレゼはともかく、レギナは今までずっとラングフェルドのクローゼットから拝借した古い制服を使っていたので、最新式のものに腕を通すのは初めてだった。

「レギナって、髪綺麗よね」

先に着替えを済ませたテレゼが、レギナの長い髪を触る。

「ああ、俺の自慢だ」

「レギナ様、もっとお上品に」

レギナ付きの侍女が制服のボタンを閉めながら言った。

「……わ、わたくしのじまんでございますのよ」

——死にたい。

「あたしがとかしてあげる」

言つとテレゼは物体をレギナの腰まで伸びた金色の髪に通す。

だが、何故かレギナの頭に激痛が走った。

「いってえ！ なにしやる！」

「レギナ様！」

「い、いたいですわ……なにをなさっていらっしゃるの？」

「え？」

振り向いて見たテレゼの手には畜産用のブラシが握られていた。

「……何、それ」

「ブラシ」

何の疑問も無くテレゼは言った。

「うん、それはわかる。でもそれは人間に使うものじゃないと俺は思う」

「え？ そうなの？」

何の疑問も無くテレゼは驚いた。

——誰かこいつ締め出してくれ。

クライヴがテレゼを苦手とする理由が、少しだけわかったような気がした。

テレーゼと過ごしていると、何故か異常に疲れる。運動の疲れではない、何かものすごく面倒くさい疲れだ。

「二人とも、用意はできた？」

部屋の外でクライヴが呼ぶ。

「そこで待つてろ」

「レギナ様、何度言えばお分かりですか？」

侍女がレギナを注意する。

「……そ、そちらでまっついてくださいまし」

——いっそのこと撃ち殺してしまおうか。いやいや。

だめだ、落ち着けレギナ。今日からは御淑やかな女子で居なくてはならないのだ。

そうでなければエリーザに怒られる。リネアに怒られる。レオハルトに怒られる。ヴィセラスは……わからない。

先程からどうして自分ばかりで、テレーゼを怒らないのか疑問に思う。明らかに年齢より幾分か幼く見えるテレーゼのほうが自分より注意の対象になるような気がする。

「あ、あのう……どうしてさっきからわたくしばかりにちゅういなさるの？」

レギナは髪を梳かす侍女に尋ねる。

「レギナ様だからです」

侍女はきつぱりとそう言った。

「……そうですか」

クライヴが家を嫌い、魔道学校の生活を一日でも早く望んだことに納得がいった。どうにも昔より住みにくい。侍女はうるさいし、執事もうるさいし、息苦しい。

支度を済ませると、正門の前で車が待っていた。今日の正門の警備はマコーシェとユリウスらしい。

「お似合いですよ、レギナ様」

マコーシェがレギナに呼びかける。

「……うるさい」

「俺は狙撃銃をもつ勇ましいレギナ様のほうがっこよくて良いと思うけどな」

ユリウスが言った。

「お前から黙って警備を行え。申し訳ありません、レギナ様」

警備隊長アイバックが言った。

「いや、いい。気にするな」

「レギナ様！」

侍女が叫んだ。

「……ああ、もう。俺におしとやかにしろって言うほうが無理なんだよ！ こんな息苦しいお嬢様生活なんてうんざりだ！　せめて口調ぐらい好きにさせろ、俺は昔っからこの口調で過ごして来たんだ、今更変えられるか！」

ついに耐え切れなくなったレギナが爆発した。今にも高位魔道を放ちそうなレギナをクライヴが制止する。

「レギナもういいってば……」

「なんととはしたない言葉、訂正をしてくださいレギナ様！」

「うるさい黙れ！　俺は俺だ！」

「ミセスももうやめてって……」

「大体貴女は女性としての言葉遣いになってないと言いたいのです！」

「俺に女性の云々を説くな！」

「いい加減にしろ！」

とうとう温厚なクライヴの堪忍袋の緒が切れた。これにはマコーシェとユリウスを初めとした周囲の人間も驚きを隠せなかった。

「これから新学期なんだよ？　どうして仲良くできないの？　エーヴェルハルト家の人間として僕が恥ずかしい」

「？　エーヴェルハルト家？　という単語が強烈だったようで、レギナと侍女は同時に声を失った。

「く、クライヴ様がそう仰るのなら。でも、レギナ様には普段からお気をつけ願いたいと思ったので」

侍女が言った。

「お、お兄様がそういうのなら。わたくしも以後、きをつけますわ」
レギナが言った。

クライヴ、レギナ、テレーゼの三人は、ライヒシュタイン行きの大陸間横断鉄道に乗り、カラヴレーゼから出発した。

車窓から望む景色は、どこまでも田園や平原の続くのどかな景色だった。

レギナは暇つぶしに鞆からスケッチブックを取り出して、ひとりで絵を描き始める。それはどうやら新たなマリオネットの設計図のようだった。

「レギナって絵が上手いのね」

テレーゼが感心する。

「まあな」

「何を描いているの？」

「マリオネット。そうだな、名前は？アーウィン卿？とでもするか」

「可愛いわね？」

「だろう？」

相変わらずレギナが描画するマリオネットは例外なく不気味だな、とクライヴは絵を見て思った。

少なからず、両目がいびつで口が耳の辺りまで到達していて、にたあと笑う絵を見て可愛いと思う奴は、このヒイツミ大陸でもレギナとテレーゼしかないに違いないと思った。

——でも、これはこれでありかなと思う僕もいる。

大陸間横断鉄道の列車の客室に乗る乗客は、ほとんどがライヒシュタイン魔道学校の生徒だった。長い帰省を終えて学校に向かう者、部活動や授業で遠出をしていた者、または何かの用事で出かけていた者。でも、生徒達の顔はみんな明るくて、楽しそうだった。

——なんだかんだで忙しい夏休みだった。

あの太陽がもう少し上に昇った頃には学校に到着するだろう。

流れる緑色の景色を見ながら、クライヴはそつとまぶたを閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0614v/>

エーヴェルハルトの血筋

2011年7月22日03時36分発行